
辺境令嬢與人物語

ムク文鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

辺境令嬢輿人物語

【NZコード】

NZ8516V

【作者名】

ムク文鳥

【あらすじ】

辺境の小貴族の令嬢として生まれたミフィーシーリア・アマロー。彼女が16歳の時、側妃にと望まれた彼女は後宮に上がる。そして「女の戦場」とも呼ぶべき後宮で彼女が出会ったのは、予想していたものとはまるで違う他の側妃たちだった。
そして想定外だったのは側妃だけではなく、国王その人もまた…。

この小説は、作者のもう一つの小説『魔獣使い』と同じ背景設定、

同じ時代設定を用いています。時々ちょっとびりクロスオーバーします。

2011/11/2 あらすじ修正

序章（前書き）

もう一つの新連載。
いつもおつかれ様でした。

その国は病んでいた。

それも末期の死病に。

大陸の最北端に存在するその国は、他国から見ればさほど魅力のない国だった。

雪の多い土地柄ゆえに水は豊富なものの冬が長く、作物を育てるには不向き。

平地よりも山地が多く、森林資源や鉱物資源はあるものの、莫大な軍事費を注ぎ込んでまで手に入れようとする程のものでもない。それゆえに大陸に存在するどの国も、征服よりは交易でそれらの資源を求める選んだ。

逆にその国は、それらの資源を提供することで、長い冬のための食糧を買い込むことができた。

そんな持ちつ持たれつの関係が、その国を争いとは無縁の時間を永く過ごさせることになる。

永い永い平穏がその国をゆっくりと、だが確実に腐らせていったのだ。

王侯貴族は民を守ることよりも、自身の欲望を叶えることばかりを考えるようになり、当然その皺寄せは民たちへと向けられる。

ただでさえ少ないので作物は、その殆どが支配者階級に占められて。貧しい民たちは、作物の育たない長い冬の間に農作業以外の仕事をすることで何とか生き長らえている状態。

それを知つてなお、支配者たちは民に手を差し伸べることはせず、それどころか自分たちの懐を暖めるため、より厳しい税を課していくまさに悪循環。

贈収賄がまかり通り、国内の治安も荒れに荒れ、街や村の外側では野党や追い剥ぎが、そして内側では盗賊が好き勝手に暴れ回る。

そんな艶み爛れ、腐れ落ちる寸前の状態に、支配者たちは気付いていない。いや、気付いていたとしても気付かない振りを続けていた。

そんな末期の死病に取り憑かれた国。その国の名はカノルドス王国といった。

カノルドス王国の屋台骨たる支配者たちは、自分の利益ばかりを追求し、民を救うどころか支配者同士で互いの足を引っ張り合いつ。より一層の財を求め、自分よりも財を持つ者を陥れようと。より高い地位を得ようと、自分よりも高い地位の者を亡き者にせんと。当然見向きもされぬ被支配者たちは、ますます貧困に喘ぐことになる。

だが、そんな朽ち果てるのを待つばかりのカノルドスに、一筋の光が射し込んだ。

腐り果てた支配者たちを打倒しようと、一人の少年が立ち上がる。その少年は幾つかの心ある辺境の小貴族の協力を得て、『カノルドス解放軍』を立ち上げた。

しかも、その少年は自身が遠く王の血を引くと主張し、自身こそが王位に相応しいと告げて。

その王の証こそが、その少年が身に宿す異能であった。

異能。

それはまさに通常では考えられぬよつた異常を引き起こす力。異能には様々な種類がある。手を触れずに物を動かす物、他者の心を読む者、動物や植物と心を通じ合わせる者など。

かつては、異能を持つことこそが王の証とされた時代があった。

これはカノルドスの建国王が異能者であつたからだとされ、事実カノルドス王家には多くの異能者が生まれた。

元々異能者は千人に一人、万人に一人とも言われるほど、異能を持つ者は極めて少ない。

そんな異能を持つことこそ、王として選ばれる条件とされていたのだ。

だが長い年月の中で、王の血筋に異能が現わることが徐々に減つていった。

事実ここ数代の王の中で、異能を宿した者は一人もいない。だが少年は、そんな異能を実際に一つも宿していた。

一つは如何なる敵をもなぎ倒す『雷』の異能。

もう一つは味方のどんな傷でも癒す『治癒』の異能。

とりわけ『雷』の異能は、長いカノルドス王国の歴史の中でも、王族にしか現れただけないとされ、まさに王の証ともいづべき異能であった。

この『雷』の異能こそが自身が王たる証であるとして、少年は腐り果てた支配者たちへと戦いを挑んだ。

これが後の世に『解放戦争』と呼ばれる戦いの始まりであった。

『解放戦争』は一年に渡り続き、少年はその戦いに勝利する。

『カノルドス解放軍』は少数ながらも高い士気と練度を誇り、数の上では圧倒的に不利でありながら、王国軍に一歩も劣らず戦い続けた。

これはもちろん少年が持つ異能のなせる業。そしてそれだけではなく、少年は人々を惹き付ける何かを持っていた。

数多くの優秀な人材が少年の元に集まり、寡兵ながら『カノルドス解放軍』は戦つた。

もちろん時に敗走もしたが、『カノルドス解放軍』は最後まで戦い続けた。

更に加えて、類が友を呼んだのか、それとも天の采配か。少年の元には少年以外にも異能者が集つたのだ。

優秀な人材、複数の異能者、そしてなにより民衆の支持。

数では勝りながらも、腐れ爛れ切つた王国軍が『カノルドス解放軍』に敵うはずがなく、一年という僅かな月日で少年は玉座へと辿り付いた。

共に戦つた『カノルドス解放軍』の仲間たちを国の中核に据え、少年は新生カノルドス王国の誕生を宣言した。

沸き返る民衆は口々に少年の名を口にし、新しい王国と新しい国王の誕生を祝つた。

コイシーケ・アーザミルド・カノルドス1世。それが新しい国王の名前であった。

この時少年は僅か16歳。実に年若い国王の誕生であった。

新王国と新国王の誕生から2年。
とある辺境の小貴族の少女が巻き込まれた事件から、この物語は始まる。

序章（後書き）

序章は『魔獣使い』と共に仕様。最後の一文だけ違います。

01 - 辺境令嬢の縁談（前書き）

『ひりもじ』から本格始動。

『魔獣使い』同様、よろしくお願いします。

01・辺境令嬢の縁談

「すまない……」

と告げると、壮年の男性が力なく頭垂れた。

「そんな……お父様が謝るような事ではあつません」

対して、壮年の男性の前に腰を下ろした黒髪の少女は、毅然とした態度でそう告げた。

「向こうの要求通り、私はアルマン子爵に嫁ぎます。元々アマロー家は弟のシガルが継ぐ予定でしたから、後継ぎの心配はありません」「ミハイ……」

あつぱっと言い切った愛娘に、アマロー男爵は再び申し訳なさそうに視線をそらす。

「すまない。まだ一歳のお前に迷惑をかける……だが、これも領民のためだ」

再び頭を上げた父に、ミハイシーリアは苦笑を浮かべる。

「安心してくださいお父様。アルマン子爵家は我がアマロー家と違つて裕福な家です。きっとなに不自由ない暮らしができるでしょう」

そう言つてミハイシーリアは微笑んだ。

アマロー男爵家は、貴族ではあるものの貧しい家柄だった。

領地は大陸の北端に位置するカノルドス王国の中でも最北端。最も雪深い地方に存在した。

そこに住む領民も少なく、領地には村が一つ存在する限り。その

村の人口も百人に満たない小さな村だ。

そして特に目立った特産品もなく、稀少な鉱物が採れるわけでもなく。

近くにある大きめの町の、羽振りの良い商人の方がよほど裕福であるという、極めつけの貧乏貴族だった。

更に加えて今年は凶作。村で栽培している麦は例年の半分ちょっとという大凶作であった。

このままでは、アマロー男爵家はともかく領地内の村は冬を越せない。そう考えた男爵は、隣接する領地を持つアルマン子爵に援助を申し込んだ。具体的には子爵領に蓄えられた食糧を、相場よりも格安譲つてもらおうとしたのだ。

アルマン子爵領とて豊作とは言い難い収穫だったが、それでも男爵領よりはましだし、何より子爵領は男爵領よりも遙かに広く、農業以外にも産業がある。国に納める税の分を差し引いても十分な余裕があるらしかった。

それにどうやら、税収以外にも何らかの方法で金を得ているらしい。

というのも、アルマン子爵はアマロー男爵同様、先に起きた『解放戦争』では旧王国、解放軍どちらにも組せず中立の立場にあった。彼ら以外にも中立の立場を取った貴族はいたが、そんな貴族たちは新王国の体制の中で、要職からは当然ことごとく外された。

だからアルマン子爵もアマロー男爵も、役職による給金はなく税収だけが収入の全てのはずである。

それなのに、アルマン子爵の羽振りの良さはアマローディク男爵の耳にもよく入ってくる。

だから子爵は何らかの事業に手を出していて、それが上手くいっ

ているのだろうと男爵は考えていた。

だからこそ、アマロー男爵はアルマン子爵に援助を申し込んだのだ。

その申し出に対し、子爵は援助する代わりに一つの交換条件を出した。

それはアマロー家の長女であるミフィーシーリアを、子爵の妻にしたいという申し出だつた。

アルマン子爵は既に40歳を越えている。対してミフィーシーリアは16歳。年齢的に離れているが、貴族社会では珍しいわけでもない。

アマロー男爵は、アルマン男爵の奥方が数年前に病死したと聞いていた。

だが、子爵は女癖が悪いことでも有名であり、それはカノルドス王国の貴族なら誰もが知っているほどであった。

現在も数人の愛人がいるらしく、中には領民の中から租税代わりに無理矢理妾にした女性もいるという噂もある。

アマロー男爵にとって、ミフィーシーリアは自慢の娘であった。同世代の娘たちに比べてやや小柄であるものの、決して痩せ過ぎているわけではない。

一見では控え目な印象の大人しそうな少女だが、雪のよくな白い肌とそれを際立たせる腰まで長く伸ばされた黒髪。

その黒髪と同じ色の瞳は黒曜石のように輝いていて、十分美しいと表現できる容姿を持っている。子爵に望まれるのも納得できる娘であった。

貴族の家に生まれながらも、決して贅沢を求めるわけでもなく、貧しい生活に文句の一つも言つたことはない。

誰にでも優しく接する性格は、領民からも人気があり慕われている。

できることなら男爵とてこんな話は断りたかった。

だが、断わるわけにはいかない。領民を守ることは領主の務め。

その思いが男爵に我が子を差し出す決心をさせた。

「三日後にアルマン子爵本人が当家を訪れる事になっている。まずは顔見せの挨拶のためだが、できればそのまま子爵領へお前を連れて行きたいとの要望だ」

「はい。三日後ですね。それまでに準備をしておきます」

娘の返事を確認すると、男爵は決して娘の顔を見ようとしないまま、静かにその部屋を後にした。

「三日後に結婚……ですか……」

ミフィーシーリアはぽつりと咳きながら一人外に出て屋敷を見上げた。

屋敷といつても領民たちの家よりは少し大きいといつただけで、屋敷と呼ぶにはおこがましいほどのものであつたが、それでもミフィーシーリアにとっては生まれ育つた家である。当然愛着だつてある。その家を三日後には後にしなければならないなんて。

確かに急に決まった話とはいえ、いくらなんでも急過ぎやしないだろうか。ミフィーシーリアは小さく溜め息を吐く。

屋敷を一通り見つめた後、ミフィーシーリアは黙つて村へと続く道を歩く。

しばらく歩けば、領地内唯一の村が見えてくる。

そのまま村に入るミフィーシーリア。そんな彼女を見かけた領民たちが、親しげに声をかけてくる。

「おや、お嬢様。何か買物かい？」

「いえ、買物ではなく、ちょっとした散歩です」

「なんだ、そうかい。あ、そうだ。お嬢様に知らせなきゃいけない

事があつたんだよ

なんだろう？と軽く首を傾げるミフィーシーリアに、畠仕事の合間に声をかけてきた中年の女性が、声を小さくして彼女に告げる。

「あのね、今日、村の中で見慣れない連中を見かけたんだよ」

「見慣れない連中？」

「ああそうさ。あたしが見かけたのは得体の知れない三人組……男が二人と女が一人。三人とも武具を身につけていたんだ。まあ、単なる旅の傭兵か魔獣ハシタ狩りもしかりないけれど、一応領主様にも伝えておいてくれないかい？」

女性の頬みを笑顔で引き受けて、ミフィーシーリアはその場を後にする。

だが、本当は先程の女性の言葉がミフィーシーリアの心のどこかに引っかかっていた。

旅の傭兵か魔獣狩り？それはまず有り得ない。

近隣の森や山地には少數ながら魔獣が棲息しており、その魔獣が村に姿を見せる事がある。

そんな時は領主であるミフィーシーリアの父が、傭兵や魔獣狩りを雇つて駆除を行う。

だが、父から最近魔獣狩りや傭兵を雇つたという話は聞いていない。

その他に傭兵や魔獣狩りが村を訪れるとすれば、それは行商人の護衛としてだらう。

その行商人にしても、普通は領地内で商いを行うための商業税を支払うため一度は領主の館を訪れるはず。

だけど、そんな行商人も最近は訪れていない。

では、その三人はなんのためにこの村に？それがミフィーシーリアの疑問だった。

先程の女性の話では、その三人はこの村にある唯一の宿屋兼酒場である「紅雀の巣箱」亭に泊まっているらしい。

いつしかミフィーシーリアの足は、自分でも自覚しないまま「紅雀の巣箱」亭へと向かっていた。

「うわああああんつ！！」

「あん、もうつ！！ 泣かないでよつ！！」

「だつて……だつて……うわああああああああんつ！！」

「にやああああつ！！ わっせより泣き声が大きくなつてゐつ！」

「だ、だつて……い、い、痛いんだもんつ！！」

「痛いっていつたつて、転んで膝小僧を擦りむいただけでしょつ！」

？

場所は「紅雀の巣箱」亭のすぐ前の道端。

地面に座り込み、膝から血を流して泣きわめく五、六歳の幼女。そしてその傍らで、腕を腰にあてたまま仁王立ちでその幼女を見下す一人の少女。

その少女は自分と同じぐらいの年頃で、魔獣の革製と思しき防具を身体の各所に身につけ、腰には小振りな鋼製の剣を装備した。陽光の元であるで透き通るよう輝く長い銀の髪。その髪が動き易さを重視したのか所謂ツインテールに纏められて、彼女の頭の左右できらきらと揺れている。

そしてその瞳の色は、銀の髪に負けない黄金の煌めき。

瞳に宿る輝き同様、全身から躍動感が溢れ、この少女が活発な性格であることは、誰の眼から見ても明らかだろう。

そして情況を察するに、幼女が転んで怪我をして泣いているようだ。

ミフィーシーリアはその幼女に見覚えがあった。いや、この村に住

んでいる住民は全員顔見知りなのだが。

確か「紅雀の巣箱」亭の主人夫婦の娘で名前はリーネ。今年で六歳になるはずだ。

だが、その傍らの少女は見覚えがない。

とりあえず、今はその見知らぬ少女よりも、泣いているリーネの方だ。

そう思つてミフィーシーリアがハンカチを取り出しつつ、彼女たちの方へと一歩足を踏み出した時。目の前に展開された光景にミフィーシーリアは我が目を疑つた。

「……もうっ！ 仕方ないわねっ！」

乱暴に言い方捨てる少女。だが、その微笑みは慈愛に溢れ。

そして少女は、出血しているリーアの傷口へとその掌をかざした。傷口近くにかざされた少女の掌。その掌が翡翠色に淡く輝いたかと思つと、リーアの傷口がみるみるうちに小さくなり、ついには傷そのものが消滅してしまった。

「…………治癒の…………異能…………？」

呆然と呟くミフィーシーリア。そんな彼女に気づかずに、異能を用いて傷を癒した少女は、いまだに地面に座り込んだまま、ぼけつと自分の膝小僧を見つめているリーアに優しく諭す。

「いい？ この事は誰にも言つちやだめよ？ あんたとコトリだけの秘密だからね？」

ぱちんと器用に片手を瞑つた少女。その少女が振り向き ミフィーシーリアと目が合つ。

途端、少女の口元がひくひくと引きつり、顔色が見るまに青く変

わ
る。

「！」やあああああああつ！－み、見られたつ！？まつずううう
ういつ！－こんな事がバレたらパパにお仕置きをだるうううう
うつ！－」

真っ青になつて喚く少女は、ばばばばばつと//ヒヤシーリアに駆け寄ると、がしつと彼女の両肩を掴んだ。

「那邊去？」

「あ、あんたつ！！ い、いいいいいい今の見てたつ！？」

頭を抱えて喚きながら、その場にうすくまる少女。

ミフイ シーリアも怒濤の如く流れる情況に置いてきぼりにされ、
きょとんとするばかり。

そしてようやく立ち上がりたリーアが、フライシーリアに会って、彼の方へと駆け寄ろうとした時。

その場に若い男性の声一種類が響いた。

「ヨーロッパ、同ソ連、米国」

「そんなに大声で喚いたら、近所迷惑ですよ？」

卷之三

そして「紅雀の巣箱」亭の玄関のドアが開けられ、そこから一人の男性が姿を見せた。

一人は重厚な魔獣の素材を用いた防具と、やはり魔獣素材の両手用の大剣を身につけた金髪に碧眼の男性。

もう一人は武具といえど腰に差した長剣ぐらいで、あとは有りふれた旅人の旅装姿の薄茶の髪に青い眼の男性。

どちらもミフィーシーリアより少し年上、多く見積もつても二十歳を幾つも超えていないだろう。

彼女に見覚えのない二人組。いや、いまだにつづくまつて喚いている少女を加えれば三人組か。

(この人たちが……)

目の前にいる見知らぬ三人組。彼らこそが村に現れた得体の知れぬ三人組に違いないと、ミフィーシーリアは悟った。

01 - 辺境令嬢の縁談（後書き）

いつも『魔獣使い』同様のんびりと更新していく予定。

今後ともよろしくお願いします。

02・三人の旅人たち

「そうですか。ここのご領主のお嬢様でしたか」

例の三人組の一人、長剣を下げるどこか冷めた印象の薄茶の髪の男性が答えた。

「はい。当地の領主、アマロー男爵の長女で、ミフィーシーリアと申します」

そう名乗ったミフィーシーリアに、これはこれは「丁寧に」と先程の男が改めて頭を下げた。

あれから呆然としたままのミフィーシーリアの前で、三人は言い争いを始めた。

もつとも言い争いといつても、「治癒」の異能を使つた少女が喚くのを、残る二人が苦笑しながらなだめていただけなのだが。

その後三人は、ぼーっと見つめたままつたミフィーシーリアにようやく気づき、自分たちのことを説明すると言つて場所を「紅雀の巣箱」亭の中へと移した。

そして客のいない酒場のテーブルに一つを占め、互いのことを説明し始めたのだ。

「私は市井で学者を営んでおります、ケイルと申します。この二人は今回の旅のために雇つた護衛として」

そう言つてケイルと名乗つた男が、彼の両隣に腰を下ろしている二人に視線を向けた。

その視線に促され、二人はそれぞれ自分の名を名乗る。

「俺は、ジョイクってんだ。ま、見てのとおり魔獣狩りだな。ちなみに、こいつとは幼馴染の腐れ縁だ。よろしくな、貴族のお姫様」

と、先程大剣を持っていたジョイクという名の金髪の男は、にへらつと笑つて隣のケイルを親指で指す。

指されたケイルが小声で「余計な事は言うな」と言つたのが、ミフィーシーリアの耳に届いた。

「……コトリ……」

対してもう一人。先程「治癒」の異能を使ってみせた少女は、ケイルの影に隠れるようにしながら小さく告げた。

「コトリ……？」

「ええ、この娘の名前はコトリです。それがどうかしましたか？」

「あ、いえ、珍しい響きの名前だなと思いまして……」

「そうですね。何でも古い言葉から取つたと、彼女の保護者は言つていましたね」

そう答えたのはケイル。そのケイルは口調こそ軽いものの、その視線はじつとミフィーシーリアに注がれて離れない。

「それともこの娘の名前がもつと別の……皆が知るような名前だとでも思ったのですかな？」

「えつ！？ い、いえ、そのような事は……」

図星だった。

それこそまさにミフィーシーリアがずっと考えていた事なのだった。

ミフィーシーリアと同じ年頃で「治癒」の異能の使い手といえば、誰でも思い浮かべる名前が一つある。

一つはコイシーキ・アーザミルド・カノルドス。

「雷」と「治癒」の一いつの異能をその身に合わせ持つ、この国の若き国王。

そしてもう一つがアーシア・ミセナル。

現ミセナル公爵 「解放戦争」前は男爵 の一人娘にして、現国王の従兄妹にあたる姫君。

そして目下、将来の王妃候補第一位と噂される女性である。

彼女はコイシーキが「解放戦争」に立ち上がった際、従兄妹であるコイシーキに協力する形で「カノルドス解放軍」に参加。

直接戦場には立つ事はなかつたが、その身に宿した従兄妹と同じ「治癒」の異能は、数多くの「カノルドス解放軍」の兵士の命を救つたといつ。

また、誰にでも分け隔てなく接する優しい性格から、いつしか「癒し姫」の異名で呼ばれるようになった女性である。

事実、現王国の騎士や兵士の中には、「我が忠誠は王でも国でもなく、「癒し姫」にある」と公言して憚らない者もいるとか。

ミフィーシーリアもコトリと名乗つた少女の異能を目撃した時、真っ先に思い浮かんだのが彼女の名前であった。

もしかして目の前の少女はアーシア姫では、と考えたミフィーシー

リア。いや、彼女に限らず、誰もがそう考えるだろう。

しかし、よくよく考えてみれば、

今頃王都にいるはずのアーシア姫が、このような何もない辺境にいるはずがないではないか。

その考えがミフィーシーリアの頭を過つた時、彼女がこの「紅雀の巣箱」亭を訪れた目的を遅まきながら思い出した。

「と、ところで、

「なんでしょう、ミフィーシーリア様？」

「先程市井の学者様だと仰しゃられておりましたが、何用でこんな
何もない辺境に？」

「ああ、その事ですか。実を申しますと、この村にはただ立ち寄つ
ただけなんですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。私の本当の目的地は別の場所なんです。ここは単なる通り
道でした。あれ？ ひょっとして、入領税とか通行税が必要でした
か？ それなら直ちにお支払い致します」

「いえ、その必要はありません。商人の方が領地内で商いをされる
場合は商業税が必要ですが、ただの旅人の方から税金はいただいて
おりません」

「そうですか。それを聞いて安心致しました」

そう言つて笑顔を浮かべるケイル。そして彼は更に続けた。

「『心配なさらずとも、領地内で問題は起こしません。もちろん、
この二人にも厳重に言い含めてあります』

「いえ、そのような心配は……」

「いえいえ、領内に見知らぬ人間が現れば、領主として警戒するの
は当たり前です。当然の態度ですよ」

「申し訳ありません……」

お気になさらず、と応じるケイル。そのケイルの横で、ふと思いつ
出したようにジエイクがミフィーシーリアに告げた。

「なあ、お姫様。一つ頼みがあるんだけどな

「なんでしょうか」

「さつき見た、コトリの異能の事だよ

「……コトリさんの異能……」

「そり。コトリの異能はそんなに強くない。だからこいつが「治癒」

を持つ」とは内密にして欲しいんだ

と、ジョイクは座つたままミフィーシーリアに頭を下げた。

「治癒」の異能。その価値は計り知れない。

怪我や病気を癒す「治癒」の力は、誰もが縋りつく対象となる。誰もが怪我や病気を我が身に負った時、それを癒したいと願う。それが重大なものならば特に。

そしてそんな怪我や病をたちどころに癒す異能。それが「治癒」である。

どんな医師や薬師にも見放された病人。戦争や事故で身体の一部を失つた者。そんな彼らが最後に頼るのが「治癒」の異能を持つ者である。

だが「治癒」の異能を持つ者の数は少ない。

そもそも異能を持つ者が少ないので。そのなかから「治癒」限定となれば当然その数は更に少なくなる。

そしてこれが最も誤解されがちな事実なのだが、「治癒」の異能といえども万能ではない。

「治癒」に限らず異能の力には個人差がある。力の強い「治癒」なら癒せる疾病も、力の弱い「治癒」なら癒せない事がある。そしてそれを理解している者は以外に少ない。

医者や薬師に見放された病人。そんな病人が最後に縋り付いた「治癒」の異能者。だが、そんな「治癒」の異能者でも癒せるとは限らない。

そしてその事実を突き付けられた者。一度は見出した希望を奪われた者。そのような時、行き場を失つた感情は容易に逆恨みに変貌する。

そんな理由から、「治癒」の異能を持つ者 数は極めて少ないが はそれを公にするのを避ける傾向がある。その異能が弱けれ

ば特に。

そのような話をジョイクから告げられたマフィーシーリアは、彼の頼みを快く引き受けた。

「恩にかるよ、お姫様」

「あ、あの……」

「ん？ なんだいお姫様？」

「その「お姫様」というのはやめていただけませんか？ アマロー家は貴族とはいっても名ばかりの貧乏貴族です。私は「お姫様」と呼ばれるような身分ではありません」

きつぱりとさしだしたミフィーシーリアに、最初は驚いたような表情を浮かべるジョイク。その隣りに座る残る一人もまた、彼と同じような表情を浮かべていた。

やがてジョイクの表情が変わる。驚愕から興味へ。彼の表情は確かにそう変化した。

「了解したよ、お嬢さん。これならいいかい？」

「ええ、それでお願いします。といひで、みなさんはじつまでこの村に？」

「そうですねえ。ここまできゅうと體を足で旅してきたもので……暫く逗留してゆくつもりと想つてこたのですが……構いませんか？」

「それはもううん構いませんが……」少し、本当に向もありませんよ

？」

「それがいいのですよ。私のように普段から忙しく働いている者にとって、何もせざるんぢりするところは一番の娯楽なのです」

ケイルのその言葉に、マフィーシーリアも違いないと同意してくれりと笑った。

「どう見る?」

「どう見るって……あのお嬢さんの事か?」

ミフィーシーリアが「紅雀の巣箱」亭から去った後、取った部屋に引き上げたケイルは、部屋の扉を閉めたのを確認するとジョイクにそう問い合わせす。

その視線と言葉は、先程までミフィーシーリアと会話していた時のような柔らかさがあるでなく、冷たく鋭い。

「正直驚いたな。あそこまではっきりと「自分はお姫様と呼ばれるような身分ではありません」と言い切る貴族の令嬢は初めて見た」「同感だ。これまで見てきた貴族どもは、多かれ少なかれこちらを見下したところがあつたからな」

「まあ、俺たちは平民だったし? 貴族にしてみれば当然じゃねえの?」

「確かにそうだ。だが……」

「ああ。あのお嬢さんみたいな貴族がもつとたくさんいたら、あいつや俺たちが苦労する事もなかつたんだろうな」

「同感だな。ところでコトリはどこへ行つた?」

「ん? なんかあのお嬢さんの事、追いかけて行つたみたいだぜ?」

「なに? あの人見知りの激しいコトリがか?」

「どうやら、あのお嬢さんの事が気になるのは俺たちだけじゃないよつだ」

ジョイクは窓辺に歩み寄ると、そこから見えるこの村の領主の館に、何とも楽しそうな視線を向けた。

追けられている。

「紅雀の巣箱」亭からの帰り道、ミフイシーリアは自分が追けられている事に気づいた。

(一体誰が……)

敢えて振り返る事はせず、意識して前だけ見て歩く。気づいている事を悟られないように。

いくらアマロー家が貧乏貴族とはいっても、貴族であることは変わりない。

貴族の令嬢である自分を、野盗か盜賊の類が狙う可能性は否定しきれない。

(ですが、最近では野盗や盜賊の類はすっかり出なくなつた筈……)

王国の支配者が変わる前、世間には野盗、山賊、盜賊などが蔓延つていた。

当時の支配者であつた王侯貴族たちは、自分たちの事しか頭になく、自分たちに害が及ばない限り、盜賊たちのことなど完全に放置していたからだから。

それが新王国になり、新しい国王の勅命により徹底的に盜賊狩りが行われた。その結果、盜賊たちは殆どその姿を見なくなつた。

だが、盜賊たちがこの世から完全に消えるはずもなく。どこかに隠れ潜んでいた連中が、たまたまアマロー男爵領の界隈にいたのかもしれない。

いくら辺鄙な辺境とはいえ、いや、辺境だからこそ若い娘の独り歩きは危険である。

こんなことなら誰かに同行を願えば良かつた、とミフイシーリアは胸中で後悔する。

アマロー家がいくら貧乏貴族とはいえ、使用人が一人もいないと

いうわけではなく、数人の使用人を雇っている。

(今度からは、シリ亞かメリ亞と一緒に来てもらいましょうか……)

シリ亞とは古くからアマロー家に仕える使用人で、ミフィーシーリアの乳母も務めた中年の女性である。そしてメリ亞はそのシリ亞の娘であり、ミフィーシーリアとは同じ年で当の姉妹のように仲が良い。ちなみに、彼女たちの父親もアマロー家の使用人として働いている。

そんな事を考へて、アマロー家の屋敷が見えてくる。ここまで来ればもう大丈夫、とミフィーシーリアがこっそり安堵の溜め息を吐いた時。不意に背後の気配が動いた。

「うみやつ……」
「えつ……？」

悲鳴のような少女の声。あまりに想定外の背後の動きに、思わずミフィーシーリアが振り返ったその先に。

先程「紅雀の巣箱」亭で出会った、あの魔獣狩りの少女の姿があつた。

なぜか顔面から地面にダイブしたような、地面に突つ伏した姿であつたが。

02・三人の旅人たち（後書き）

チェックが済んだので投稿。

投稿初日にしてPVが1300以上、ユニークが約300という快挙。どうなつてんの？と思わず我が目を疑つたり。プロローグと第一話しか投稿していないのに、ですよ。ホント、びっくりしました。

で、調子に乗つて急いで次話を投稿した次第です（笑）。

あ、全くの余談ですが、コトリのアクセントは日本語の小鳥のように『コト』りではなく、『コ』トリです。

では、今後もよろしくお願いします。

03 - 魔獣狩りの少女（前書き）

な、なんかアクセス数が凄い事になつてゐる……

考えられないようなアクセス数に、焦った気分になつて急いで執筆。ただ、この執筆ペースがいつまで続くかは判りません。

03・魔獣狩りの少女

じつと見つめる視線の先、地面には突っ伏したまま動かない銀髪ツインテールの少女。

しばらくして少女は地面から顔を上げた。その少女の視線と、ぽかんと少女を見つめていたミフィーシーリアの視線が再び重なる。

「うみつ……」

何やら奇妙な声と共に、がばっと起き上がった少女は、そのまま後ろを振り返って脱兎の如く駆け出す。

「あ、待って下さ……！」

「みやつ！？」

思わず呼び止めるミフィーシーリア。そんな彼女の言葉に反応して、魔獣狩りハントの少女は急停止をかけた。

ミフィーシーリアの方へ振り返り、不思議そうにこくと首を傾げる少女。

どこか小動物じみたその仕草に、思わず微笑みを浮かべながらミフィーシーリアは少女へと歩み寄った。

「怪我してますよ……おでこのところね」

「え、本当つ……？」

両手を額に当てる少女。ミフィーシーリアに言われてようやく傷みを覚えたのか、じわじわとその金の瞳に涙が浮かぶ。

「はい、どうぞ。えっと ロード……むん……でしたね？」

「トトに差し出したのはハ
ンカチ。」
そう言つてミフイシーリアが少女

「トリーはそのハンカチとミフィーシーリアを何度も交互に見比べ、おずおずとハンカチに手を伸ばす。

「あ……あつがと」

「でも……」

「アーツ、「治癒」の異能が使えるもん。これは要らない」

と、コトリはハンカチをミフィーシーリアへと返そうとする。

「確かに傷は自分で癒せるかもしません……でも、こちには必要だと思いますよ？」

ミフィイシーリアは改めて、ハンカチをそっとコトコの瞳の下に優しく押し当てて涙を拭う。

しばらぐミフイシーリアにされるがままだつた「トリは、自分が何をされているのかようやく理解し、顔を真っ赤に染めてばばつとミフィーシーリアから離れる。

「どうかしましたか？」

「だつて……パパやママ、アーシイたち以外に『トリにこんな事する人なんていないもの……』

彼女には、田の上でおひるねする「アトリ」が、なぜか幼い子供のように見えた。

だからだらうか。深く考えもせぬ次の言葉が滑り出たのは。

「コトリさんをえ良かつたら、わたしの家でお茶でも飲んでいきませんか？」

と、傍らに見える自分の屋敷を指差しながら。

「お帰りなさい、お嬢様……あら、お客様ですか？」

「コトリを連れたミフィーシーリアが屋敷に入ると、屋敷を掃除していたメリアがその手を止めて出迎えた。
そしてコトリはメリアの姿を目にした途端、さつとミフィーシーリアの背中に隠れてしまつ。

「どうしたんですか？　コトリさん」

「…………」「やあ…………」

ミフィーシーリアの背後から顔だけ出して、恐る恐るメリアの方を見るコトリ。そんなコトリの様子に、メリアの方が対処に困つてしまう。

「私の部屋に行きましょうか、コトリさん。メリア、一人分のお茶の用意をお願いします」

「はい。承知しました、お嬢様」

ミフィーシーリアはコトリが人見知りが激しいのだろうと判断し、自分の部屋へ連れて行く事にする。

さして広くもないアマロー家の屋敷の事、ミフィーシーリアの部屋にはすぐに到着した。

「エリエなら誰も来ませんよ？」

「……………本当に？」

半信半疑のコトリの様子で、ミフイシーリアは笑みを浮かべて自室のドアを開ける。

「知らない人が怖いのですか？」

「……………うん…………」

部屋に入つて、その中を珍しそうに見回すと眺める答えるコトリ。

「どうやら本当に人見知りが激しそうだ。
だが、ミフイシーリアには一つ疑問がある。

「それでは、どうして私の後を追けて来たのです？」

「コトリからすれば、ミフイシーリアとて十分「知らない人」のはず。それなのに、なぜ彼女は自分の後を追ってきたのだろう。

「……………んー、自分でよく判らない……………ナビ…………」

部屋のソファに腰を下ろし、腕を組んで考え込むコトリ。
ミフイシーリアもコトリの対面のソファに座り、じっとコトリの言葉を待つ。

「なんか、あんた…………えっと、ミフイシーリア、……なん？　って、
アーシィやサリィみたいな感じがして……その…………どうしてだろう？」

自分で口にしながら、自分でよく判っていない様子のコトリ。

「あ、思い出したっ……！」

「何を思い出したんですか？」

「うん！ パパが言っての！ ロトリがいつこうつ氣持ちになつた時、どうすればいいのかを…」

魔獣狩りとこにはあまりにもらじくないロトリ。

外見年齢は自分と同じくらいだが、その精神年齢はもつどまつと幼い少女のような彼女。そのロトリの父親が彼女にどんな事を言ったのだろう。

と、改めて彼女の言葉を待つミフイシーリアに、ロトリは思いもかけなかつた一言を言い放つた。

「ロトリと友達になつてください…」

「は……はい？」

ずいとその華奢な右手をミフイシーリアに向かつて伸ばすロトリ。その表情は至つて真剣そのもの。

「あなたのお父様は、一体どのよつて仰しゃつたのです？」

「えつとね？ もし、ロトリがアーシィやサリィと一緒にいる時と同じような気持ちになつた人がいたら、その人はきっといい人だから友達になっておけつて。それがロトリにとつてともて良い事だから……つて、パパが言つたの」

どうやら自分はロトリに「いい人」認定を受けたらしい。

なぜそんな認定を受けたのかよく判らない。だが、ミフイシーリアも初めて会つた時からどこか田が離せないこの少女の事が好きになりつつある自分に気づいていた。

だからミフイシーリアは、いまだに伸ばされたままのロトリの右

手をそっと包み込むように両手で握り締める。

「ええ。私で良ければ喜んで。私をあなたのお友達の一人に加えて
ください」

そう言つてミフィイシーリアが微笑むと、ことりは弾けたような笑
顔を浮かべた。

「えつ！？ ミフィイ結婚するの？！？」

「ええ……」

友達になつたんだから、わたしの事はコトリつて呼んでね、とい
う少女の願いに、ならば自分の事はミフィイと呼んで欲しいとミフィイ
シーリアは伝えた。

互いにそれらの事を了承し合い、いつの間にか自然とそう呼び合
う一人。端から見れば、まるで長年の友人同士のような光景がそこ
にあつた。

メリアが持つて来てくれた紅茶を飲みつつ、互いの事を話し合つ
た。そして三日後にミフィイシーリアが、アルマン子爵家に嫁ぐ事に
話は及んだ。

「おめでとうー。ミフィイー！」

「あ……ありがとうござります……」

我が事のように嬉しそうなコトリと、気落ちしたような表情のミ
フィイシーリア。いくらコトリが対人感情に疎いと言つても、これは
さすがに気になつた。

「どうしたの？ なんか、嬉しそうじやないよ？」

「ええ……正直言つて、戸惑つています」

「どうして？ ママはいつもパパと結婚したいって言つているよ？ アーシィやサリィだって、パパと結婚したいって言つてる。結婚するつて嬉しい事じやないの？」

「コトリのお母様がお父様と結婚したい…………？」

「ここのミフィイシーリアは気づく。

おそらくコトリの母親はどこかの貴族か裕福な商人の愛人であり、コトリの母親以外にも複数の愛人が存在するのだろう。

なんて複雑な家庭環境。そんな環境の中で、コトリはよくもこんなに素直な少女に育つたものだ、とミフィイシーリアは感心する。

そして同時に、彼女の複雑な家庭環境に関しては、いくら友人になつたからといって、おいそれと言及するものじやない、と心中で決心した。

「なんせ、年の離れた、顔も合わせた事がない男性との結婚なので……」

「えつ！？ 会つた事もない人と結婚するのつー！？」

「ええ。まあ、貴族の間ではままある事です」

驚いて自分をじつと見つめるコトリに、ミフィイシーリアは意識して笑顔を浮かべながら紅茶を口にする。

「ねえ……ミフィイが結婚しちゃつたら……もう……会えない…………？」

「そうですね……アルマン子爵次第ですが、ひょっとしたら会えなかもしれません」

「そんなん……折角友達になつたのに……」

「ごめんなさい。でも手紙なら大丈夫だと思います。コトリは普段どこに住んでいるのですか？」

「コトリの家は王都にあるのー！ 王都の真ん中！ とつても大きい

んだからっー！」

ぴょんぴょんと銀のツインテールを揺らし、ややオーバーアクションで説明するコトリ。

彼女の父親はかなり裕福なのだろう。でなければ王都の中心部近くに大きな屋敷など持てる筈がない。

それにコトリの指先には荒れた様子がない。それはすなわち、普段から彼女が生活雑事に手を出していない事を現わしている。

常に使用人を雇い、生活の雑事全てを彼らに任せている。そうでなければ彼女のような綺麗な指先でいられる筈がない。

貴族ではありながら身のまわりの生活雑事を、全部ではないものの自分で行うミフィーシーリアの指先より、コトリの指先はよほど綺麗だった。

きっとコトリは父親と一緒に暮らしているのだろう。

ひょっとすると、コトリは上級貴族の令嬢の可能性さえある。

上級貴族の令嬢。それもよほど父親に大切にされ、外界との交流も殆どないような状態で育つた、言わば深窓の令嬢。

そう考えれば、彼女の外見と精神年齢の差の説明もつく。同時に、彼女が真っ直ぐで素直な性格なのも。

ケイルと名乗った男性は自分が学者であり、残る一人は護衛だと言っていた。

だが、本当は男性一人の方が彼女の護衛なのではないか。コトリの身分を誤魔化すため、敢えて彼女の方を護衛だという事にしているのではないだろうか。ミフィーシーリアにはそう思えてならなかつた。

なぜ貴族の令嬢がこんな田舎にいるのか判らない。だけど、コトリが王都の中心部に屋敷を構えるほどの家柄の令嬢だとするならば。コトリと初めて出会った時の疑問が再びミフィーシーリアの脳裏を掠めていく。

即ち、やはり彼女が「癒し姫」アーシア・ミセナル姫ではないか、という疑問が。

03 - 魔獣狩りの少女（後書き）

前書きでも触れましたが、アクセス数が凄いです。連載開始わずか一日で総合PVが3000を超え、総合ユニークが600人を超えました。しかもお気に入り登録が6件も！きっと有名な人のところでは、もっとアクセス数が伸びるのでしようが、私のような無名の人間のところに、これだけの数の方々が来ていただけるのは快挙としかいいようがありません。ありがとうございます。感謝いたします。今後もよろしくお願ひします。

しかし、皆さんどうからうの『辺境令嬢』にやつてくるんだろう？誰か教えてください。いや、ホント。

「奴が動いた?」

「ああ。奴の屋敷を張らせていた部下から早馬が届いた。一行は奴本人と数人の使用人、そして護衛の子飼いの兵たちが十数人といったところだ。昨日の昼前に領地の屋敷を出発したらしい」

とある一室。その部屋の中にいた男は、先程来客を告げられて部屋を出て行き、すぐに戻つて来たもう一人の男からそう聞かされた。

「奴が出発する前日、数人の別の子飼いの連中が屋敷を出たらしい。途中まで尾行したところ、東に伸びている街道を使って領地を出たそうだ」

「なるほど。奴の領地から東つて事は……目的地は間違いないここだな」

この村に逗留して今日で一回目。それとなく村を見て回つたが、実にのんびりとした平和な村だった。

領民の数こそ少ないものの、大人たちは笑顔で畑を耕し、子供たちは元気に遊び回る活気のある良い村。それが男のこの村に対する感想だ。

「確かにここなら獲物にも事欠かないだろうしな。ん? 待てよ? つて事は今、奴の屋敷は手薄つて事か?」

「ああ。既に踏み込むように指示済みだ。一応見つかった場合の偽装工作で、盗賊を装つて踏み込むように指示を出しているが、その心配はあるまい」

「これではつきりとした証拠が出れば、あとはこっちで奴を取り押さえるのみ、か」

「そうすれば、私たちの役目も終わりだ」

「全く、どうして俺たちがこんな田舎まで出しゃばらなきやならないんだ？　あいつも人使いが荒いつたらないぜ」

「そう言うな。俺たちが動かなければ、あいつが直接動きかねん。

さすがに今あいつにそんな事はさせられんよ」

「確かに」

「それに私にとつては、いい骨休みも兼ねていたしな」

そう言つてその男は苦笑を零す。普段から上役にこき使われ馬車馬のように働かされている彼にとって、役目とはいえっこでのんびりと過ごした数日はまさに貴重な休暇であった。

「王都に帰つたら、またあの日々が始まるのか……」

普段の仕事を思い出したのか、男はげんなりとした表情を浮かべる。

「仕方ねえだろ？　あいつの尻馬に乗つちましたのは俺たちだぜ？」
「判つてしるし、後悔もしていない。しかし、ここまで忙しくなるとは思わなかつたのも事実だ」

「ま、奴がこつちに到着するのは明日だ。残り少ないのんびりできる時間をそれまで満喫しておくんだな」

「言われるまでもない……と、言いたいところだが、そうはいかないようだ」

男は視線を不意に壁際へと向けた。

それが何を意味するのか、もう一人の男にも判つてしる。向けた視線の先、即ち隣の部屋から伝わつてくる幾つかの気配。

それは数人の人間が、隣の部屋に入つて來た事を意味していた。

「コトリという少女と出合った日が一昨日。つまり今日で三日目。

つまつはミフィーシーリアがこの村を去る当日。

先触れによるマルマン子爵がアマロー男爵領に到着するのは午後過ぎらしい。

そんな残り僅かな時間を、ミフィーシーリアは自室でコトリと共に過ごしていた。

あれ以来、コトリは毎日ミフィーシーリアを尋ねて屋敷に遊びに来る。

アルマンド爵の元へと嫁ぐ準備の傍ら、どうしても気分が沈みがちになるミフィーシーリアにとって、コトリの存在は清涼剤のようなものだった。

婚姻の儀式そのものはまだ先の事なので、ウェディングドレスなどの準備は必要なく、今回は身のまわりの物だけを持って行くつもりのミフィーシーリア。

身のまわりの物といっても、そもそもあまり私物の多くないミフィーシーリアの事、その準備は一日も必要ない程度だった。

そして、ミフィーシーリアがアルマン子爵家へ嫁ぐ際、彼女付きの侍女としてメリアの同行も決っていた。

姉妹のようなメリアが同行してくれると知った時、ミフィーシーリアは大きな安堵感に包まれ、メリアに縋り付いて何度も礼を言つほどだった。

「今日は……行っちゃうんだよね……」

「ええ……短い間でしたけど、コトリと一緒にいると楽しかったです」

「うん……コトリもミフィーと一緒にとても楽しいー！」

そう言つてこっこりと笑うコトリ。

一時はコトリがアーシア・ミヤナル姫ではないか、と疑いを持つ

たミフィーシーリアだつたが、今ではその可能性はないだろ？と思つてゐる。

父であるグウドン・アマロー男爵に聞いたところによると、アーシア姫の容姿は栗色の髪に黒い瞳。銀髪金瞳のコトリとはまるで違う容姿をしているらしい。

なお、アーシア姫の栗色の髪と黒い瞳は、従兄妹であるコイシーク・アーザミルド・カノルドス一世国王陛下と同じ色合いで、二人並んで立つと兄妹のようによく似ているといつ追加情報まで父は教えてくれた。

余談であるが、ミフィーシーリアが父であるグウドンにコトリを紹介した際、なぜかコトリは頭部のツインテールを押さえて震え出した。

どうしたのかとミフィーシーリアが尋ねると、「グドンはツインテールの天敵なの！ 頭からぱりぱりと食べられちゃうのよお！」とコトリは震えながら答えた。

誰にそんな事を聞いたのかと疑問に思えば、どうやら彼女の父親かららしい。

どうしてコトリの父親がそんな意味不明の事を彼女に教え込んだのかは知らないが、以来、コトリは絶対にグウドンの前に出ようとしなかつた。

そうこうしているうちに午後も近くなり、コトリは絶対にまた会おうねつ、と何度も言いながらアマロー家の屋敷を後にした。

残されたミフィーシーリは、改めて残された時間で父や母、そしてたつた一人の一歳年下の弟に別れを告げた。

この期に至つて、行くなと言い出す弟や最後まで謝り通しの父、そして静かに泣くばかりの母を、逆にミフィーシーリアが宥めていると。とうとうその時やつて來た。

アマロー家の数少ない使用人であるシリアが、アルマン子爵一行の到着を告げたのだ。

アグール・アルマン子爵。

初めて対面する自分の夫となる人物。

その人物に対するミフィーシーリアの感想は、あまり良いものではなかつた。いや、はつきり言つて悪かつた。

同年代の女性と比して小柄なミフィーシーリア。そのミフィーシーリアよりも低い身長。だが、体重は彼女の二倍以上は軽くあるだろう。頭髪は本来は金髪なのだろうが、額の後退が激しく頭髪の色よりも広くなつた額のてかりの方が目立つ。

顔だちはといえば、べちゃりと潰れた鼻がとても印象的。もちろん悪い方向で。

汗と油でてかりきつた顔の中で、ミフィーシーリアをじろじろと見つめる好色そうな眼は、顔中でのてかりよりも更にきらきらと輝いている。

はつきり言つて良いものではない。ぶっちゃけ、気持ち悪い。

目の前の人物を端的かつ的確に現わすとしたら、「上等の衣服で着飾つた豚」。これ以外にあるまい。

こんな中年男が自分の夫になるのかと思つと、いやもつと正確に言えば、この男に自分の純潔を捧げるのかと思つと、ミフィーシーリアは身体が震えそうになる。

それを鉄の意志で何とか押え込み、ミフィーシーリアは努めて表情を変えないようにしてアルマン子爵と対面する。

だけど。

アルマン子爵つて豚人族イベリコだつたんですか？ そんな話は聞いていません！

もし許されるのなら、きっとミフィーシーリアはそう叫んでいただいづ。

獣人族と呼ばれる者たちがいる。

文字通り直立歩行する獣といった外観の種族で、様々な亜種が存在する。

代表的なところでは犬人族コボルト、猫人族カラカル、豚人族イベリコ、兔人族イヤロップなど。

どの亜種も身長は人間の大人の腰ほど。全ての獣人族に共通する特徴として、力は人間よりも弱いが手先が器用で臆病な性格などがあげられる。

中には例外的に傭兵や魔獣狩りの従者として、戦場に立つ剛の者もいるようだ。

彼らは彼らだけの集落を築く事もあるが、殆どは人間の街や村で暮らしている。

人間の営む商店や食堂などで下働きをする事が多く、中には自身で商店や宿屋を営む者もいる。

貴族などの上流社会の間では忌避される傾向なの、一般市民の間では人間と同格の存在として扱われる。

ちなみに、獣人族は全て男女で外觀が変わらない。なので人間からすれば一目で獣人族の男女の見分けはまず不可能である。

つまり、『獣耳』や『獣尻尾』を持つた少女や女性というものは存在しないのである。

そんな獣人族の一種である豚人族。その豚人族にアルマン子爵はそりゃあもう、そつくりだつたのだ。

父であるアマロー男爵とアルマン子爵との会話で、子爵が人間である事に間違いないと知ったミフィーシーリアは、こつそりと安堵の溜め息を洩らした。

いくら人間と同格に扱われている獣人族とはいえ、爵位を賜つた獣人族がいるという話はさすがに聞いた事がない。

冷静に考えてみればアルマン子爵が豚人族なわけがないのだが、思わずミフィーシーリアが慌てるほど、子爵は豚人族にそつくりだつたのだ。

「おまえがミフィーシーリアだな」

子爵と対面しているのはアマロー家の居間。ミフィーシーリアの両隣には父と母が腰を下ろし、その対面のソファにアルマン子爵が座っている。

そしてアマロー男爵との会話が一区切りついたところで、アルマン子爵はじろりとミフィーシーリアへと視線を向けた。

子爵はじろじろとミフィーシーリアを検分するかのように見つめると、彼女が何かを口にするよりも更に言葉を続けた。

「随分と地味な格好だな。それでは村娘と変わらんではないか。せつかくこの儂に対面するというのに、どうしてもっと着飾らないのだ？ ん？」

確かに今のミフィーシーリアは、いや、普段からミフィーシーリアは上等は衣服など身につけない。

彼女も貴族の令嬢である以上、それなりの格好をしていてもおかしくはない。アマロー家がいくら貧乏貴族だからといって、娘にドレスの一着や二着作つてやるぐらいの事はできる。

だが、ミフィーシーリアは普段から村娘たちと同じような衣服を好んだ。

彼女は元々華美なものを嫌う性格であつたし、なにより、彼女は自分も村人の一人として扱われる事を臨んだのだ。

領主の令嬢という特別な存在ではなく、一緒に苦楽を共にして生活する村人の一人。

そんな思いから、ミフィーシーリアは普段から着飾るという事をし

ない。

それでも今日ミフィーシーリアにとつて特別な日。

好むと好まざるとに関らず、夫のなる人との初対面なのだ。彼女

なりに自分が持つ衣服の中で一番上等なものを見ていた。

それでも、アルマン子爵にはそつとは見えなかつたようだ。

「今後、そのようなみすぼらしい格好をする事は許さん。おまえは儂の妻になるのだからな。安心せい。我が領地に帰つたら、すぐに針子どもを手配してドレスを数着作らせてやろ。」

そう言つと子爵はにやりと笑つた。

きつと本人は懐が大きい事を示したつもりなのだろうが、聞いている方からすればあまり気持ちのいいものではない。

そんな気持ちをぐつと抑えつつ、アマロー男爵はアルマン子爵に尋ねる。

「それで約束した食糧の買い込みの件ですが……」

「それなら安心せい。相場の八割で譲つてやるわ」

「し、子爵！ それでは話が違うではありませんか！」 最初の約束では相場の半額という話だった筈！ 八割では冬を越すだけの食糧を買い込めない！ 半額で食糧を買い込んで冬を越せるかどうかぎりぎりなのですぞ！」

当初の約束とは違う事を言い出すアルマン子爵に、思わず立ち上がりたアマロー男爵が詰め寄る。

だがそんな男爵の様子を面白そうに眺めつつ、子爵は更に続けた。

「そんな事は儂の知つた事ではないし、それが嫌ならこの話はなかつた事にするだけだしな。まあ……」

子爵は再び好色そうな視線を男爵の隣に座るミフィーシーリアへと向けた。

「儂も鬼ではない。条件によっては半額で売つてやる」「ほ、本当ですかっ！？ そ、それでその条件とは……」

子爵のただでさえ細い眼が、さらにこぢらしく、そして禍々しく細く歪められてミフィーシーリアを見つめる。

「ミフィーシーリア。おまえがこの場で裸になつて平伏し、儂の奴隸となる事を誓うならば、食糧を半額で売つてやるつ」

「そ、そんな事 つ……」

ミフィーシーリアは声にならない悲鳴を上げる。隣の男爵夫妻も一の句が継げない。

今この場にいるのはミフィーシーリアと彼女の両親、そしてアルマン子爵だけではない。子爵の使用人や護衛の兵たちが数人、ソファに座る子爵の背後に控えているのだ。

そんな者たちがいる前で裸になるなど、たとえ貴族の令嬢でなくとも若い娘には耐えがたい屈辱である。

それに加えて、本来なら正妻として迎える筈が、奴隸として子爵のものになれといふ。

当然アマロー家側に飲める条件ではない。

だが。

だが、ミフィーシーリアは決意する。

この場で自分が恥辱にまみれようとも、そつすれば家族を始め領民たちを救う事ができるのなら。

「それは本当に『」やりますね？ アルマン子爵様」「おう。おまえが儂の奴隸となると誓えば、食糧は相場の半額で譲つてやる」

ミフィーシーリーは静かにその場で立ち上がった。

子爵の出した条件を飲むため。領民を守る領主の娘としての義務を果たすため。

その決意は両親にも、そして、いまだにセザーニ笑いを浮かべる子爵にも届いた。

「さあ、早く裸になれ。もちろん、身につけているものは全部脱ぐんだぞ？ そして跪いて頭を床に擦り付け、儂の奴隸になると誓え」

アルマン子爵どころか、背後に控える使用人たちまでが無遠慮にいやにいやとした好色な笑みを浮かべる中、ミフィーシーリアは身に纏っている服のボタンに震えながらも手をかける。

今彼女が身につけているのは、飾り気の少ない前開きのワンピース。

そのワンピースを留めるボタンを解放されば、それは重力に引かれて床に落ち、下着に包まれた彼女の肢体を容易く晒してしまうだろう。

振るえる手先で一つ、また一つとボタンを外すミフィーシーリア。そんな彼女の両横で、父は無言で俯き、母は涙を隠すことなく、せび泣く。

そして全てのボタンが外され、ミフィーシーリアがワンピースを床に落とそうとした時だった。

それがミフィーシーリアたちがいる、アマロー家の居間に飛び込んで来たのは。

04・婚約者（後書き）

なんとか今日も更新できました。

とりあえず、序章ともこいつべき「アマローネ爵領編」もあと数話で区切らざる予定。その後は本編ともいえる「王都編」へと移行します。

といひで、いろいろ更新速度が遅くなつそうですが……。

「た、大変なのよおつ！！」

アマロ一家の居間に飛び込んで来たもの。

それは銀のツインテールを振り乱したコトリだった。

そして飛び込んで来たコトリは、今まさにワンピースを床に落とそうとしているミフィーシーリアを見て、きょとんとした表情を浮かべる。

「何してるの、ミフィイ？　あ、もしかして着替えてる途中だつた？」

自分でそういうながら、着替えるにしては変だなとコトリは思う。コトリは周囲の者たちから、人前で、特に男性の前で服を脱いではいけないと教わった。

コトリの外見と同じくらいの年頃の娘たちにとって、それは常識であるらしい。

だからコトリも着替える時は、男性　父親を除く　のいない所で一人で着替えるか、侍女に手伝つてもらしながら着替えるように心がけている。

だが、ここにはミフィーシーリアの父親を始め、見慣れない男性がたくさんいた。そんな場所でミフィーシーリアが服を着替えるのは不自然ではないだろうか。

そう思つたコトリは、改めて周囲を見回しある事に気づいた。

「あれ？　どうしてここに豚人族イベリコがいるの？　ひょつとしてミフィイの家の新しい使用人？」

そう言つてコトリがじ丁寧に指まで差したのは、いつまでもなく

アルマン子爵である。

そして指差されたアルマン子爵は、ミフィーシーリアを辱めるという歪んだ楽しみの最中に飛び込んで来た、庶民らしき銀髪の少女に侮辱された事で顔を真っ赤に染めた。

「ふ、ふぶぶ無礼な娘めつ！！ 儂が誰だか判つておらんのかつ！」

？」

「そんな事言つたつて、コトリ、豚人族に知り合いなんていないよ？」

「誰が豚人族だつ！！ 儂はれっきとした人間だつ！！ 貴族だつ！！ 無礼者つ！！」

「えつ！？ 嘘つ！？」

あんぐりと口を開けて驚くコトリ。

彼女のその態度に、アルマン子爵は少女が貴族に対して無礼を働いた事を後悔していると判断し、改めて突然飛び込んで来た銀髪の少女を観察する。

「ほつ……庶民にしては中々の上玉だな。銀の髪も珍しい。よし、いいだろ？。庶民が貴族に対して、先程のような無礼な態度を取れば本来なら死罪だが、儂は心が広い。特別に許してやろう。ただし、アマローの小娘同様素つ裸になつて謝罪し、儂の奴隸となるなら、だがな」

再びにやりと好色な笑いを浮かべるアルマン子爵。予想外の獲物に、込み上げてくる笑いが押さえ切れない、といった様子だ。

「ほれ、二人ともさつさと裸になれ」

子爵の言葉に、背後の使用人や兵たちが笑い声を上げる。中には

ミフィイシーリアたちに下品な言葉をかけたり、口笛を吹いてからかう者までいる。

コトリはアルマン子爵の言つている事の意味が判つていなかっ
きょとんとして子爵を見つめるばかり。

そしてミフィイシーリアは、ボタンの外れたワンピースの前を含わ
せるようにかき抱きながら、どうしたものかと必死に考える。
自分が奴隸に落ちるのはいい。既に決心した事だ。だが、コトリ
までも奴隸に落とすわけにはいかない。

必死に考えるミフィイシーリアをよそに、コトリはまじまじと子爵
を見て再び口を開いた。

「あのねえ、豚人族のおじさん！ 貴族ごつこもいい加減にしてよ
ね！ コトリ、これでも忙しいんだからっ！… それに貴族じやな
い人が貴族を名乗るのはそれこそ死罪だつて聞いたから、貴族ごつ
こはあまりしない方がいいと思うよ？」

あくまでもアルマン子爵を豚人族扱いするコトリ。

どうやら先ほど彼女が「嘘」と言つたのは、貴族に無礼な態度を
取つて驚いたのではなく、豚人族が人間だと言い張つた事に驚いた
ようだつた。

居合わせた者は当の子爵を含め、そんな天然なコトリにあっけに
取られて口もきけない。

そんな中、コトリはばたばたとミフィイシーリアに近づくと、改め
て彼女に向き直つた。

「あのね、ミフィイ！ コトリ聞いたのー。ミフィイが結婚する
つて言つてた、アルマンつて貴族なんだけど、そいつ奴隸の密売を
しているんだつて！だからそんな奴のところにお嫁に行かない方
がいいよー。ううん、絶対お嫁になんか行っちゃダメよおつー！」

「」の「トリの爆弾発言に、再びその場に静けさが訪れる。そして、そんな静寂を破つたのは、驚きに目を見開いたアマロー男爵だった。

「し、子爵……あ、あなたは本当に奴隸の密売を……？ そ、それでは娘を奴隸にしようとしたのも、売ることが目的で……？」

わなわなと振るえる男爵。その顔色は最初こそ青かつたがやがて怒りのために真っ赤に染まる。

「ふざけるなっ！ いくら領民のためとはいえ、可愛い我が子を奴隸になどできるかっ！！ 今回の話はこちから断らせてもらつっ！！ そして子爵！ この件は国に報告させてもらつッぞ！」

「し、知らぬっ！！ 奴隸の密売など儂は知らぬっ！！ 男爵よ、貴公はそんなど「」の馬の骨が知れぬ小娘の言つ事を信じるのかつ？」

「」の娘は娘の友人だ！ ならばその言葉を疑う理由は私にはない！ そもそも、そのような事は陛下に直々に調べていただけばはつきりする事だ！ 申し開きは私ではなく陛下にしたまえっ！！」

激昂にかられ、テーブルに自らの拳を打ち付けるアマロー男爵。そしてその音を合図とするかの如く、この場に更に一人の男が現れた。

魔獣の革製の武具を纏つたその男。特に目を引くのは背後に背負われた巨大な大剣。

「陛下に調べてもう必要はねえよ。今し方、子爵の領地の屋敷の地下牢から、数人の奴隸が見つかつたって知らせが来たぜ？ その奴隸はどうも所持印を持たない奴隸だつてよ」

奴隸には、その身に所有者の名前を刻む事が義務付けられている。

所有者の名前は所持印と呼ばれ、入れ墨で身体に直接刻み込む場合もあれば、首輪に名前を刻んだだけの場合もある。

普通は奴隸を転売する事も考え、首輪に名前を刻むのが主流だ。そして誤解しやすいが、奴隸の売買は国の許可を得ているれっきとした商売である。

所持印を持たない奴隸とは、奴隸商人が所有する『商品』としての奴隸であり、奴隸商人以外が所持印を持たない奴隸を有するのは明確な犯罪であり处罚の対象となる。

もちろん、国から許可を得ていない者が奴隸を売る事も同様である。

「この場に突然現れた男」 ジョイクは、にやりと笑うと器用に片目を閉じつつミフィィシーリアに告げた。

「というわけだ、お嬢さん。もうこれ以上こいつの言つ事に耳を貸す必要はないぜ？」だからさつと身繕いを整えな」

言われたミフィィシーリアは、未だに自分が服の前をはだけた状態でいる事に気づき、慌ててボタンを嵌める。

「ジョイク！」

「あのなあ、コトリ。あいつにももつと落ちついて行動しろつて言われているだろ？ いくらこのお嬢さんが心配でも、いきなり飛び出して行くんじゃねえよ。ま、今回に限っちゃ、それがいい方向に出たようだがな」

ジョイクは居間の中央に立るミフィィシーリアとコトリに、つかつかと無造作に歩いて近づく。

その際、彼の背負う大剣が、子爵一行に無言の圧力となつてのしかかる。

「な……何者だ、貴様っ！！」

わなわなと震えながら、アルマン子爵は突然乱入し、己の秘密を曝露した男を憎悪に燃える眼でねめつけて叫ぶ。

「き、貴様……どうやつて奴隸の密売を嗅ぎつけたのかは知らんが……儂の秘密を知られた以上、生きて帰れるとは思うな！」

いくら大きな剣を携えているとはいえ、相手はたった一人。こちらは護衛の兵　　その実はならず者と大差ないが　　が五人いる。更に、使用人として連れて来た者も、多少の荒事に耐えられる者ばかりだ。

人數的には多勢に無勢。この場で男爵一家や使用人を含めた全員の息の根を止めてしまえば、己の悪事が露呈することもない。

短絡的にそう思い至つたアルマン子爵は、背後に控える者たちへ視線を向ける。

「使用者を含め男は殺しても構わん。だが、男爵の女房を含め、女はできるだけ傷付けるなよ？　奴隸として売りさばく時の値が下がるからな。まあ、後で味見ぐらいさせてやる。儂の後で良ければだがな？」

子爵の言葉に嬉しそうな声を上げながら、配下たちは腰に帶びていた剣を抜き放つ。

煌めく複数の刃。それを見たアマロー男爵は、娘と妻を背後に庇いながら数歩後ずさる。

そんな男爵の前に進み出たのはジェイク　　ヒートリだった。

「心配すんなよ、アマロー男爵。この程度の人数に遅れを取る俺じゃねえさ」

背負つた大剣の柄に手をかける事もせず、自然体で立つジェイク。そしてコトリも腰に手をあて無意味に胸を張つて言い放つ。

「そう、ジョン・ジェイクの言ひ通り！ 心配ないからね、ミフィー」

「コトリ！ 危険です！ 下がつてください……」

「大丈夫！ コトリは強いのよおつ！！」

そのコトリの台詞が合図だつた。子爵の兵たちが一斉に男爵一家の前に立つジェイクとコトリに襲いかかる。

その内訳はジェイクに三人、コトリに一人。

狭い室内ではジェイクの持つ大剣を振り回すのは難しい。そしてコトリは武器さえ帶びていない、どう見てもただの小娘。だがしかし、外見から単純に一人を判断した兵たちは、直後に後悔することになる。

同時に襲いかかる三人の兵たちを一瞥し、ジェイクはするりと背の大剣を抜いた。

そう。何事もなく抜いたのだ。

彼の持つ大剣は、切先から柄先までの長さが彼の身長ほどもある。そんな巨大な大剣を背から抜けば、そんなに高くなアマロ一家の居間の天井にどう考へても引っかかるはず。

だが、彼の手には抜剣された大剣がある。

まるで背中から直接手の中に瞬間移動したかのような光景に、兵たちの勢いが僅かに緩む。

そしてその僅かな緩みをジェイクは見逃さない。

三度迸る銀光。

それだけでジェイクに詰め寄つた兵士三人が、その場にばたりと昏倒した。

「一応、殺しあしねえよ。男爵の家の中をおめえらの血で汚すわけ

にもいかねんでな」

ジョイクは自身の言葉通り、大剣の腹の部分で兵士の頭部を殴打したのだ。

尤も、ミフィーシーリアを始め男爵夫妻やアルマン子爵にも、彼が剣を振るつた光景は見えなかつたのだが。

ジョイクが構える剣の位置が違う。彼らが気づいたのはそれだけであり、その一瞬で三人の兵士が無力化されて倒れ伏したのだ。

それだけではない。今彼らがアマロー家の居間には、僅かながら調度品が置かれている。

その置かれている調度品たちには、髪の毛ほどの傷もつけられていない。

あの巨大な大剣を眼にも止まらない速さで二度も振り、なおかつ、周囲の調度品に全く傷も付けない。

それがどれだけ難しい事であるか、剣に関して素人のミフィーシーリアにも判る。

つまり、目の前にいるどこか飘々としたジョイクという男が、途轍もない程の剣の達人だという事にミフィーシーリアは改めて思い至つた。

そして同時に、居間の中にぱちりという音が響く。

思わずジョイクをぽかんと見つめていたミフィーシーリアだが、その音で頭が再起動をしたのかコトリの事を思い出した。

コトリは大丈夫なのかと彼女の方へ視線を移せば、そこにはジョイク以上にとんでもない光景が展開された。

コトリは兵が繰り出した剣戟をするりと躱す。その動きは猫科の動物のようにしなやかそのもの。

そして兵の剣を躱したコトリは素早くその懷に飛び込むと、その華奢な手を伸ばし兵の腹部に軽く当てる。

ぱちり、と再び響く音。

コトリの手と兵士の腹部の間で青白い光が発せられ、それだけで

兵が崩れ落ちるよつに倒れた。

この時になつて、既に兵士の一人が彼女の足元で倒れている事に、
ミフィィシーリアはよつやく気づく。

「…………『雷』の…………異能…………？」

そう呟いたのは誰だつたか。

『雷』の異能。それを持つ者は唯一人。

カノルドス王国の国王、ユイシーケ・アーザミルド・カノルドス
1世。彼の人だけがこの世で唯一人、『雷』の異能が使える筈。
では、今日の前で『雷』の異能を使ったコトリは一体何者なのか?
混乱するミフィィシーリアの耳に、どこかのんびりとしたジェイク
の声が響く。

「さあ、観念しな子爵。こんな連中が何人いようが、俺たちの相手
にやならねえぜ?」

軽い口調とは裏腹に、鋭いジェイクの視線がアルマン子爵を射貫
く。

それだけで子爵の背後に控えていた数人の使用人が、ばたばたと
居間から飛び出して行く。

逃げ出した配下に振り返る事すらせす、その場で腰を抜かしたよ
うに座り込むアルマン子爵は、今度は畏れで振るえる指先を、ゆら
ゆらとジェイクに向ける。

「き、貴様は……貴様たちは一体何者だ……」

そしてジェイクは。

「俺の正体か? 知つたらきっと後悔すると思うがよ? それでも

知りたい？　じゃあいいぜ、教えてやるわ

と、にやりと悪戯小僧のような笑みを浮かべると、とんでもない事を口にした。

「俺の名はジョイク・キルガス。今ひとつ、カノルドス王国近衛隊隊長つてえ肩書きを背負つてゐるモンだ」

05・露呈（後書き）

アマロー野爵領編もあと一話で終わります。

その後は舞台を京都へと移します。

それはそうと、最近お気に入り登録してくださった方が25名を
超えました。

ありがとうございます。アクセス数の方も順調に伸びています。

今後もがんばりますので、見捨てないでお付き合ってください。

よろしくお願いします。

「カノルドス王国宰相補を務めさせていただいております、ケイル・クーゼルガンです。以後、お見知りおきを」

そう言つて優雅に頭を下げたのは、「紅雀の巣箱」亭にいた三人の内の一人、薄茶の髪に青い眼の青年、ケイルだつた。

場所はアマロー男爵邸の居間。あのアルマン子爵との一件があつた場所。時間はあれから三日が経過していた。

今この場に居合わせているのは、ケイルとアマロー男爵、そしてミフィーシーリア。

ジョイクとコトリは、アルマン子爵一行を王都へと連行するため、昨日アマロー男爵領を立つた。その際、コトリは何度もミフィーシーリアへと振り返り、姿が見えなくなるまで手を振りっぱなしだった。ちなみに、あの時ジョイクの殺気にアマロー邸を飛び出したアルマン子爵の使用者たちだが、彼らはアマロー邸の外で控えていたケイルに全員取り押さえられ、子爵と共に連行中である。

「こちらこそ、よしなに。クーゼルガン伯」

コトリとの別れを思い返していたミフィーシーリアは、隣に座る父が立ち上がりて頭を下げたのに気づき、慌てて自分も立ち上がりて頭を下げる。

「ミフィーシーリア嬢。市井の学者などと身分を偽つて申し訳ありません」

「いいえ、気になさらないでください。クーゼルガン伯もお役めだつたのでしょうか？」

「そう言つていただけだと助かります」

改めて腰を下ろしたケイルは、謝罪の言葉をミフィーシーリアに述べると、アマロー男爵へと向き直る。

「国王陛下の命により、かねてからアルマン子爵の周囲を洗つておりました。子爵が国に収めていた税などの収入の記録と、子爵自身の金回りに明らかに食い違いが随分前から報告されていまして。内偵を進めていたのです」

「そうだったのですか。しかし、『国王陛下の両腕』とも言われるクーゼルガン伯とキルガス伯のお二人を動かすとは、陛下は余程アルマン子爵の動向に気を配っていたようですね」

ケイル・クーゼルガンとジェイク・キルガス。

二人は幼馴染であつたユイシークが『カノルドス解放軍』を立ち上げた際、その初期から行動を共にしたという。

剣の腕に優れ、常にユイシークと共に戦場の最前線を駆け抜けたジェイク。

そして頭脳に秀で、様々な作戦を立案、成功させた軍師的な存在のケイル。

二人はユイシークと共に、常に『カノルドス解放軍』の先頭に立ち、『カノルドス解放軍』を勝利に導いてきた。

大剣を手に、群がる敵をなぎ倒しユイシークの傍を片時も離れずに戦場に有り続けた『大剣』のジェイク。

絶対的な窮地に陥つた『カノルドス解放軍』を、まるで魔法でも使つたのかのように、その優れた頭脳で逆転勝利に導いた『魔術師』ケイル。

二人は『解放戦争』に勝利した後、伯爵に任せられ、近衛隊の隊長と宰相補という重職に就き、現在では『国王陛下の両腕』と呼ば

れるほどの存在になつていった。

周囲は一人が将来的には政治と軍事の最高峰まで登りつめるだろうと曰しており、新体制となつた王国の中心部との繋がりを求める者たちから、色々な意味で注目されている。

そして、今回の事件の一連の真相を領主であるアマロー男爵に説明するため、ケイルのみが一人残り、今男爵と会談中なのである。処できたのですから「

「ですが、今回の件、男爵にも責はあります。不作による食糧の不足を、隣接する領主に軽々しく相談するのは些か問題です。直接王国に相談していただければ、税の一時的な軽減など、いくらでも対

が悪かった。

アマロー男爵としても、もう少しでアルマン子爵に騙され、愛娘を奴隸として奪われるところだったのだ。

確かに子爵が何らかの形で儲けているとは思つていたが、まさか奴隸の密売に手を出していくとは思いもしなかつた。

今後誰かに何かを相談する際は、もう少し相手の事を調べてからにしようと思ふアマロー男爵である。

「全く、面倒次第もありません。かくなる上は、如何様な处罚も受けましょう」

「いいえ、その心配は無用です。今回、アマロー男爵にもじ迷惑をおかけした事ですし」

「迷惑……ですか？」

迷惑と言われても心当たりのない男爵。はて、と首を傾げながら、隣に座る娘と視線を合わせる。

「…………もしや……」「トリが何か関係しているのですか?」

ミフィーシーリアのその問いに、ケイルは穏やかに首を横に振る。

「実は、子爵がこのアマロー男爵領に入る一日前、子爵の息のかかつた者がこの領内に入り込みまして」

「子爵の配下が?」

「彼らは予めこのアマロー男爵領に入り込み、商品となる奴隸を領民の中から数人誘拐するつもりのようでした」

「なんと……つ……! ?」

「そ、そんな……つ……! ?」

絶句する男爵親子に、ケイルはどこか微笑ましげな微笑を浮かべると更に続ける。

「その者たちは私とジェイクが取り押さえましたが……その際、連中が暴れたおかげで、「紅雀の巣箱」亭に少々被害が出まして。もちろん、その被害については国で補償しますので、男爵を通じて補償額の請求を願います。男爵の領地と領民に迷惑をおかけして申し訳ありません」

「とんでもない。こちらこそ様々な配慮痛み入ります」

宰相補と父の政治的な会話を、ミフィーシーリアは黙つて聞いていた。

だが、彼女の胸中を占める事は、たつた一つ。

もちろんそれは新たに友人となつた彼女の事。

そんなミフィーシーリアの心中を察したのか、ケイルが彼女へと視線を向けた。

「ミフィーシーリア嬢。何か私に尋ねたい事があるんですね?」

直球でそう尋ねられたミフィーシーリアは、覚悟を決めて目の前の宰相補に尋ねる。

「はい、クーゼルガン伯。無礼を承知で率直に伺います。コトリは……彼女は何者なのですか？」

「治癒」と「雷」の異能を持つ、どこか浮き世離れした銀髪の少女。

「治癒」と「雷」の異能を持つ者。それはカノルドス王国においてたつた一人を指す。

国王ユイシーカ・アーザミルド・カノルドス1世。

共に「治癒」と「雷」の異能を持つコトリと国王の間には、何らかの繋がりがあると考えるのが普通である。

力の籠った視線で、ケイルを見つめるミフィーシーリア。対するケイルも冷ややかな視線でミフィーシーリアを見つめ返す。

「それを聞いてどうしますか？」

「別にどうという事はありません。ただ、友人として気になつただけです」

「あなたがコトリを友人として思つてゐるなら、直接彼女に聞けばよいのでは？」

そう聞き返されて言葉を失う。ケイルの言葉通り、確かにコトリを友人だと思うのなら、直接彼女に聞けばいいのだ。もっとも、その質問に彼女が正直に答えてくれるかは別問題だが。

心の中で様々な思いが浮かんでは消えるミフィーシーリアを、ケイルはその冷たい視線でずっと見据える。

そしてミフィーシーリアが続けて何かを言おうとするより早く、ケイルは冷めた表情のまま衝撃的な事実を彼女に告げた。

「率直に言いましょう。コトリは……彼女は人間ではありません」「え……っ！？」

「コトリは作られた存在なのです」「作られた……存在……？」

ケイルの言葉が理解できず、ただ繰り返すだけのミフィーシーリア。コトリが人間でないとは？ しかも作られた存在とは？ コトリは一体何だというのだろう。

ミフィーシーリアが内心で混乱しているのを悟ったケイルだが、余計な事は何も言わず淡々と事実を告げる。

「彼女は、異能によつて作りだされた存在……我々の仲間に、疑似的な生物を生み出す異能を持つた者がいます。我々はその異能の事を“擬似生命”の異能、そしてコトリたち作られたものの事を“使”と呼んでいます」「彼女……たち？」

「ええ、異能によつて作りだされたものはコトリ以外にもいるのです。もつとも、人の言葉を話し、あそこまで自由に振る舞うのは彼女だけですが」

異能によつて作りだされた擬似生命体。それがコトリなのだとケイルは言う。

「本来なら彼女も他の“使”同様、人の言葉を理解する事はできても、自発的な行動を取つたりする事はないと思われていたのですが……どうやら“親”的”の異能が強過ぎて、その影響を受けたようでした」

「“親”的”の異能……それはまさか……？」

「はい。姫が考へている通り。コトリの“親”はユイシーク・アー

ザミルド・カノルドス1世陛下です。彼女は陛下の「使」なのです

よ

コイシーケの「使」であるコトリ。彼女はいわばコイシーケの一部ともいえる存在であり、コイシーケとの間に存在する「絆」で繋がつていて感覚の共有さえできるのだといふ。

そのため、限定的ではあるが「親」であるコイシーケの異能を使う事ができるのだ。

もつとも、「親」の異能を使える事が確認されているのはコトリのみであり、他の「使」たちは、例え「親」に異能があつてもその力を使う事はできない。感覚の共有は稀に他の「使」でも確認されているが。

「コトリは作られた存在。そして彼女は陛下の一部でもある。敢えて悪い言葉を使うなら、彼女は陛下の所有物とも言える。この事実を知つて、あなたはどうしますか？」

「え……？」

「コトリが人間ではない、と知った上で、ミフィーシーリア嬢はそれでもコトリを友人だと仰しゃいますか？」

ケイルの視線が、冷たくミフィーシーリアを貫く。

その視線に晒され、最初こそ混乱していたミフィーシーリアの思考は、その視線の冷たさに徐々に落ちついていく。

そして。

そしてミフィーシーリアの心中で一つの事実ができるがる。

もつとも彼女にとって、それはもうとつくにできあがっていた事を、改めて確認しただけに過ぎないのだが。

だから、ミフィーシーリアは告げる。

ケイルの冷たい視線に怖じ氣づくこともなく、心の中にあつた眞実のみを。

「はい、クーゼルガン伯。例え何者だろうが、コトリは私の友人です。その事実だけは、たとえあなたであろうが陛下であろうが、覆す事はできません」

相手は自分よりも爵位が上の伯爵。しかも将来は国の内政を一手に引き受けるようになると噂される人物。しかも陛下の信頼も厚い片腕的な存在。

そんな人物に対し、一介の男爵令嬢でしかないミフィイシーリアは一步も怯む事なく、心の中にある、いや、コトリとの間に存在する二人の絆を信じて告げた。

そんなミフィイシーリアを探るかのようにじっと見つめるケイル。事実、彼はミフィイシーリアの言葉の真偽を探っていたのだろう。

どれくらいの間、一人で見つめ合つていただろう。

やがてケイルの冷たい表情が、すっと温かいそれにとって変わった。

「どうやらあなたは、陛下の言葉を告げるに相応しい人物のようですね」

「は？ どういう意味でしょう？」

「陛下はコトリを通して、あなたのコトリへの接し方に興味を持たれました。そして本日、私がこの場に窺つたのは、先日の事件の報告の他にもう一つありました」

ミフィイシーリアは、ケイルの話が急にわけの判らない事になつて戸惑う事しかできない。対してアマロー男爵は、何となくケイルが何を言いたいのか察し、まさか、いやそんな、と自分に必死に言い聞かせる。

そしてついに、ケイルの口からミフィイシーリアの運命を大きく変える一言が零れ落ちた。

「陛下は私に仰しゃられました。もしミフィイシーリア嬢が、コトリ
が人ではないと知つても、躊躇なくコトリを友と呼べるのなら。そ
の時はあなたを王都に連れて帰れ、と」

「…………はい…………？」

「つまりですね、ミフィイシーリア嬢。陛下はあなたの後宮入りを望
んでおられます。あなたは側妃として望まれているのです」

ケイルの言つている事を理解した瞬間、ミフィイシーリアはそのあ
まりの驚愕の内容に、大きく目を見開き。

そしてその隣では父であるアマロー男爵が、あまりの事にくたり
と氣を失つて倒れた。

とんでもない事になっています。

前回、お気に入り登録が25を超えた、と言いました。しかし、あれからほんの数日でその倍の50を超えてしました。アクセス数も総合PVが13000を突破し、ユニークの方も2500人を超えていきます。

これらは一重にここに訪れてくださる皆様のおかげと感謝する事しきりです。

ありがとうございます。これからもがんばります。

今後ともよろしくお願ひします。

しかし、本当にどこからこれだけの人々が来てくれるんだろう?ここに来る切っ掛けとなつた理由を誰か教えてください。

アマロー男爵領にある唯一の村。その日、その村中がざわざわと騒がしかつた。

村の中央の通りを数騎の騎士に先導された立派な馬車が三台、ゆっくりと通り過ぎて行く。

そして馬車の後ろにも、数騎の騎士の姿が見える。
その馬車は全て黒塗りで、所々に細かい細工の入った、見るからに高級そうな馬車であった。

そしてその馬車の横にある扉の部分。そこには剣を抱えて祈りを捧げる少女の紋章。

村人たちとはその紋章が誰のものかは判らなかつたが、馬車の造りからかなり身分の高い家のものだろうと推測し合つ。

剣を抱えて祈りを捧げる少女の紋章。その紋章を持つ家は、居間のカノルドス王国は特別な意味を持つ。
その紋章はアーザミルド家の紋章。

即ち。

この馬車の持ち主は、現カノルドス王国国王、ユイシーケ・アーザミルド・カノルドス1世その人なのであつた。

騎士と馬車の一行は、村を通り過ぎ、アマロー家の屋敷に到着した。

屋敷の門では、当主であるグウドン・アマロー男爵を始め、彼の妻や二人の子供、そして僅かだが数人の使用人がその馬車一行を出迎えた。

やがて馬車一行が停止し、一番先頭の馬車の扉が開く。

中から現われたのは一人の男性。

しかし、その男性が何か言うより早く、彼の影から飛び出したも

のがあった。

「ミフィーっ！…」

「コトリっ…？」

馬車から飛び出したコトリは、実に嬉しそうにミフィイシーリアに抱きついた。

そんなコトリとミフィイシーリアを横目で見ながら、先程の男性は改めてグウドンへと向き直った。

「お久しぶりです、アマロー男爵

「ひがいりや、クーゼルガン伯。一ヶ月振りといつといふですか」

先日のアルマン子爵　今では元、子爵だが　の事件から、既に一月が経っていた。

そしてこの一月。アマロー男爵家は実際に大騒ぎだった。

元より、ミフィイシーリアの結婚の準備は進められていた。だが、その嫁ぎ先が一介の子爵から、側妃とはいえ国王へと変更になつたのだ。当然、準備にかける度合が変わつてくる。

結局、アマロー家はミフィイシーリアの後宮入りを承諾した。

そもそも、辺境の貧乏貴族でしかないアマロー家に、国王からの正式な要請を断ることなどできるわけもなく。

ミフィイシーリアもいきなりの後宮入りに不安が残るのも事実だが、国王の元ならコトリとも頻繁に会えるだろう。そう考えれば、アルマン子爵の元へ嫁ぐよりも気楽になれた。

何より、ミフィイシーリアが後宮入りする事で、王国からアマロー男爵家には十分な援助が送られることになった。

それ加えて、アルマン元子爵の領地をアマロー男爵が統治する事にもなつた。これは表向きアルマン元子爵の悪事を暴くのに、アマ

ローラン爵が協力した事への報償となつてゐるが、実際にはミフィーシー

リアが後宮入りするための「ご祝儀」であるといえるだろ。

そしてその一ヶ月はあつという間に過ぎて、本日、国王の元へと向かうミフィーシーを、ケイルが護衛を兼ねて迎えに来たのだ。ちなみに、コトリが強引に動向を強請り、彼女に甘い国王がそれがあつさりと許したのは言うまでもない。

「これだけ……ですか？」

ミフィーシーが王都へと持つて行く予定の荷物を前に、ケイルは呆然とした表情で立ち尽くしていた。

ミフィーシーが準備した荷物は、大きな鞄が二つ。たつたそれだけだったのだ。

彼女の荷物がどれだけあるか判らなかつたため、荷物を運ぶための馬車を一台も準備してきたのに、まさか大きめとはいえ鞄二つだけとは。

これには逆の意味でケイルは開いた口が塞がらなかつた。

『解放戦争』に勝利しコイシーケが王位を得ると、それまで中立だつた貴族たちは、我先にと娘や一族の中でコイシーケと年が近い者を側妃として差し出した。

もちろん、それら全てを側妃として受け入れたわけではないが、それでも何人かは側妃として後宮入りをした。

その際、彼女たちが準備した『嫁入道具』は、馬車数台分でも收まり切らないほど膨大なものだったのだ。

中にはそれだけでは飽き足らず、十人以上の侍女や召し使いを引き連れて後宮入りした者もいたほどである。

それを知っているケイルは、アマロー家の経済事情を考慮しつつ、馬車二台もあれば十分だと判断した。

それなのに実際に蓋を開けてみれば、用意されていたのは鞄二つ。

これではケイルでなくとも驚くといつものだらう。

その後、ミフィーシーリアは家族や使用人たちに別れを告げ、馬車に乗り込んだ。

そのミフィーシーリアに後に、彼女の鞄を持ったメリ亞が続く。今回のミフィーシーリアの王都行きに、メリ亞はまたも同行を申し出てくれた。

「何言つてんですか、お嬢様。アルマン子爵の屋敷に行ぐのに比べれば、王都の方がよっぽど楽しみつてもんですよ」

と、メリ亞は笑いながらミフィーシーリアに告げた。
だが、メリ亞の心中は樂しみどころか真逆であつた。

彼女たちが旅立つ前日、メリ亞は母であるシリアから何があつてもミフィーシーリアを守るよう言っていたのだ。

「メリ亞。実の娘であるあなたに、こんな事を言つるのは母親として失格かもしれないけど……最悪の場合、あなたは自分自身を楯にしてでもお嬢様を守りなさい」

「うん。判つているわ、お母さん。何があつても、お嬢様を守つてみせる」

自身の決心を母に告げるメリ亞。

母曰く、後宮とは女の戦場との事。

陰謀、謀略、抜け駆け、陥れなど何でもありの魔境。

国王の寵を得るためなら、周りの側妃を出し抜き、騙し、時には暗殺さえ有り得るまさに女の戦場。

そんな戦場の中で、ミフィーシーリアにとつて味方と呼べるのは、おそらくメリ亞ただ一人だらう。

ただ、よくアマロー家に出入りしていたコトリという女の子は、どうやら国王の縁者らしいので、彼女がミフィーシーリアの友人である以上、味方になってくれる人物も現われるかも知れない。その辺りを見極め、何としてでもミフィーシーリアを守る。それがメリアの隠された決意だつた。

「あ……あの、クーゼルガン伯爵様」

「何だ？」

「少々質問があるのでですが、よろしいでしょうか？」

「言つてみる」

現在、馬車の中でミフィーシーリアを中心に、彼女の右側にコトリが、左側にメリアが馬車の進行方向に背を向けて座つている。人見知りの激しいコトリだが、何度もアマロー家出メリアと顔を合わせているうち、ある程度は打ち解けるようになつていた。

そして彼女たちの正面にはケイルが一人、腰を下ろしている。そんなケイルにメリアが質問する。一応対応するケイルだが、その態度は何とも冷たくそつけないものだつた。

平民の方から伯爵であるケイルに質問したのだ。機嫌が悪くなつても仕方ないかな、とメリアは思いつつ質問を続けた。

「今の後宮には、側妃様は何人ほどいらっしゃるのですか？」

「四人だ」

「え？ 四人しかいらっしゃらないんですか？」

「そうだが？」

それがどうかしたか、とでも言いたげな冷たいケイルの態度に、それ以上聞けなくてメリアは黙つてしまつ。

そんなメリアの心境を読んだわけではないだろうが、ミフィーシーリアの右に座つていたコトリが、もう少し詳しい説明をしてくれた。

「最初はもつといたんだけじね、出て行つちやつたのよお」

「出て行つた？ どうして？」

「うん、あのね？ あなたたちはへーかにふさわしくない、とか言って、サリイが追い出しちゃつたの」

「サリイ？」

そう言えば、以前にもその名前はコトリの口から聞いた事があるな、とミフィーシーリアが思つていると、彼女の前に座るケイルが補足した。

「サリナ・クラークス様。カノルドス王国宰相……即ち、私の上役であるクラークス侯爵のご息女の事です」

クラークス侯爵家といえば、現在のカノルドス王国において『御三家』と呼ばれる大貴族の一つである。

『御三家』とは、『解放戦争』前はアマロー一家と同様な辺境の下級貴族でありながら、『解放戦争』の初期からユイシークに協力した功績により、新体制となつた現カノルドス王国の中心を担う事となつたクラークス侯爵家、カークライト侯爵家、そしてミナセル公爵家のことを言う。

ミナセル公爵家は『解放戦争』中に当主を失い、家督を夫人が継いだ。その後、公爵夫人は公職を辞しているが、現王国の政治をクラークス家が、軍部をカークライト家が統括している。

そんな大貴族の令嬢であるサリナ・クラークスは、現在ミナセル公爵家の令嬢であり、『癒し姫』の異名を持つアーシア・ミセナルと並んで、王妃の最有力候補と言われている側妃もある。

(なるほど……後宮に入つたら、お嬢様にも嫌がらせをしてくるかも。これは要注意だわ)

気に入らない側妃を追い出すほどだから、きっと気性の激しい人なのだろうと、メリアは推測し、心中で第一仮想的に認定する。そして、髪型は金髪の縦ロールに違ないと勝手に決め付けた。

「私からも質問しても構いませんか？ クーゼルガン伯
「は、何なりと」

随分お嬢様と私とで態度が違わない？ と思つたメリアだが、もちろんそんな事を口にだしたりはしない。

「「紅雀の巣箱」亭であなたと初めてお会いした時に比べて、今のはあなたは少々……その、冷たいというか印象が違うと……」「あの時はアルマンの奴隸密売の証拠を押さえるため、別人になりますしていましたから。初めて会う人物には違う印象を与えるため、多少の演技を加えておりました。こちらの方が私の地です」

特に表情を変える事なくそういうケイルに、メリアは冷血で嫌な奴だと感じた。

しかし、その印象はすぐにひっくり返る事になる。

「そう言えば、パパやジエイクが言つていたつけ。ケイルの奴はすぐ冷血ぶりたがつたり、悪ぶりたがつたりするけど、本当はお人好しなんだって」

「コ、コトリツ！？」

「コトリの何気ない一言に、ケイルは真っ赤になりながら狼狽えた。この人が狼狽えたところを初めて見るな、とミフィーシーリがやや場違いな感想を抱いたり、へえ、そんなに冷たい人じゃないんだ、

とメリ亞が感心したりしている間も、コトリとケイルの遣り取りは続いていた。

「ここの前、アマロー男爵領に行つた時も、遊んでいる子供たちに飴玉あげたりしてたよねえ？」

「ど、どうしてそれを知つているつ！？」

「だつてコトリ、ジェイクと一緒に隠れて見てたもん」

「ジ...イク……つー！　あ、あいつはコトリに何て事を教えやがるつー？」

一気に印象が正反対のものへと取つて代わつたケイルと、楽しそうな声を上げるコトリを微笑ましげに眺めるミフィーシーリアとメリア。

彼らを乗せた馬車は、護衛の騎士たちを引き連れてゆっくりと南へと向かう。

「じ」と揺れる馬車の中から、何気なく外の景色に目を移したミフィーシーリアは、視界の隅を何かが横切つたような気がした。改めてそちらに視線を移せば、遙か彼方の空を何かが舞っていた。かなり距離があるのに、はつきり見えるといつことは、その何かの大きさはかなりのものだらう。

空を飛ぶ魔獣の類でしょうか？　ミフィーシーリアが眺めている間にも、その魔獣らしきものとは更に距離が開いていき、やがて見えなくなつた。

取り敢えず襲つて来る様子もなさうので、ミフィーシーリアは改めて王都へと思いを馳せさせる。

そこで出会うであろう人たち。特に自分が嫁ぐ相手でもある国王陛下。

噂では色々と聞き及んでいるものの、ミフィーシーリアは国王と直接謁見した事はない。いや、今後も謁見することなどないと思つていた。

そんな自分がまさか側妃に選ばれるとは。

確かに不安は尽きない。だが、明るい材料もないわけではない。

コトリがいる。どこか幼さが抜けないこの少女といふと、いつも

楽しくなる。

メリ亞がいる。幼い頃ころから姉妹同然で育つて来た彼女は、きっと自分を支えてくれる。

だから。

だからミハイシーリアは、王都へ行つても大丈夫だと自分に言い聞かせた。

07・Huluの選え（後書き）

『辺境令嬢』 更新。

先日、何気なく「小説家になろう」のランキングを見てみました。するとジャンル別の日別ランディングと週間ランキングの100位以内に、この『辺境令嬢』がランクインしているじゃないですか！

こいつはもう快挙ですよ、快挙。

もちろん、これらは全てここに訪れてくださる皆様のおかげです。ありがとうございます。いつも感謝してもしきりません。

物語の方はこれにて「アマロー男爵領編」は終了し、次回よつ「王都編」へと突入します。

引き続きお付き合いいただければ幸いです。
今後ともよろしくお願いします。

赤く柔らかな絨毯が敷かれた広大な広間。

天井には豪華なシャンデリアが幾つもぶら下り、もしも今が夜だつたらきっと星空のような煌めきを放つていただろう。

そしてミフィーシーリアの背後には先程開かれたばかりの人の背丈の倍以上ある大扉。

そしてその扉から彼女の足元を通り過ぎ、赤い絨毯は真っ直ぐに階段状になつた広間を一望できる場所へと続く。

そこには椅子が一つ。その椅子は決して華美ではないものの、品の良い装飾が施されている。

もちろん、その椅子は玉座だ。

この国で国王只一人が座る事を許された、正にこの国の頂点。

そして今、その玉座には一人の人物が腰を下ろしていた。

決してその人物を見上げないようにしながら 謁見の際に不躾に玉座の主を眺めるのは不敬になる 、ミフィーシーリアは視線を伏せたままゆっくりと絨毯の上を進む。

そう。

今、ミフィーシーリアは自分の夫となるべき国王と初の対面を果たすため、謁見の間にいるのだつた。

カノルドス王国、王都ユイシーケ。

人口は約三万人。カノルドス王国最大の都市である。

かつてはこの王都には別の名前があつたのだが、新国王が即位した際、新王の偉業を称えて新王と同じ名前に改名された。

そんな王都までアマロー男爵領からは約二週間。それだけの時間をかけて、ミフィーシーリアはようやく王都へと辿り着いた。

途中、宿場町などで宿を取つたりしたが、慣れない旅にミフィイシ

ーリアとメリ亞はすっかり疲れ果てていた。

ようやく王都へと辿り着き、取り敢えず客間へと通されたミフィーシーリア。メリ亞もその客間に附屬している侍女の控え室に入り、その日は旅の垢と疲れをゆっくりと落とした。

その際に使用した客間にあつた浴室を見て、そのあまりの広さと豪華さに思わず本当にこの浴室を使つてもいいのかと、こそぞ相談する主従の姿があつたりしたが、まあ、それはご愛敬。

そして一夜明けて。

ついにミフィーシーリアは国王と対面するため、謁見の間へと赴いた。

ただ、本日の謁見は非公式のもの。ミフィーシーリアが側妃として紹介されるのは後日改めて行われるので、今日、謁見の間にいるのは国王と僅かな側近のみだと聞かされていた。

大勢の貴族たちの前での謁見ではないと知り、幾分緊張が和らいだミフィーシーリア。

本日の謁見のために用意されたドレスに着替えたミフィーシーリアは、謁見の間へと続く扉の前で自分の名前が呼ばれるのを待つ。そうやって待っている間、今着ている上等なドレスに着替える際、あまり着慣れないドレスにメリ亞共々悪戦苦闘した事を思い出し、思わず小さな笑いを零す。

そんなミフィーシーリアに、扉の両横で長柄武器を構えた近衛兵たちが不審そうな視線を向ける。

近衛兵たちの視線に気づき、改めて姿勢を正した時、厳かに彼女の名前が呼ばれた。

そして同時に扉が開く。

開かれた扉の向こうには赤い絨毯。そしてその絨毯は玉座へと続く。

その絨毯の上を、ミフィーシーリアは視線を伏せながらゆっくりと進む。

先程ちらりと謁見の間の中が見えたが、どうやら玉座とその横に

誰かがいるようだつた。

玉座にいるのはもちろん国王だつた。そしてその横に控えているのは、ちらりと見た限りでは年若い男性のよう見えた。

ひょっとするとあれはケイルだらうか。そんな事を考へてゐる内に、ミフィーシーリアは玉座の元まで廻り着いた。

そこでミフィーシーリアは改めて跪く。やがて上から面を上げよとの声がかかり、ミフィーシーリアはゆっくりと視線を上げて行く。玉座の横には侍従らしき制服を来た若い男性。ケイルでもジェイクでもなく初めて見る顔だ。

そして改めて玉座へと視線を移したミフィーシーリアは、そこに座るものを見た。

見た。そりやあもう、まじまじと。

それが不敬だと知りつつも、ミフィーシーリアは玉座から視線を逸らす事ができなかつた。

太短い手足は毛足の短い細かな柔毛に覆われ。ぎょろりとしたまん丸な目は幾分離れ氣味。

つんと突つ立つた耳は左右非対称で。

でろんと吐き出されたピンクの長い舌が何ともラブリー。

その姿をまじまじと見つめたミフィーシーリアは、長い長い沈黙の後ぽつりと零した。

「…………ぬいぐるみ…………？」

そう。

玉座にでんと腰を下ろしてゐるもの。

それは熊のぬいぐるみだつた。それも等身大の。

思わずぽかんとぬいぐるみを見上げるミフィーシーリア。そんな彼女に、玉座の横に立つていた男から声が飛ぶ。

「何だ、その態度はつ！？ 無礼であろうつ。」

「は……？ え……？」「

無礼と言われても呆然とするしかないミフィーシーリアに、その男は更に言葉を浴びせかけた。

「このべあーくん三世は、『解放戦争』中に何度も暗殺者の刃から陛下を身体を張つて守つた真の勇者である！ 見ろ！ べあーくん三世の身体中にある名誉の負傷の数々を！」

言われて思わずそのぬいぐるみを見れば、確かに身体中に繕つた跡があつた。

男の言葉を信じるなら、それが暗殺者の刃による名誉の負傷とやらだらう。

「そんな真の勇者をして呆然とするとはー、何たる不敬！ 何たる無礼！ その罪や許されじ！」

玉座の横の男は、どこか芝居がかつた仕草で一人熱弁をふるつ。

「これは最早死罪は確定。だが、べあーくん三世は心が広い。貴様がこの場で全裸になり、床に額を擦り付けて謝るのなら許すと仰しやつておられる！ さあー、べあーくん三世に感謝し、全裸になつて許しを請うがよい！」

何か一ヶ月くらい前にも似たような事を言われたなあ、と思わず現実逃避に走るミフィーシーリア。

その間も、どこか人の悪そうな笑みを浮かべて、男はミフィーシーリアに裸になれと迫る。

「どうしたらいいのかミフィーシーリアが迷っていると、謁見の間の奥、玉座の右手にあつた小さな扉が突然開き、そこから一人の女性が現われた。

その扉は本来、王族が謁見の間に入る際に使用される扉だ。どうすることは、その女性は王族なのだろうか？

その女性が身に付けているものは、目の前で喰く男とよく似た侍従の制服らしきもの。もちろん、男が着ているものとは各所が違うから、女性用の制服か何がだろ？

ミフィーシーリアより幾つか年上と思しきその女性は、緩やかに波打つ長い亞麻色の髪を揺らし、その実に整った顔に明らかに怒りを浮かべながら、大股に玉座横の男へと歩み寄る。

対して男はといえば、ずんずんという擬音が聞こえそうな勢いで近づいて来る女性に、明らかな怯えを見せて後ずさる。

「なにをやつているのかしら？」

一字一句短く区切つて問い合わせる女性。その灰色の瞳には明らかに怒りと僅かな呆れ。

「なにをやつているのかしら？」

もう一度同じ質問をする女性に、男は凄まじい勢いでだらだらと汗を浮かべる。

「い、いや、あのな？ アマローの娘と謁見するって事だったから、ここは一つ少し驚かせようかなーと……あ、いや、だからな？ そんなに怒る事ないだろ、リイ？ こいつはきっと緊張しているだろう彼女を和ませようとした[冗談]。な？ おまえもそう思つよな？」

男は必死に眼だけでミフィーシーリアに弁護を要求する。

「」の時、ミフィーシーリアは改めてこの男の容姿を確認した。

年は自分より少し上か。だが二十歳はおそらく超えていまい。明るい茶色の髪はよく手が入れられており、漆黒の瞳はきらきらと輝いている。

もつとも、その輝きは悪戯小僧のものと同一のものであったが。顔は整ってはいるが決して美形と呼べる程ではない。だが、一度見たら決して忘れられない何かがこの男にはあった。

そう。言つてみれば、人を引き付けて止まない魅力のようなものが。

ミフィーシーリアが男を観察している間に、リィと呼ばれた女性はその男の元に辿り付いていた。

そして彼女はその華奢な右手を振り上げる。もちろん、手はぐつと拳に握り締められて。そしてそのまま、その拳は男の脳天へと振り下ろされた。

「」の、永遠の悪戯小僧がああああああああああああああああつ……

叫びと共に響くげいんという打撃音。

男は脳天を押さえて床を転げ回っている。どうやら先程の拳には相当な力が込められていたらしい。

床でのたうち回る男を冷たく見下ろし、リィと呼ばれた女性はふん、と侮蔑の溜め息を一つ零すと、のたうち回る男の懐を探り、何やら引っ張り出すとつかつかとミフィーシーリアへと歩み寄った。

そしてミフィーシーリアの前まで来ると、優雅に一礼。先程の事などなかつたかのような見事な一礼だった。

「ようこそ、ミフィーシーリア・アマロー様。王宮一同を代表し、あなたを歓迎いたします」

自分に礼を貰くす女性に、ミフィーシーリアも慌てて「」ひらひらや、

と頭を下げる。

「私は宰相補兼侍従長、リーナ・カーリオンと申します」

再び優雅に頭を下げたその女性は、先程男の懷から取り出したものをミフィイシーリアへと差し出した。

それは鍵だった。

どこか古めかしい銀色の鍵。

そしてその鍵の頭の部分には、黒い黒曜石のような宝石が一つ付いていた。

「この鍵は後宮の住人の証です。決して無くさないよう」。いいわね？」

リーナから渡された鍵を、ミフィイシーリアは改めて眺める。

そして鍵の黒い宝石が付いていない面に、装飾された文字で「6」と刻まれていて気づいた。

「それはあなたが後宮第六の間の主人の証。つまりあなたが現在第五側妃であるという証明なの」

現在後宮第一の間に住人はいない。そこは正妃のみが入る事を許される部屋だからだ。

そして第二の間には第一側妃であるアーシア姫が入っている。以後、後宮入りした順に第五側妃であるミフィイシーリアの第六の間まで、後宮の部屋が埋まっているとリーナが説明してくれた。

そしてその説明が終わると、リーナは微笑みながら懷から何かを取り出す。

その取り出されたものを見て、ミフィイシーリアが驚きを浮かべる。リーナが取り出したのは、先程ミフィイシーリアが手渡された鍵と

同じ物。

唯一違つところといえば、ミフィーシーリアの鍵に「6」の文字が刻まれていたのに対し、彼女の鍵には「5」の文字が刻まれているところか。

それは即ち、この日の前の女性もまた、ミフィーシーリアと同じ側妃であるという事に他ならない。

驚いて動きを止めたミフィーシーリアに、リーナは微笑みを浮かべたまま後宮に案内するから着いて来るよう促した。

しかし、驚きから立ち直ったミフィーシーリアは、果してそのまま彼女に着いて行つていいのか迷う。

そんなミフィーシーリアの様子を察したリーナが振り返つた。

「どうしたの？」

「あ、あの……勝手に謁見の間を出ても構わないのですか？　まだ国王陛下との謁見が済んでいませんが……」

「ああ、その事ね。それならもういいわ」

そう言い捨てて謁見の間を出ようとするリーナ。それでもミフィーシーリアが迷う素振りを見せると、リーナは改めていまだに床でのたうち回つている男を指差した。

「あれが陛下よ」

「は？」

ぽかんと表情の抜け落ちた顔でミフィーシーリアは立ち尽くす。

そんな彼女に、リーナは無理もないわね、と溜め息を一つ零す。

「カノルドス王国国王、ゴイシーケ・アーザミルド・カノルドス一世。正真正銘、あそこでたうち回つてるのが我らが国王陛下その人よ」

「はあああああああああつ！？　あ、あれが国王陛下なのですかつ
！？」

慎みも礼儀もふつ飛んだミフイシーリアの叫び声が謁見の間に響き渡る。

そんなミフイシーリアに、リーアは腕を組んで無理もないわね、
と沈痛そうに再び呟いた。

01・国Hとの謁見（後書き）

『辺境令嬢』 更新。

やつてしましました。

じついう後宮ものの王様つて大抵美形と相場が決まっているというのに、うちの王様は美形ではありません。しかも、彼のモットーは「永遠の悪戯小僧」です。

果してこんな王様で受け入れて貰えるのか少々心配ですが、こんな王様でやつしていくしかありません（笑）。

今後もよろしくお願いいたします。

アマロー領から王都までの日程をこつそりと修正。今までの距離だとアマロー領までの距離が近過ぎて、辺境というイメージではなくつてしまいそうだったので。

リーナに案内され、ミフィーシーリアは王宮の廊下を歩く。向かう先は後宮でミフィーシーリアに与えられた第六の間である。

途中、昨夜泊まった客間に立ち寄りメリ亞と合流、荷物を持った彼女が静かにミフィーシーリアの後ろを着いていく。

荷物を持ったメリ亞の姿を見たリーナが、その少なさに少々驚いた様子だったが。

複雑な構造の王宮は、ミフィーシーリアやメリ亞からすれば迷路同然で、とても一度で覚えられるようなものではなく、表には出さないもののミフィーシーリアもメリ亞も必死にリーナの後を追う。

きっと今、彼女とはぐれたら迷子になるのは確実なのだから。

そして同時に脳裏を掠めるのは、先程の一幕。

自分の数歩先を歩くこの女性はれつとした側妃の一人であり、更に宰相補兼侍従長という要職に就いていると言っていた。

だが、例え國の要人の一人であり、側妃の一人であつても、一国の国王を殴つて許されるのだろうか。いや、そもそも側妃という立場でありながら、要職にあるというのもいかがなものか。

正妃や側妃の第一の仕事と言えば、当然子供を産む事である。

王の世継ぎが生まれる確率を上げるために、後宮という場所は存在するのだから。

だから普通、側妃は後宮から出る事はない。正妃ともなれば様々な行事に出席する必要もあるだろうが、側妃にはそのような義務はない。

それにどにどのような危険が潜んでいるのか判らない、という事実もある。

王の寵愛を受ければ当然、他の側妃たちからは妬みを買つ。そうなると、最悪の場合暗殺という手段が用いられる可能性だつてあるのだ。

だから側妃たちは後宮から出ることなく、出たとしても侍女や護衛の兵を引き連れて出る。

だがこのリーナという側妃は、護衛どころか侍女の一人も連れず、あまつさえ公職にまで就いていっているというのだ。さすがにこれは非常識過ぎないだろうか。

その事実にミフィーシーリアは知らず眉間に皺を寄せてしまう。そんな彼女の様子に気づいたのか、前を歩くリーナが振り向いた。

「どうしたの？　ここになると、皺寄つてゐるわよ？」

と、リーナは自分の眉間を指差しながら問う。

「あの…… ょろしかったのですか？」

「え？　何が？」

「そ、その…… 国王陛下を殴つてしまわれて……」

「はあっ？　国王陛下を殴つたつ！？」

ミフィーシーリアの後ろを歩くメリアが思わず驚きの声を上げるが、リーナはそれを一切気にせずに深々と溜め息を零す。

「私が王宮の中で何て呼ばれているか知ってる？」

いきなり見当違ひな問いかけに、ただただ黙つて首を横に振るミフィーシーリア。

「『国王の外付け良心』……私の事を王宮の人たちはそう呼ぶのよ。まだ不本意だけど」

リーナが言うには、何かにつけて暴走する国王を彼女が奔走しながらが諫めるのが、いつの間にかこの王宮では当たり前の光景にな

つてしまつたそうだ。

そして付いた呼び名が『国王の外付け良心』。確かにリーナにとつては不本意な呼び名だろ？

「だから、私があいつの暴走を止める際、多少行き過ぎな行為をしても誰も……宰相閣下や将軍閣下でさえ文句は言わないわ。もちろん、当のあいつも承知している事よ」

国王陛下を平然とあいつと呼び、見下すような態度のリーナ。だが、彼女の瞳の中には確かな信頼と深い情愛が見て取れた。

「リーナ様は……リーナ様は、陛下の事を愛していくのをやめてね……」

思わず零れ出したミフィーシーリアの言葉に、リーナは一瞬驚いた表情を浮かべると、すぐにそれを引っ込んで苦笑を浮かべる。

「もちろん、私はあいつを愛しているわ。だけどそれは私だけじゃない。今、後宮にいる側妃たちは皆、あいつを心の底から愛しているのよ」

照れる様子もなく平然とそう言つてのけたリーナ。そこまで彼女にそう言わしめる国王に、ミフィーシーリアは改めて興味を抱いた。

「あー、くそ。リイの奴、思いつきり殴りやがって……」

床に直接座り込み、頭頂部をひとしきり撫でながら、ユイシーグはぶつぶつと不満を呟く。

そしてひょいと立ち上がると、こまだに玉座にあつたベアーベ

ん？世を無造作に放り投げ、どかりと玉座に腰を下ろした。

「驚いていたかな、あいつ……ま、驚いたなら成功だな」

玉座のひじ掛けに頬杖を突き、そう一人呟いた時。不意に彼の正面の大扉が開いた。

開いた扉の向こうに立っていたのは一人の男性。それはコイシーグがとても良く知っている人物。

その人物は無造作に玉座に座るコイシーグに近づくと、跪く事さえせずに彼に話しかける。まるで気心の知れた友人に対するかのように。

「よつ、シーグ。どうだつた、アマローの『令嬢は？ 対面したんだろ？』

「珍しいな、ジェイク。おまえが俺と側妃との対面を気にするなんてよ？」

国王とその国王を守る近衛隊の隊長。二人は互いの立場を弁える事なく、旧知の知人に対するかのような挨拶を交わす。

「そりやあ、気になるぜ。もしおまえがあのお嬢さんを側妃にと言いい出さなかつたら、俺が嫁に貰つてたところだからな」

「なんだ、ジェイク？ おまえ、あの娘に惚れたのか？」

「んー、別にそういうわけじゃねえんだけどよ。気に入つたのは確かだ。なんせあんな『令嬢はこれまで見たことねえからなあ』

あつけらからんとそう言つたジェイクは、にやりとした笑みを浮かべた。

あの令嬢は領民のためなら、自分が奴隸となる事をいとも容易く承知した。もちろん、奴隸となる事がどういう意味なのか判らない

筈がないだろ。」

聞けば、『トトリが人間ではないと知つても、はつきりと友であると言いつたらしい。

普通の貴族の娘なら、いくら領民のためとはいえ、奴隸となる事を承知したりなどはしないだろ。

そしてコトリの事だって彼女を氣味悪がるか、恐れるかのどちらかだといふのに。

だが、ミフィーシーリアは違つた。

あんな娘は貴族どころか、平民の中でもそつはいだろ。だからジエイクはミフィーシーリアに興味を持った。

ジエイクは今では伯爵位を授かつてゐるが、『解放戦争』の前は単なる孤児だ。そんな自分に堅苦しい貴族の娘は必要ない。とはいへ、平民から伴侶を選ぶわけにもいかない。彼の今と今后の立場がそれを許さない。

だからジエイクはミフィーシーリアなら、と思つたのだ。
彼女ならば自分の伴侶として、きっとやつて行けると。彼女と一緒になら、自分もきっとやつて行けると。
だが、しかし。

「悪いな、ジエイク。おまえがそうであるように、俺もあの娘には興味があるんだ。こゝは国王としての権利行使させて貰つ

親友とも悪友とも呼べるこの男もまた、ミフィーシーリアに興味を抱いたようであつた。

コイシークはコトリと一部感覚を共有出来る。それを通じて、彼もミフィーシーリアがコトリに対しても普通に接することに興味を抱いたのだ。

「まあ、おまえがそう言つなら俺は何も言わねえよ。だが、覚えておけよ？ もしあの娘を悲しませる事しかできねえようなら、俺は

おまえを殴るだけじゃ済まさねえぜ？」

「おう。なに、あの娘ならあの連中の中にも溶け込むわ。」トロ
もいる事だしな」

コイシーケは親友にして悪友を前に、にやりと不敵な笑みを浮か
べた。

ミフィーシーリアたちはその後、リーナに歩きながら王宮や後宮に
ついて様々な事を説明して貰った。

そして、幾つかの階段を上下し、幾つもの廊下を曲ったといひで、
ミフィーシーリアたちの視界に広々とした庭園が飛び込んで来た。

「これは……素晴らしいですね……」

「ふああ……、綺麗な庭園……」

綺麗に手入れされたその庭園に、一人が感嘆の溜め息を零す。
計算されて配置された樹木は綺麗に形を整えられ、植えられた草
花もよく手入れされていて、色とりどりの色彩に溢れている。

地面には一面の芝生が植えられており、裸足で歩いてもきっと快
持ちいいだろう。

辺りには小鳥の鳴き声が幾つも響き、何ともいえない風情を醸し
出している。

そしてそんな庭園の片隅には小さな東屋。その東屋には現在誰か
がいるようで、一人が東屋に設置されている椅子に座り、その他の
者がその周囲に控えるように立っていた。

座っていた人物がどうやらミフィーシーリアたちに気づいたようで、
立ち上がるときつくりと背後の者たちを引き連れてこちらに近づい
て来る。

そしてその人物が近づいた事で、それが綺麗なドレスを身に纏つ

た金髪の年若い女性だと知れた。背後に控えているのはその女性の侍女たちのようである。

「これはこれは『機嫌よつ、リーナ様』

「いらっしゃり、お顔が拝見できて嬉しいですわ、アルジエーナ様」

金髪の女性がドレスの裾を摘まんで礼をすると、リーナも頭を下げて礼を返す。

慌ててミフィーシーリアとメリアも、リーナに倣つて頭を下げた。

「それでアルジエーナ様。本日はいらっしゃりで何を?」

「ええ。父が登城する用事がありましたので、私も陛下に『挨拶をと思いまして。ですが、残念ながら陛下はお忙しいご様子。ですか』いらっしゃりでお待ちしておりましたの」

と、ここでアルジエーナと呼ばれた女性は、ようやくリーナの背後にいたミフィーシーリアたちに気づいたようだった。

「あら、そちらは? もしかして新しい後宮の使用人かしら?」

確かに、ミフィーシーリアは地味な格好をしていた。

流石に今日は国王と謁見するため、今日のために事前に準備したドレスを着てはいたが、元々華美なものを嫌うミフィーシーリアの事だから、今日用意したドレスもそれ程上等なものでも派手なものでもない。

それでもミフィーシーリアにすれば、普段は袖も通した事のないような代物であるのだが。

しかし、目の前の豪華なドレスを身に纏つた女性からすれば、今ミフィーシーリアの姿でも使用人と勘違いしても不思議ではないのだろう。

メリアは侍女であるので、最初から侍女のお仕着せを着ている。

「いじえ、じむぢまミフイシーリア・アマロー様。本日、陛下より第六の間の鍵を『えられた正式な側妃様です』

「な……なんですか？！」

リーナがミフイシーリアを側妃だと紹介した瞬間、アルジエーナの表情が一変した。

それまでは穏やかな笑みを浮かべていた彼女だったが、一瞬だけ驚きを浮かべるとそれはすぐに怒りに取つて代わった。

「！……このわたくしを……ストリーク伯爵家の令嬢たるこのわたくしの後宮入りを断わつておきながら、このような地味な田舎娘が側妃ですってつ！？ そんな事が……そんな事があるはずがないわつ！！」

アルジエーナは顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

そしてその怒りはリーナの背後に控えていたミフイシーリアへと向けられる。

「あなた……つ！！ 一体どうせつて壁下を誑かしたのつ！？」

アルジエーナは今にも掴み掛からんとする勢いでミフイシーリアに迫る。

ミフイシーリアの危機を悟ったメリアがミフイシーリアの前に出ようとしたが、不意にアルジエーナの姿がメリアの前から消えた。

「あ……あれ……？」

急に消えたアルジエーナの姿を求め、メリアはきょろきょろと左

右を見回す。

そんなメリ亞の耳に、ジリからともなべ呻き声のようなものが届いた。そしてビビッサ・ルの呻き声は、彼女の足元から聞こえてくるようだ。

むりくつとメリ亞が視線を下に向けると、そこに先程消えたアルジーナの姿があった。

アルジーナは無様に大地に突つ伏したまま、弱々しく呻き声を上げていた。背後の侍女たちからも悲鳴が上がっている。

彼女が不意に消えたように思ったのは、どうやら転んで地面に突っ込んだからのようだ。

さて、なぜ何もない所で転ぶのだろう? と、メリ亞が周囲を見回すと、どこか不敵な笑みを浮かべたリーナと目が合った。

更によくよく観察してみれば、メリ亞の右足が少し前に出ている。どうやらミフィイシーリアに掴み掛かりとしたアルジーナを、リーナが足を引っかけて転ばせたのだ、とよつやくメリ亞は理解した。

「う……うの……っ…… 何て事するのよっ……」

よつやく起き上がったアルジーナは、ドレスに付いた生の葉を落とす事もせずに自分で転ばせたリーナを睨みつける。

「う、このわたくしにこのような真似をして口で澄むと思つてはいるのつー?」

「あら、あなたこそ正式に側妃となられたミフィイシーリア様に、このような無礼を働いて只で済むとも?」

侮蔑したように言い放つリーナの言葉に、アルジーナは更に顔を赤く染める。

「お……お黙りなさいっ！！ 犬姫の分際でっ！！ あ、あなたなんて元奴隸のくせにっ！！」

元奴隸。その言葉に驚くミフィーシーリアたちを気にかける事もなく、リーナは更に不敵な笑みを浮かべる。

「あなたは間違っているわ」

「何ですってつ！？ あなたがいくら貴族の養子にならつとも、元奴隸という事実は消せなくってよつ！！」

「だからそれが間違っていると言つてこりのよ」

リーナは制服の襟元を緩めると、その首元を白田の元に晒した。そしてそれを見たミフィーシーリアが驚きに目を見張る。

彼女の細く白い首には黒い革製の首輪があつた。よくよく見れば、その首輪には国王であるコイシーケの名前が刻み込まれている。

「私は陛下の元奴隸ではないわ。私は今でも……いえ、永遠に陛下の奴隸なのよ」

そう言つて首輪を晒すリーナの姿は、とても誇り高く輝いていた。

02・犬姫（後書き）

『辺境令嬢』更新。

そして犬姫の活躍。

実は彼女、外伝として何話か書けてしまつほどのお気に入りだったり。

いつか書く事ができればいいなあ。

今回は『魔獣使い』もう更新しています。

今後もよろしくお願いします。

「何事ですか？」

リーナとアルジエーナの間の一触即発の空氣を、吹き込んだ爽やかな一陣の風が吹き飛ばす。

皆の視線が声の方へと向かえば、その先には一人の騎士の姿。男性にしてはやや小柄で線も細くすらりとした身体つきだが、小柄なミフィイシーリアと比べれば頭一つは背が高いだろう。年齢は二十歳前後に見える。

襟元できつちりと切り揃えられた黒髪は絹糸のような光沢を有し、その髪と同色の瞳は優しげに輝いている。

まるで絵物語から抜け出した主役のような、男性とは思えない優しげで美しい容貌の青年。現にこの騎士が現われた瞬間、アルジエーナの背後に控えていた侍女たちの間から黄色い声が幾つも上がった。

騎士の制服を身に着け腰には長剣。そして胸元には隊長の地位を示す階級章。その背後には部下らしき数人の女性騎士の姿があつた。

「……マイリー様……」

アルジエーナが忌々しげに咳く。どうやらそれが現われた騎士の名前らしい。

メリ亞などは、マイリーの美しい姿にすっかり見蕩れている。

そしてマイリーは、そのままミフィイシーリアたちの傍まで来ると、無言でアルジエーナの前にたち、失礼しますと一言断りを入れ彼女のドレスに付いた芝の葉などを優しく取り払う。

「あ、ありがとうございます、マイリー様」

「それで何事ですか、アルジエーナ嬢？　あなたとリーナ嬢が何やら揉めていたと部下から報告がありましたが？」

「い、いえ、何でもありませんわ。では、皆さん、『機嫌よつ

慌てたように挨拶を残すと、アルジエーナは侍女たちを引き連れて庭園を後にする。

その際、リーナやミフィィシーリアを鋭い目つきで一睨みするのを忘れなかつた。

それを目にしたメリアはうんざりとする。

どうやらあのアルジエーナという令嬢は側妃ではないようだが、それでもミフィィシーリアにあそこまでの敵意を露にした。

そうすると、同じ立場になる他の側妃たちは、どれ程の敵意をミフィィシーリアに向かへるところのだろう。そう考えるだけでもメリアの気分は重くなる。

(……だけど、私がお嬢様を守らなきゃ！)

と、メリアは人知れず改めて決意した。

「あまり無茶な事しないでよ、リイ」

「あら、最初に無茶な事したのは向こうよ、マリイ」

リーナの前に立つたマイリーは、苦笑を浮かべながら肩を竦める。互いに愛称で呼び合つての一人は、かなり仲が良さそうだとミフィィシーリアが思つていると、そのマイリーの眼が自分に向いている事によつやく気づいた。

「ひょっとして、こちらの『令嬢』が？」

「そう。 ジュリヤがミフィーシーリア・アマロー嬢。 今日から第六の間に入る方よ」

リーナと言葉を交わしたマイリーは、ミフィーシーリアの前に来る
とすっと一礼する。

「お初にお目にかかります、ミフィーシーリア嬢。 私は後宮騎士隊の
隊長を務めておりますマイリー・カークライトと申します。どうぞ、
よろしく」

「は、はい、ジュリヤ姫、よろしくお願ひ致します」

慌てて頭を下げたミフィーシーリアだが、今、目の前の騎士が名乗
ったカークライトという家名に聞き覚えがあった。

「カークライト……？ それではあなたは……」

「はい。 現在この国の軍部を統括しているカークライト将軍は私の
父です」

御三家の一つ、カークライト侯爵家。

クラークス侯爵家と同じく、『解放戦争』の初期からコイシーケ
に協力してきた貴族であり、先程マイリーが言つた通りカークライ
ト侯爵は軍部を統括している。

マイリーが現在、後宮騎士隊の隊長を務めているという重職にあ
るという事は、この騎士もまたジェイクやケイルと同様に、『解放
戦争』の時からコイシーケと共に戦場を駆け抜けて来たのだろう。

今話に出た後宮騎士隊とは、後宮の警備警護を主任務とする騎士
隊である。

その編成は後宮といふ場所の警備警護から、主に女性の騎士で編
成されている。騎士を目指す少女たちにとって、後宮騎士隊は憧れ
の部隊であるともいえるのだ。

かつてのカノルドス王国では、女性が騎士に叙勲されるような事は有り得なかつた。

だが新体制となつた今では、男だらうが女だらうが貴族だらうが平民だらうが実力があればどんな役職にでも就く事ができるようになつた。

これもまた、現国王が国民から支持されている理由の一つである。

「鍵は受け取りましたか？」

マイリーはミフィーシーリアにこゝと微笑むとそう口にした。

先程見た國王のどこか悪戯小僧のような笑みとはかなり違つなあ、と何気に無礼な事をこつそりと思いつつ、ミフィーシーリアは先程リーナから手渡された鍵を取り出すとマイリーに見せた。

「できればその子は肌身話を持つていてあげてください。そうすればきっとその子は、あなたの想いに応えてくれるでしょう」

「は？ それはどういう意味でしょうか？」

だがマイリーはミフィーシーリアの問いかには答えず、爽やかな微笑みを浮かべるだけ。

「それでは、私はまだ仕事中ですので。後程、またお会いしましょう

う

そう言い残し、マイリーは部下の女性騎士を連れて踵を返した。去つて行くマイリーの背中に、ミフィーシーリアはペコリと一礼すると、リーアへ振り返る。丁度彼女は制服の襟元を正しているところだった。

そしてミフィーシーリアは思い出す。先程、リーアがアルジェーナに『犬姫』と呼ばれていた事を。彼女の首に奴隸の首輪が存在した

事を。

「『』めんなさい。驚かせたかしら？」

リーナは正した制服の首もとを押さえながら尋ねる。

「は、はい。確かに驚きましたが……」

「ふふ。正直ね。でも好きよ、そういう正直なのは。確かに私は陛下の奴隸だった。一応、今では奴隸からは解放されてカーリオン伯爵家の養女となっているけどね」

と、リーナは再び襟元を緩めて首輪を露出させる。そしてくるりと背中を向け、波打つ亞麻色の髪を搔き上げてうなじをミフィーシーリアに見せた。

先程同様、ミフィーシーリアには黒い首輪が見えた。しかし、彼女の首輪には鍵がついていなかった。

普通、奴隸の首輪には鍵がつく。奴隸が勝手に首輪を外して逃亡しないために。

その鍵がないという事は、彼女は自分の意志で首輪を外す事ができるという事。即ち、リーナは奴隸ではないが、敢えてその首輪を身に付けているという事になる。

「この首輪はあいつから初めて贈られたもの……例えそれが奴隸の首輪だつたとしても、私は絶対に手放さない。だつてこれもあいつとの絆の一つだもの」

そう語るリーナの表情は甘く蕩け、まるで恋する少女そのもの。

「私にはね、弟がいるの。たつた一人の肉親の弟が。でも、その弟は病気だつた。いつまで生きられるか判らない死の病……。私は弟

の病を癒してもらつたため、陛下の奴隸になつたのよ。そしてこの王宮で、一番下の下働きとして働き始めた……犬人族たちと一緒に寝起きしながらね。だから人によつては私を『犬姫』なんて呼ぶわ

そうリーナは微笑みながら語る。その微笑みが向けられているのは、今話に出てきた彼女の弟か。それとも恩人にして愛しき国王か。だから奴隸になるぐらいは最初から覚悟していたわ

「当時の私たちは孤児だつた。お金どころか何も持つていなかつた。弟の治療の引き換えに差し出せるものといえば私自身しかなかつた。

今、リーナの顔に浮かぶのは、明らかに怒りだつた。

「でもあの鬼畜ときたら、私を奴隸にするだけじゃ飽き足らず、その場で裸になれって言つたのよ？ それも公衆の面前で！」

リーナが国王となつたコイシーケに弟の治療を直訴したのは、コイシーケが国王となり、その姿を国民に知らしめるため、王都を馬車で移動中の時だつた。

当然、周囲には新たな王を一目見ようと大勢の人々が集まつていた。そんな中、王に弟の治療を願つたリーナは、その代償として奴隸となり、同時にその場で裸になれと命じられたのだ。

「そ、それで……その、リーナ様は……」

「ええ。裸になつたわよっ！！ 公衆の面前で全部脱いだわっ！！

そりやあもう、王都中の人々に裸を見られたわよっ！！」

顔を赤く染めた二人の会話。

一人は羞恥で、もう一人は怒りで顔を赤くするという違いはあったが。

「そりゃあね、あんな公衆の面前でいつに直訴した私が悪かつたのかもしないけど！」

リーナも今では知っている。なぜユイシークがあの時、あのように過酷な条件を出したのかを。

もちろん、単なる好色だから出した条件ではない。然るべき理由があつて出された条件だったのだが、その条件を出したのがユイシークである以上、単なる嫌がらせか悪戯ではないかとも思えてしまうリーナだった。

ユイシークが過酷な条件を出した理由。それは徒いたずらに前例を作らなければならなかった。

新しく国王となつた青年が、孤児である姉弟を助ける。それはそれで美談として語り継がれるだろうが、それだけで終わらないのは目に見えている。

ユイシークは国王となつた。今まで単なる反乱軍のリーダーだったが、これからはそれでは済まされない。

国王となつたからには様々な執務が待ち受けている。そしてその量は膨大だ。

それなのに、ユイシークが国民を癒したという前例を作れば、癒しを願う者は後を断たなくなるだろう。

そして一人を癒した以上、それ以外の癒しを断わる事は王としての信用を失う事に繋がる。

あいつは癒したのに、どうして俺は癒してくれないのか。癒しを願う国民からすれば、そう思ってしまうのは当然だろう。

そしてユイシークが国民を癒せば癒す程、王としての執務が滞る。だから、ユイシークはリーナに過酷な条件を出した。

奴隸に落ちてまで癒しを願うのか。公衆の面前で肌を晒してまで

弟を助けたいのか。

果してリーナにそれだけの覚悟があるのかを、コイシーケはある時試したのだ。

「どんな事でもするから癒してくれ」

そう言つ者をコイシーケは何人も見てきた。だが実際には、過酷な条件出されれば尻込み刷る者が殆どだった。

だが、リーナは違つた。コイシーケの出した過酷な条件を全て飲んでまで弟の癒しを願つた。

だからコイシーケはリーナたち姉弟に救いの手を差し伸べた。

リーナの覚悟が本物だったから。彼女の弟に対する愛情が本物だつたから。

実を言えば、今でもこいつそつとコイシーケは国民の癒しの願いに応じている。

だけどそれは本当に癒しを必要とする者にだけ。

様々な者を使い、本当に癒しを必要としている者をこいつそつと王城に呼び、癒しを施しているので。

コイシーケでなくとも癒せるほどのものなら、従兄妹であるアーシアに任せることもある。

そして、誰に癒されたのかを誰にも明かさない事を、癒しを施す条件の一つとして付け加えて。

リーナと同等の覚悟を持つ者を、新しき国王は決して見捨てはないのだ。

「『』めんなさいね。結構な道草になっちゃつたわ

そう詫びると、リーナは改めてミシフィーリアたちを案内した。

先程の庭園は王城の中央に位置するらしく、その庭園をぐるりと

回った先に、これからミフィーシーリアが暮らす事となる後宮があつた。

リーナに従い歩く事しばし。ついにミフィーシーリアの前に後宮へと繋がる扉が現われた。

扉の両脇に立つ女性騎士　後宮騎士と思われる　が、リーナに気づき敬礼する。

騎士たちに鷹揚に頷いたリーナが目配せすると、騎士の一人が扉を押し開いた。

開いた扉の先には、彫刻の施された柱が何本も並ぶ長い廊下。その廊下へと、ミフィーシーリアはリーナに続いて足を踏み入れた。そう。

この瞬間から、ミフィーシーリアの側妃としての、後宮での暮らしが始まるのだ。

03・後宮への第一歩（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

おかげ様をもちまして、お気に入り登録が100件を超えるました。
これも全てはここに来てくださる皆さんのお陰です。

今後もがんばりますので、末永くお付き合いで願います。
よろしくお願いします。

よく掃除の行き届いた廊下を、ミフィーシーリアはメリアを伴つてリーナの後を歩く。

足元は綺麗に磨かれた石の上に絨毯が敷かれている。その絨毯の長い毛足が、歩く彼女たちの足音を吸収する。

三人は幾つもの扉を通り過ぎて行く。

途中、ミフィーシーリアはそれらの扉に彫刻された模様の中に、図案化された数字がある事に気づいた。

おそらく、その数字がそれぞれの側妃たちの暮らす部屋の番号なのだろう。

リーナはミフィーシーリアが入る部屋の事を「第六の間」と呼んでいた。

ミフィーシーリアはきっと自分が入る部屋には、「6」という数字が図案化されているのだろうと推測する。

やがてリーナが一つの扉の前で足を止めた。

同じように足を止めたミフィーシーリアたちに、リーナはにこりと微笑んで告げた。

「ようこそ、ミフィーシーリア・アマロー様。ここがこれからあなたが暮らす第六の間よ」

リーナが示す扉には、やはりミフィーシーリアの予測通り「6」という数字があつた。

これから暮らす「」の部屋に足を踏み入れたミフィーシーリア。と、彼女に続いて部屋に入ったメリアは、その部屋の広さに驚いた。
故郷であるアマロー男爵領にあるアマロー家の館。その館の居間

ほどの広さの部屋が、扉の向こうに存在した。

部屋の中にはテーブルや、ソファーや、暖炉といった一通りの家具。足元には廊下よりも複雑な模様が織り込まれた絨毯。そしてその部屋には手前に一つ、奥に一つ、全部で四つの扉が存在した。

その一つの扉の内、手前にある一つの扉を指差しながら、リーナが説明を加える。

「手前の右側の扉は侍女の……えつと、メリ亞だつたかしら？　あなたたち侍女の控えの間に続いていて、二人までならそこで寝起きできるようになっているわ。左側の向こうは洗面所とお手洗いよ」

そして、と前置きして更に説明は続く。

「奥の扉の右側は寝室ね。残る左側は浴室。一応この部屋に浴室はあるわけだけど、それ以外にも陛下と側妃専用の大浴場があるから、よければそちらを利用しても構わないわよ？　私は部屋の浴室よりも、大浴場の方が広くて気持ちいいからよくそちらを利用するけど。ああ、そうそう、メリ亞のお風呂は悪いけど使用者共同のものを使つてね」

「あ、はい、了解しました！」

そう言われたメリ亞は頷きながらも、とある事実に気づく。

先程から自分たちを案内してくれ、今も細かく説明してくれる目の前のリーナという名の女性。

メリ亞はこれまでの会話の内容からひょっとしてとは思っていたが、どうやらこの女性も側妃の一人だと思つて間違いないと確信した。

その事実に驚くも、何とか顔に出さないように努めるメリ亞。

しかし、新しく入った側妃の案内人に、先輩の側妃が務めるという話は聞いた事がない。

普通なら新しく現われた敵ともいいくべき存在に、このように懇切丁寧に案内をしてくれるものだろうか。

表面的には大人しく、だが内面では大いに訝しみながら話を聞くメリア。そんなメリアの心境をよそに、リーナの説明は続いた。

「後、今日のこれから予定だけど、富殿医師の診察を受けて貰います」

「富殿医師の診察……ですか？」

「お嬢様は別に病気も怪我もありませんけど？」

リーナに対する疑惑が残るメリアの台詞には、若干の刺のようないいものが含まれた。

その事に気づかないリーナではないが、敢えてそれを無視してメリアの質問に答える。

「一応、これは全ての側妃の義務みたいなものだから我慢して貰えるかしら？　それに自分でも気づかない病気って以外にあるのよ？」「なるほど。もしも、私に自分でも気づかない病氣があつて、その病氣が他の側妃様や陛下に移りでもしたら大変だ、という事ですね？」

「ふふ、理解が早くて助かるわ。要はそういう事よ」

リーナが付け加えた説明によると、側妃たちは定期的に富殿医師の診察を受けているという。

この定期的な診察は、側妃たちの健康を維持するのももちろんだが、その主な目的は懷妊の発見である。

側妃たちの第一の役目は、次の王となるべき者を産む事であるのは言うまでもない。それ故に側妃の懷妊の早期発見のため、定期的な診察が行われているのだといつ。

もつとも、今のところ懷妊の兆しを見せている側妃はいないそう

なのだが。

「大まかな説明はこんなところかしら。後、あなたの正式なお披露目は後日行われるわ。それまでに色々と準備があるからちょっと忙しくなるわよ。いつお披露目が行われるのかは、正式な日取りが決まり次第伝えるわね。それから……」

リーナの視線がちらりとメリアを捉える。

「実家から連れて来た侍女は彼女だけみたいだけど……もし、もつと人手が必要なら言ってね。私の方から手配するから。それから専属の護衛とかも必要かしら？」

「いいえ。侍女はメリアがいれば十分です。護衛も必要ありません」

ミフィイシーリアの答えに、リーナの表情が若干曇る。

「メリアだけではいけませんか？」

リーナの感情の変化を敏感に感じ取ったミフィイシーリアは、彼女には珍しく険のある口調で問い合わせる。

「いいえ、別に彼女だけでも構わないけど……まあ、いいわ。後からでも必要だと感じたらそう言つてね」

そしてリーナはどうぞじゅっくり、と告げるとその場で一礼。ミフィイシーリアたち主従もそれに返礼する。

ミフィイシーリアが視線を戻した時、リーナはすでに身を翻して出入り口の扉へと向かっている。

だが、その彼女の足がふと止まり、再びミフィイシーリアたちへと向き直った。

「私とした事が、大切な事を伝え忘れていたわ」

リーナはぺろりと小さく舌を出すと、改めてミフィーシーリアたちの元へと戻つて来た。

「大切な事ですか?」

「ええ。あなたは側妃として後宮に入った。そして側妃の証でもある鍵を浮け取つた。でも、諸侯へのお披露目が済むまでは、あなたはまだ正式な側妃としては認められていない」

ミフィーシーリアの諸侯へのお披露目とは、いわば彼女と国王の披露宴である。それが済むまでは、この国のしきたりで側妃としては認められない。

その事を承知してこのミフィーシーリアは、リーナの話に黙つて首を縦に振る。

「それでもきっと、あいつはあなたに色々とちよつかいをかけてくると思うの。だから

「

リーナがあいつと呼ぶのが誰なのか、今更聞くまでもない。

正式な側妃となる前でも国王はきっとこの部屋を訪れる。だから失礼のないように接する。つまりは、国王に身体を求められればそれに応じる、とリーナは言いたいのだろう。

もちろん、ミフィーシーリアとて側妃として後宮入りした以上、国王に身体を求められれば、それに応じる覚悟はある。後宮入りするという事は、それが主な目的なのは否めないのも事実である。

だからミフィーシーリアは、今度もリーナの言葉に黙つて頷く。予想もしない言葉だつた。

「 適当に流しなさい。あいつの言つ事をいちいち真剣に聞いては絶対にだめ。拒否したければ拒否してもいいわ」

「え……？ それどころか……のですか？」

あまりの言いようにぽかんとするミフィーシーリア。彼女の後ろではメリ亞も似たような顔で驚いている。

そしてリーナはまたも深々と溜め息を吐く。彼女が国王について語る際、よくやさしくして溜め息を吐く事にミフィーシーリアは気づいていた。

それは彼女が普段から、国王の所業に余程手を焼いているという証なのだろう。

「全然構わないわ。あいつは『面白い』が何より優先する奴よ。だから何か面白そうな事を思いつけば、それを必ず実行しようと。そしてそれを実行するだけの行動力が無駄にあるものだから、余計に厄介なの」

そう言い残すと、今度こそリーナは第六の間を後にした。

リーナが去った後、ミフィーシーリアとメリ亞は持つて来た荷物の整理と第六の間の掃除に取りかかった。

掃除の方は前もって行われていたようで、軽く掃除する程度で済んだ。

荷物の整理も、元々持つて来た荷物が少ないため、一いちらも短時間で終わってしまう。

そしてやる事を全てやり終えたミフィーシーリアは、この部屋に備えつけられてお茶の葉を使用し、メリ亞に入れて貰つたお茶を飲み、ほうとう溜め息を吐く。

何だかんだで、やはりミフィーシーリアも疲れたのだ。

「疲れましたか、お嬢様？」

「ええ。流石に疲れたわ。今日は色々あつたもの……」

国王との驚きの謁見に始まり、自分と同じ側妃であるリーナによる王宮と後宮の案内。

そしてその途中に遭遇したアルジエーナという貴族令嬢とのちょっとした諍い。

だが、これで今日が終わつたわけではない。リーナが先程も言つていたように、宮殿医師の診察がある筈なのだ。

宮殿医師の診察つて何をするのかしら、とミフィーシーリアが考えていると、扉をノックする音が響く。

メイリアがミフィーシーリアに向うように視線を向け、それに応えてミフィーシーリアが頷く。

それを確認したメイリアが扉まで移動して、外にいる者に何者かと誰何の声をかけた。

そしてそれに応える年若い男性の声。

「ミフィーシーリア様の診察に窺つた宮殿医師です」

宮殿医師と聞いてもつと年を取つた人物を想像していたメイリアは、思いの外年若い声に軽く驚きつつ扉を開く。

そして開けられた扉の前には、ミフィーシーリアと同年代と思しき少年が大きな黒い鞄を抱えて立つていた。

ノックをし、中から入出の許可を得ると、リーナは扉を開いて入室する。

扉の奥は大きな部屋。その部屋の中央に十人は余裕で座れる大き

な長方形のテーブル。

そしてそのテーブルには数人の女性が座っていた。リーナはその顔ぶれを確認し、空いていた席の一つに腰を慣れえた様子で腰を下ろす。

「どうでしたか？ ミフィイシーリアさんの様子は」

テーブルの上座のすぐ右に座っている 上座は空席 、二十代後半に見える明るい茶髪の女性が腰を下ろしたリーナに尋ねた。

「さすがにあいつとの初対面は戸惑っていましたよ。まあ、謁見と言われて赴いたのに、あんな悪戯をしかけられたんですから、当然といえば当然ですね」

リーナの答えに、その場に居合わせた数人の女性がクスクスと笑う。

「相変わらずですわねえ、シークさんも」

豪奢な金髪の女性が実に慈愛に満ちた顔で、そうじやなければシークさんじゃありませんが、と続けた。

「ねえ、ママー。こつになつたらミフィイに会いに行つてもいいの？」
「今日は我慢しなさいコトリ。ミフィイシーリア嬢もきっと疲れているだろ？から。もう少しして、彼女の疲れが取れた頃に会いに行くといこう」

「あ、そうか。ミフイも遠くから王都まで来て疲れているもんね。うん、判つたよママ」

「コトリは自分の隣に座り、ママと呼んだ黒髪の女性に嬉しそうに

甘える。

そんな二人のやり取りを、この場の全員は微笑ましげに見守っていた。

「それで、ミフィーシーリアさんは今日の食事はどうぞおられるといちばん食べに来るのですか？」

「いえ、先程部屋に案内した際に聞きまししたら、部屋で食べたいとの事でした。ですから……」

「ええ、承知しました。準備しておきます」

リーナの返答に、先程の上座の右に座っていた女性が丁寧やかに答える。

「それでは、彼女を歓迎する意味も含めて、腕を揮つて美味しいもの準備するとしましょう」

この時、その女性が自分の正面に座っている、自分と良く似た髪色の女性が何やらそわそわしている事に気づいた。

「どうしたの？ 何かあった？」

「え、う、ううん、な、何でもないよ！」

慌てて手と首をぶんぶんと振るその女性。

「そう？ それならいいのだけど」

そう返答した女性ににっこりと笑いつつ、先程からどこか落ち着きのない女性は、誰にも聞こえない声でぼつりと呟いた。

「……ねえ、シイくん……ボク、本当にそんな酷い事しなくちゃい

けないの……？

04・第六の間にて（後書き）

『辺境令嬢』 更新。

ようやく主要人物が出揃いました。とはいっても、今回ちらりとしか出ていない人も三人ほどいますが。まあ、名前だけは前からちらちら出てましたけど。

あ、まだ宰相閣下と將軍閣下は名前が出ただけで実際には出てないや。

それでは今後もよろしくお付き合い願います。

若い。いくら何でも若過ぎないか？
それが扉の向こうに立っていた人物を見たメリ亞の第一印象だった。

「宮殿医師のジークント・カーリオンと申します」

田の前に立つメリ亞に対し、そのまま紹介した少年はぺこりと頭を下す。

「宮殿の医師様……ですか？ 失礼ですが随分とお若いですね？」

私、警戒します、という態度を隠そうともしないメリ亞は、單刀直入に宮殿医師と名乗った少年に尋ねる。

確かにその少年の見た目はミフィイシーリアと同じくらいの年齢である。宮殿医師という重職に就くには些か若過ぎる。
そんなメリ亞に対し、少年は困ったような顔をしながらも切り出した。

「不審に思われるかもしませんが、僕は確かに宮殿医師です。まあ、正確には見習いですけど。それと、本日宮殿医師がこちらに伺うという話は姉から聞いていると思いますが……」

「お姉さん……？」

「はい。宰相補兼侍従長兼第四側妃のリーナ・カーリオンは僕の姉です」

「ああ、リーナ様の弟さんですか……って、ええっ！？ あの人、

側妃なのに宰相補とか侍従長とかまでやつてんですかあつー? リーナが側妃の一人だろうという予測はしていたが、役職に就いている事までは予想もしていなかつたメリアは大いに驚く。

そして同時に、いくら驚いたとはいえ側妃の一人に対しても無礼な口の利き方をしてしまつた事にも気づく。それも当人の弟と名乗る少年の目の前で。

「も、もももも申し訳ありませんでしたっ!! 側妃様に對して無礼な口を」

「いえ、お気になさらず。姉はじつといられない質として。きっと根っからの貧乏性なんでしょうね。ところで、中に入つてもよろしいですか?」

メリアがミフィーシーリアに入室の許可を取り、ジークントと名乗つた富殿医師の少年を部屋に招き入れた。

ジークントは黒い鞄を持つたままソファに座るミフィーシーリアの前まで来ると、そこで再び低頭する。

「改めまして、ミフィーシーリア・アマロー様ですね? 僕はジークント・カーリオン。富殿医師の見習いです。本日はミフィーシーリア様のお身体の様子を診察させていただくために参上致しました」「こちらこそよろしくお願ひします。ジークント様は今、『自分が富殿医師の見習いと仰しゃられましたが……』

「ええ。実は本日こちらへは、僕の師匠に当たる富殿医師のシバシイ先生が来る予定だったのです。ですが、先生が急に持病のぎり腰を起こしてしまいました。それで急遽、僕がこちらに伺つよつに仰せつかりました。先生に比べたらまだ未熟者ですが、何とぞよろしくお願ひ致します」

なるほど、どうりで若いわけだ。とメリアも納得した。

そして改めて見れば、ジークントとリーナの容貌は確かに似通つた部分があつた。

そうしてメリアがジークントを観察している間に、彼は鞄から様々な器具を取り出して診察の準備をしている。

「では、診察を始めさせていただきます。診察のためミフィーシーリア様のお身体に触れさせていただきますが、ご了承願います。それから、少し立ち入った質問もさせていただくと思います。それも診察に必要な事ですから、正直にお答えください」

「ええ、承知しました」

「それでは、失礼致します」

そう答えるとジークントはまず、ミフィーシーリアの脈を確かめるために彼女の細く白い腕を手に取つた。

騎士たちが使う馬を繋いでおく厩舎。その厩舎の近くを、一人の小柄な少女がうろうろとしていた。

時に厩舎の周囲の草むらにしゃがみ込んで顔を突っ込み、ぶつぶつと咳きながら再び立ち上がると、また厩舎の周囲をうろうろと歩き回り、別の草むらを「ごそ」と搔き分ける。

少女の身なりは動き易さを重視した、不必要的装飾を省いた簡素なもの。しかし、その服に使われている生地は、そこらの町娘が着るようなものとは明らかに違う上質なものであつた。

十五、六歳と思しき小柄な少女。明るい茶色の髪を長く伸ばし、大きな一つの黒瞳はどこか不安げに揺れていた。

そんな少女を、厩舎に馬の様子を見に来た二人の下級兵士が偶然見とがめた。

明らかに行動不審な少女に、誰何の声をかけたのは兵士としては当然の行為だろう。

「おい、そこのお母え！ こんなところで何をしてこるー？」「お前やあああつー！」

八九〇

突然背後から声をかけられ、驚いた少女は素つ頓狂な声を上げて文字通り飛び上がる。

びょーんと飛び上がった少女は、着地すると同時に振り返る事もなく脱兎の如く走り出す。

「いや待て！ いきなり逃げるとは怪しい奴め！」

当然、彼女を見とがめた兵士たちも、ひょっとすると不審者かも知れないと思い、その少女の後を追つて走り出した。

たがそこは小柄な少女と鎧えられた兵士。兵士たちは先行する少女にあつという間に追いつき、その肩を捕まえて立ち止まらせた。

少女は立ち止まり、兵士たちに振り返ると、そのまま何度もペコペコと頭を下げる。

そんな少女に、兵士たちは更に不信感を募らせた。

「何を言つ。隠しておきながら、どうして逃げ出したんだ？」

「えええええつ！？」
「そ、た、取り敢えず
兵士の詰め所まで来て置おーか」
ぼ、ボク、連行されちゃうのつ！？」

少女は下がっていた頭を上げ、涙を浮かべたうるうるとした大きな

瞳で兵士たちを見上げる。

そんな少女を見て、嗜虐心を刺激された兵士の一人が、下卑た笑

いを浮かべる。

「さうとも。詰め所へ連行して詳しく述べ話を聞かせて貰おうか。万が一、下手に隠しだてするようなら……へへへ」

兵士の視線が少女の身体を舐めるように見回す。この少女が小柄で幼い容姿ながらも実にメリハリの効いたボディラインをしているのが、兵士たちは着衣の上からでも容易に想像できた。

少女の肢体を想像しながら下品な笑みを隠そうともしない兵士たちは、相変わらず涙ぐんだ少女の腕を引っ張りながら詰め所へと足を向ける。

だが厩舎まで戻ってきた時、厩舎に繋がれた馬を出そうとした一人の騎士と出くわした。当然騎士は兵士に連れられた少女に興味を示す。

「おい、おまえたち。その少女は何者だ?」

「あ、はい、この女は先程この辺りでうろうろしていた不審者です。これから詰め所まで連れて行って、詳しい話を聞こうかと思いまして」

自分たちよりも身分が高い騎士に質問され、兵士たちは姿勢を正して答えた。

「ふむ、不審者だと……?」

騎士の視線が少女へと向けられる。そして次の瞬間、騎士の顔から表情というものが抜け落ちた。

騎士の態度に兵士たちは不思議そうに互いに顔を見合させる。だが彼らもまた、騎士が呴いた言葉を聞いた途端、この騎士と同じような態度となる。

「あ……アーシ亞様……」

兵士たちもその名前には聞き覚えがあった。いや、この王宮に勤める者で、その名前を知らない者はいないと言つていいだろ。兵士たちの顔色が見る見る青ざめる。

アーシ亞・ミナセル。

国王の従兄妹にして第一側妃。そして最も正妃に近いと言われる女性。

『癒し姫』とも呼ばれる彼女を、聖女の如く扱う者はこの王宮には数多い。田の前の騎士もまた、そんな者の一人であった。騎士は兵士たちがいまだにアーシ亞の手を掴んだままなのに気づくと、無言で彼らの頬に拳を叩き込んだ。

「つかやつ……」

突然の騎士の行為に悲鳴を上げるアーシ亞。地面で頬を押さえてのたうつ兵士たちを一切無視して、騎士はその場に跪いて低頭した。

「申し訳ありません、アーシ亞様！　この者たちが大変失礼な真似を致しました！」

「あつ……つか……？」

足元で悶える兵士たちと平身低頭する騎士に、アーシ亞はきよろきよろするばかり。そんなアーシ亞を置いてきぼりに、騎士は更に言葉を続けた。

「この者たちは厳罰に処します。覚悟はいいな、おまえたちー！」

騎士は厳しい視線でいまだに立ち上がれない兵士たちを睨みつける。

「ちょ、ちょと待ってっ……」

厳罰といつ言葉に、アーシアは慌てて倒れている兵士たちに駆け寄つた。

「びっくりして思わず逃げちゃったボクが悪いんだ。この人たちは悪くないんだよ。許してあげてくれないかな?」

「はあ……アーシア様がそう仰しやるのなら……」

騎士の許しを得てアーシアは安堵の溜め息を吐くと、倒れたまま自分を見上げている兵士たちの傍らにしゃがみ込んだ。

「『』めんね。ボクのせいで痛い思いをさせて……すぐに癒すからねなお」

アーシアは兵士の赤く腫れ上がった頬に片手を翳す。その手に金色の淡い輝きが宿り、輝きは兵士の腫れた頬に染み込むように消えていく。

「い、痛みが……」

嘘のように消えた痛みに、呆然と咳く兵士にアーシアは優しく微笑みかけ、もう一人の兵士にも同じように『癒し』を施した。

そして『癒し』を施された二人の兵士は、慌てて立ち上ると直立不動でアーシアに敬礼を捧げた。

「あ、ありがとうございましたっ……この恩は一生忘れませんっ！」

「我が命は今日この時より、アーシア様に捧げますっ……」

アーシアに癒された一人の兵士の口には、先程のよくな下卑たものは微塵も見られない。

二人の彼女に対する先程の行為は、下手をすると斬首にも相当しかねない重罪だ。

それを他ならぬアーシア本人によって救われた二人の瞳には、アーシアに対する信奉のようなものが明らかに現われている。どうやらまたここに彼女の信者が誕生したようだつた。

「ところでアーシア様。このよくなところで、共の者も連れずに何をなさつておいでなのですか？」

騎士の質問に、アーシアはあからさまに眼を泳がせた。

「あ、うん、その、えっと……ね？　ちょっと探し物をしていたんだけど……」

「探し物……でござりますか？　一体何をお探しに？　我らでようしければお手伝いいたしますが？」

騎士の言葉に、背後に立つ二人の兵士もしきりに頷く。

「あのね……ボ、ボクが探しているのは……」

アーシアが告げた『探し物』に、騎士と兵士たちはぽかんとした顔になつた。

「あ、あの、アーシア様？　失礼ですが、それを探して一体どうなさるので？」

「う、うん、その……あ、あのね、シ……じゃない、へ、陛下に探

すよつに言われたんだよ

「国王陛下に……でござりますか？」

あからさまに不思議そうな顔の騎士。一人の兵士も顔にこそ出さないものの、きっと騎士と同じ気持ちだろうとアーシアは思う。自分だって『あれ』を探していると聞かされれば、きっと彼らと同じような顔をするだろうから。

それでも騎士は、彼女の手伝いを承知してくれた。尤も、実際には背後に控えていた兵士たちに探すように命じただけだったが。そしてしばらくすると、一人の兵士はアーシアの『探し物』を見つけ出してきた。

彼らはそれをアーシアが持参した箱に入れる。その間、アーシアは顔を背けて『探し物』を極力見ないようにしていた。

兵士に『探し物』の入った箱を指出されるアーシア。だが彼女は顔を顰めておつかなびっくり手を出してはひつ込めを繰り返す。

「あ、あのー、よろしければ、このまま我々でお運び致しますが…」

「ほ、本当っ！？　あ、ありがとうつー…！」

いい加減焦れた兵士が告げた言葉に、アーシアは花のような笑顔で応えた。

その笑顔に思わず見蕩れた兵士たち。だがすぐに我に返ると、アーシアに『探し物』をどこまで運べばいいのか尋ねた。

「うん、悪いけど後宮第六の間……第五側妃のミフィーシーリアさんとのじるまで運んで欲しいんだ」

05・癒し姫（後書き）

『辺境令嬢』 更新。

今回は以前からちよくちよく名前の出ていた『癒し姫』が本格登場。

しばらくは主要人物の登場と紹介を含めた話が続くので、ヒロイ
ンの影が薄くて仕様がない。主要人物が本格的に出揃うまでも、もう
しばらくこんな調子になるかと。

今後も気長にお付き合いいただきますよう、お願ひいたします。

「宰相閣下と宰相補殿がお見えです」

国王の執務室の外で警備に当たっていた近衛兵が来客を告げた。それを聞いたリーナは、部屋の主に相談する事もなく勝手に扉を空ける許可を出す。

近衛兵が開けた扉を潜り入室して来たのは、この国の宰相であるガーヴィルド・クラークス侯爵と、彼の補佐役であるケイル・クーゼルガン伯爵であった。

カノルドス王国宰相・ガーヴィルド・クラークス侯爵。

『解放戦争』以前は辺境伯でしかなったが、ヨイシークと共に『解放戦争』を勝ち抜き、今では御三家の一角としてこの國の中核を担う人物である。

四十も半ばを越した中年男性だが、その上背のあるがつしりとした身体つきと厳つい容貌は、どう見ても文官ではなく武官に見える。事実、彼はヨイシークたちと一緒に戦場を駆け抜けってきた武人であるのだ。

だが、同時に政治家としても卓越した手腕を持ち、現在はこの国の政治を取り仕切っている。

本人曰く、文官よりも武官としてありたいのだが、他に人材がないので仕方なく宰相をやつているとの事。

だが現在、彼の下にはケイルやリーナという優れた人材が育ちつつあり、数年もすると彼らに政治を任せて軍の方に移るのではないか、という噂もある。

そして彼らが入室した時、この部屋の主にして国王であるヨイシク・アーザミルド・カノルドス1世は、執務用の机の前で完璧にだれていた。

「……もう嫌だ……仕事したくない……王様なんてなるんじゃなかつたあ……」

死んだ魚のような瞳でぶちぶちと文句を言いつつも、それでも手だけは動いているのは感心するべきか、呆れるべきか。

コイシークは今、ミフィーシーリアのお披露目に招く招待客への案内状に、彼の直筆のサインを入れていた。

招待状といつてもその数は膨大で、王都に住む貴族のみならず、自領にいる貴族や隣国にまでその招待状は届けられる。

そしてサインが入れられた招待状は王家の紋章の透かしを入れた封筒に入れられ、リーナがその封筒を丁寧に封蝋していく。

リーナは封蝋の傍ら、宥めたりすかしたりあの手この手を駆使して、招待状のあまりの多さに完全にだれたコイシークに何とかサインを入れさせていた。

こんな芸当ができるのは王宮でもリーナのみと言われており、これができるからこそ彼女はコイシークの側役として認められ、一度は奴隸に落とされたものの、今では側妃の一人としてまで登り詰めたのだ。

「相変わらず苦労しどるな、リーナ……」

「……いつもの事です。ガーブルド様」

コイシークの執務机の横に置かれた机で彼の仕事の補佐をしていたリーナは、ガーブルドから呆れと憐れみの混じり合った視線を向けられて、いつものように溜め息を零した。

「おおう、ガーブルドのおっさんじゃないか。なあ、おっさん。王様代わってくれ。今日からはおっさんが王様でいいだろ?」

「馬鹿者。儂に王が務まるようなら、最初から貴様を担ぎ上げたり

はせんわ

「じゃあ、ケイルでいいや。おまえ、今日から王様な
「断わる。今の仕事でも大変だというのに、それ以上に大変な国王
なんてやっていられるか」

もしここでガーヴィルドなりケイルなりが首を縊に振ろうものなら、
ユイシークは本気で王位を譲るだろう。それが判つてゐるからこそ、
一人は決して首を縊には振らない。

そんなユイシークたちの遣り取りを聞きながら、リーナは思わず
苦笑する。

世の貴族の中には、何とかして権力を得ようとしている連中が数
多くいるといふのに、今この場では権力の最高峰ともいふべき国王
の座をお互いになすりつけようとしている。

もし、そんな連中がこの遣り取りを目にしたら、一体どう思つだ
らうか。

一度本当にこの場を権力を欲しがる貴族連中に見せてやろうかし
ら、と考えながら、リーナはガーヴィルドたちの来訪の目的を尋ねた。
「うむ。貴様が新しい側妃を迎えたといつ話を聞き付けた貴族ども
が、早速売り込みをかけてきおつたわ」

ガーヴィルドがちらりと傍らのケイルを見やると、ケイルは手にし
ていた書類をユイシーク……ではなく、リーナに手渡した。ユイシ
ークに直接渡すと、他の書類に紛れて紛失しかねない、といつ長年
の付き合いから来る行為だ。

それを承知しているリーナは、何も言わずに置かれた書類を手に
取り、ぱらぱらとその中に眼を通す。

「新たに側妃となる事を希望している令嬢たちの一覧……ですか」
「やれやれ……どこもかしこも馬鹿ばっかりか。一人側妃を増やし

たからといって、続けて三人も四人も増やすとしても思つていいのか
?」

「思つておるのだろうな。連中も何とか貴様に取り入らうと必死なの
のだろうよ」

「確かに馬鹿ばかりだな」

男性陣三人がそんな遣り取りをしている間、一覧に目を通していく
たリーナはある事に気づいた。

「……何か見覚えのある名前が幾つか一覧に載つていますけど……
これって本気なのでしょうか?」

目録から目を上げたリーナが、不審そうな顔でガーラードを見上げた。

「無論、本気なのであるわよ
「信じられないわね……」

二人の会話に興味を引かれたヨイシーケは、リーナから一覧を受け取り目を通していった。

「何だこりや? 以前に後宮から追い出された奴の名前が幾つもあるぞ?」

「ね? 正氣を疑うでしょう?」

目録には十数人の貴族令嬢の名前が連ねてあつたが、その中にかつて側妃として後宮に上がり、国王の寵愛を一度も受けたことなく追い出された者の名前が幾つか載っていた。

「貴様が無名の辺境貴族の娘を後宮入りさせた事で、連中は貴様が

今の側妃殿たちに飽きでもしたと考えたのだろうよ

「だからって、一度追い出された奴を、また後宮入りさせようとするか？」

「先程貴様も言つただろ？ 連中は間違いなく馬鹿なのだろうぞ」「こんな権力を得ることしか頭にないような奴の娘を後宮入りさせる必要はない。これは国王としての命令だ」

国王の命令。ユイシークがそう認めた途端、それまではとても一国の王に対する態度とは思えなかつたガーラードたちが、一斉に背筋を伸ばして低頭し「御意」と返答する。

私人から公人へ。彼らの意識は一瞬で切り替わる。この切り替えができるないようでは、ユイシークの側近は務まらない。

「して、陛下。一つお聞きしてもよろしいか？」

公人として、国王を補佐する宰相としての立場で、ガーラードはユイシークに質問する。

「何故陛下は今回、アマロー男爵の娘を後宮入りさせる決意をなされたか？」

ガーラードのこの問いに、ユイシークは執務机の椅子に座り直し、腕を組みながら眼を閉じた。

そして、しばらくの間そうしていたユイシークが再び眼を開いた時、この国の将来を左右しかねない発言が飛び出した。

「俺はアマロー男爵の娘を……ミフィーシーリア・アマローを正妃に迎えようと考えている」

ジークントの診察が終わり、彼が退室したとひひでミフィーシーリアはふうと疲れを吐き出すように大きく息をした。

診察を受けながら、ミフィーシーリアは改めてジークントを観察した。

確かに彼はリーナとは姉弟のようで、面影やちよつとした仕草などが良く似ていた。

特に髪の色はリーナそっくりの亞麻色。年齢はリーナより二つ下でミフィーシーリアよりは一つ年下の15歳だとか。

幼さが残るもの、その面差しは姉同様整つており、後数年もすればきっと周りの女性から注目されるようになるだろう。

彼自身見習いと言っていたように、まだまだ診察にも慣れていないうで、真っ赤になりながらミフィーシーリアの身体に触れていた。特に女性の月のものの周期について聞いた時など、見ているのが氣の毒になるほど赤くなつていた。

ミフィーシーリアとて子を成すのに月のものが密接に関連してくるのは知っていたので、彼女もまた真っ赤になりながら正直に答えた。端から見ていたメリアなど、一人のどこか初々しい姿に思わず笑みを浮かべた程だ。

そしてジークントが診察を終えたのは、既に空が茜に染まり始める頃合いだった。

「お嬢様、夕飯はどうしますか？ そろそろ取りに行つて来ましょ
うか？」

リーナにこの第六の間まで案内された時、彼女に夕飯はどうするか尋ねられた。

彼女が言つには、この部屋で食べてもいいし、食堂へ出向いてもいいらしい。

さすがに初日といつ事もあり、ミフィーシーリアはこの部屋で食事をする方を選んだ。

これからどれだけこの部屋で暮らす事になるのかは不明だが、当分はこの部屋で暮らすのは間違いない。早くこの部屋に馴染むためにも、初日である今日はこの部屋で食事がしたかったのだ。

ミフィーシーリアがリーナにそう告げると、彼女は微笑んでそれを了承してくれた。但し、食事そのものはメリ亞が厨房からここまで運ばなければならぬと付け加えて。

それゆえのメリ亞の問いに、ミフィーシーリアは少しだけ考えを巡らせる。

「そうね……食事はもう少し後でもいいわ。取り敢えずお茶が飲みたい気分ね」

これに応じたメリ亞がお茶の準備をしようとした時、誰かが部屋の扉を叩き来客がある事を知らせた。

「本気が、シーグ？」

驚いた顔のケイルがそう尋ねるまで、どれだけの時間がかかったんだろうか。

それ程、先程ユイシーグが口にした言葉は衝撃的だつた。

「あの娘のどこにそんなに惹かれたの？」

震える声でリーナが尋ねる。

彼女も側妃の一人である以上、それは仕方のない事だろう。

彼女とユイシーグの隣に立つ事を夢見ぬわけではない。もちろん、それは正妃として権力を得たいとかではなく、一人の女として愛する男の隣に立ちたいという願望からだ。

だが、その一方で自分が正妃になるのは極めて難しい事も理解し

ていた。

只でさえ平民出身の彼女である。更には奴隸にまで落ちた経験もある。例えそれがユイシーク本人に落とされたとしても、隣国に対する対外的な面などを考えてまず有り得ないだろ。

それでもやはり、ユイシーク本人から他の者を正妃に迎えると言われた衝撃は隠しきれなかつた。

そしてそれを理解しているユイシークは、普段からは考えられないような優しげな笑みを浮かべてリーナを見た。

「別にあいつに惹かれたわけでも、惚れたわけでもないさ。確かに興味はあるがな」

「ならば、なぜあの娘なのだ？ こう言つてはなんだが、アマロー家は貴様の後ろ楯とするには明らかに役不足だぞ？」

正妃に求められるもの。その一つに王権の盤石化が上げられる。力のある家柄の娘を正妃に迎えれば、その家が後ろ楯となり自身の王としての立場を固める事ができる。

それ故、正妃には家柄が求められるのだ。

だがアマロー家は下級貴族であり、とてもではないが後ろ楯とは成り得ない。

だからユイシークがミフィーシーリアを選ぶ以上、家柄ではなくミフィーシーリア個人を気に入つたからとガーヴィルトちは考えたのだ。しかし、ユイシークはミフィーシーリア個人を気に入つたわけではないと言つ。ガーヴィルトが疑問に思うのも当然と言えるだろ。

「あいつ……ミフィーシーリアやアマロー家は権力向上の願望が低い。それがミフィーシーリアを正妃に迎える最大の理由だ。おまえたちだって、どうして以前のカノルドス王国が腐り果てたか忘れたわけじやあるまい？」

この言葉で、ガーランドはコイシーケの考へてゐる事を正確に理解した。

『解放戦争』以前のこの国があそこまで腐り果てたのは、王権の弱まりと貴族の権力の増大だとガーランドは考えていた。

国を中心たる王の力が弱まつたことで、周囲の貴族たちは歯止めが効かなくなつた。

本来絶対者であるべき王の言葉を聞こうともせず、自分たちの都合のいい事ばかりを行つた。それは自領だけではなく、この王都においてもだ。

そのため貴族たちの横行は増大し、国の屋台骨までをも弱らせてしまつた。

その一の舞を踏まないため、コイシーケは敢えて力の弱い家柄から正妃を迎へようとしているのだ。

力のある家柄から正妃を迎えるという事は、王家の力を強めると同時に、正妃を送り出した家の力を強めるという事でもあるのだから。

今のカノルドス王国で最も力の強い家柄は言わざと知れた御三家である。そしてその三家からは、一人ずつ令嬢が側妃として後宮に入つてゐる。

「まあ、そういうわけだから、おっさんトロやカーライト家、それにアミィさんトロから正妃を迎えるつもりはないんだ」

「ならば、リーナを正妃に迎えればいいだろ？ 何もアマローの令嬢を正妃に迎える必要もあるまい」

ケイルの言葉にコイシーケは苦笑を浮かべる。

確かにリーナを養女として迎え入れたカーリオン伯爵家は、ミナセル公爵家の外戚に当たるもの、さほど権力の強い家柄ではない。というより、その程度の家柄だったからこそ、一度は奴隸に落とされたリーナを快く養女として迎え入れてくれたのだが。

「おまえだつてそれが難しい事は承知しているだろうに。俺個人としてならリィを正妃として迎えても一向に構わないんだが」

ちらり、とコイシークはリーナを流し見る。途端、リーナの普段は白い美貌が真っ赤に染まる。

「ちえ、こんな事ならリィを奴隸になんか落とすんじゃなかつたぜ」

そうしたらこんなに悩まなくて済んだのに、とコイシークはリーナを見やり、リーナはあまりの恥ずかしさに更に真っ赤に染まつて顔を背けた。

「ならば、アマローの娘を正妃として迎える方向で今後は動くか?」「できればそうしたいところだが……問題はあの人があの人がどう動くか……だな」

ガーラードの言葉にそう答えたコイシーク。同時にこの場にいる者たちの脳裏に一人の人物が浮び上がる。

彼らが『後宮管理人』と呼んでいる、後宮の実質的な支配者であるその人物を。

06・コイシーグの思惑（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

ここにやつて来てくださる皆様のお陰をもちまして、この『辺境令嬢』の総合PVが70,000を超え、総合コニークも12,000を超えました。

このサイト全体から見れば、まだまだ低い数値ではありますが、自分のような底辺を流離う物書きにとつて、この数値は喜び以外のなものでもありません。

他にもお気に入り登録や、評価ポイントの投下、お気に入りユーチャ登録など、様々な形の支援をいただいております。中には貴重な感想を寄せていただいた方もいらっしゃいます。

様々な支援を頂いた方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

今後も同様に見守つていただけると幸いです。

よろしくお願いします。

開かれた扉の向こうには一人の少女。そして、その少女の背後には兵士らしき一人の男性が控えていた。

来訪の際に告げられた名前を信じるならば、共の者が兵士二人とは少々少ないと思わないでもないが、側妃の一人であるリーナなどは一人も共の者を連れていなかつたのだから、この後宮では側妃といえどもあまり共の者を連れて歩いたりはしないのかもしれない。

後宮に入つて一日も経つていなメリアは、そんな事を考えながらその少女一行を部屋に招き入れた。

部屋の主であるミフィーシーリアも、様々な噂を持つ少女との急な対面に、戸惑いを覚えながらも笑みを浮かべて挨拶を交わす。

「初めてお申通り致します、アーシア様。本日この後宮に入りましたミフィーシーリア・アマローです。本来なら新参者である私の方からご挨拶に伺わねばならないところ、わざわざお越し下さり申し訳ありません」

「う、ううん、こ、こちらこそ…ボク、アーシア・ミセナルです。は、初めましてっ！」

低頭しながら口上を述べるミフィーシーリアに、少女もまた慌ててペニリと頭を下げた。

ミフィーシーリアは目の前に佇む『癒し姫』アーシア・ミナセルを、無礼にならないように注意しながら見てみる。

国王であるコイシーケと同じ年と聞いているから、目の前の少女は自分よりも一歳年上の十八歳のはず。だが、小柄で童顔な少女の外見は、良くて自分と同じ年か、下手すると自分よりも幼く見える。

だが、飾り気は少ないが上質そうな衣服に包まれた肢体は、自分などよりも余程成熟した大人のそれだった。

美しい明るい茶色の髪を腰ほどまで伸ばし、大きな黒瞳は宝石のように輝いている。

白い、というよりはやや色素の濃い肌は、この少女の健康そうな魅力を一層引き立てていた。

そして桜色の可憐な唇からは、どこかたどたどしい言葉が漏れ響く。

「えつ……と、そ、その……ミフィィシーリア……さん……じゃないや、ミフィィシーリア様……？」

ふりふりと視線の定まらないアーシア。彼女の瞳はミフィィシーリアと背後に控えた兵士が持つている小さな箱との間を行き来する。

「あ、あのね、ぼ、ボク、ミフィィシーリア様に贈り物を持つて来たんだ……けど……」

意を決したように告げたアーシアが背後の兵士を見る。それに会わせて箱を持った兵士が数歩前に出て、持っていた箱をメリアに手渡した。

「わざわざありがとうございますアーシア様。開けてみてもよろしいですか？」

「え……っ……あ、ああああ、開けちゃうのっ……い、いいい、いいよっ……ぞ、じつぞ……っ……」

そう言つたアーシアは、くるりとミフィィシーリアたちに向けると、ぎゅっと両手で耳を押さえ、その場にしゃがみ込む。アーシアの態度に思わず顔を見合わせるミフィィシーリアとメリア。

アーシアに付き従つて来た一人の兵士も互いに顔を見合させて苦笑している。

開ける事に嫌な予感しかしないミフィーシーリアとメリア。それでも開けると言つた以上、開けないわけにはいかず、メリアは一息呼吸すると意を決して箱の蓋を開けた。

途端、箱の中から緑色の何かがぴょんと飛び出し、ひとつとメリアの顔に張り付いた。

「つかやあああああああああああああつつつーーー！」

堪らず悲鳴を上げ、メリアは慌てて顔を手で払う。その調子にメリヤの顔に張り付いたものは、彼女の顔を足場に更にぴょーんと飛び跳ねてぽんと着地した。

「へ？」
「あ！」
「え？」

アーシアの頭の上に。

「いや、いやみやあああああああああああああああああつーーー！」

アーシアの頭の上に降り立つたそれ 緑色の15センチ以上はある巨大なバッタ は、足元から急に発せられた奇声に驚き、更に跳躍する。

「みやああああああつーーーば、ボク、虫大つ嫌いなんだよおおおおおおつーーーだ、誰か早く捕まえてええええええええええつーーー！」

結局、その大騒ぎを納めたのはミフィーシーリアだった。

メリ亞に加えて二人の兵士も右往左往しながらバッタを捕まえようとするも、巨大バッタは持ち前の跳躍力を活かして第六の間の中を逃げ回った。

やがてバッタも疲れたのか、窓のカーテンにしがみついたところをミフィーシーリアが捕獲し、そのままバッタを窓の外に逃がしてやつた。

バッタがいなくなつてようやく落ち着いた一行。そんな中、アーシアがミフィーシーリアを見る目が明かに変わっていた。

まるで偉大な人物を見るかのような、尊敬の念が籠もつた眼差しに。

「す……凄いね、ミフィーシーリアさん！　あんな大きなバッタを手で捕まえて、そのままぱつと外に捨てちゃうなんて！」

「ええ、私、弟がいるものですから。小さな時はよく、弟と一緒に原っぱで虫取りをしてましたもので」

アーシアがミフィーシーリアを見る眼に、更にきらきらとした輝きが宿る。

「ところで、アーシア様。一つ伺つてもよろしいでしょうか？」

「あ、ボクの事はアーシィって呼んでよ！　仲のいい人たちはみんなそう呼ぶんだ。だからミフィーシーリアさんにもそう呼んで欲しいな」

「い、いいえ、とんでもない！　私ごときがアーシア様をそのように呼ぶなど……」

「えー、ボクは全然気にしないのに……」

不満そうに口を尖らせたアーシアと、そんなアーシアの態度に苦

笑するしかないフィーシーリア。

メリ亞と二人の兵士が散らかつた第六の間を何とか片づけ、アーシアとミフィーシーリアは改めてソファに腰を下ろす。

「それで、ボクに聞きたい事つてなに？」

「その……ですね？　どうして虫が苦手なのに、わざわざ捕まえてまで私のところに？」

その質問をされた瞬間、それまで笑顔だったアーシアの顔色がさつと青ざめた。

先ほどのバッタを思い出したのか、それともミフィーシーリアに対する罪悪感がそうさせるのか。

あーとか、うーとか唸り、きょろきょろと周囲に視線を泳がせつつも、覚悟を決めたのかぽつりぽつりとアーシアは語る。

「あ、あのね……実は……シイくんに言われたんだよ……」

「シイくん……？」

「あ、シイくんっていいうのはユイシークくんの事でね……」

「つまり、これは国王陛下がらみの悪戯だつたわけですね……」

疲れたように呟くミフィーシーリアをよそに、アーシアの『懺悔』は続く。

「……シイくんがボクに言つたんだよ。後宮に後から入つてくる人に、先輩は意地悪しなきやいけないって……それが後宮の決まり事だからって……。それでね、ボク、どんな意地悪したらいいのか判らなくつて、シイくんに聞いてみたんだ。そしたら、シイくんが『自分がやられたら嫌な事をしてみる』って……だから……」

「……それで『自分が嫌いな虫を私のところに持つて来たというわけですか……』

「うん……」「めんね、ミフィーシーリアさん……」

大きな瞳にうつすらと涙を浮かべ、下から見上げるよつて謝るアーシアに、ミフィーシーリアは顔を上げるように告げる。

「気にしないでください、アーシア様。幸い……といつと語弊がありますが、この手の悪戯には私、実は慣れっこなんですよ~。」「え？」

「先程、弟がいると申しましたでしょ？　その弟からじつじつ悪戯はよくされましたから」

朝、目覚めると枕元に大量の団子虫が蠢いていたり、服の仲に黄金虫を入れられたり。やんちゃな弟は、よく自分にそんな悪戯をしでかしたものだった。

その時は悲鳴を上げて泣きながら走り回ったりしたが、今となつては懐かしい思い出に昇華されていた。

「ですから気にしないでくださいね？」

「うん！　ありがとう！」

「それにリーナ様も仰つてましたよ？　陛下の言つ事はいちいち眞面目に聞く必要はない。適当に聞き流せと」

「うん、ボクもよくリイに言われるよ。でも、シイくんが言つことだと、ついつい信じちゃうんだ」

アーシアは、真っ赤に染まつた顔を伏せながら告げた。

そう告げた時のアーシアの顔は、ミフィーシーリアから見てもとても幸せそうなもので、アーシアがコイシーケに対してどうこう気持ちを抱えているのかがとてもよく伝わってきた。

リーナにアーシア。それにまだ見ぬ一人の側妃たちも、きっと心

の底からコイシーケに想いを寄せているのだろう。

そして、彼女たちにそんな想いを抱かせるコイシーケ。彼とはまだ真面な会話も交わしていないが、それでもコイシーケに対する興味が、ミフィーシーリアの中でどんどんと大きくなっている事に彼女は気づいていた。

その後、しばらくとりとめのない会話を交わして、アーシアは二人の兵士を従えて第六の間を後にした。

その際、次はボクの第二の間に遊びに来てね、と言い置いて。そして現在、メリアは後宮の慣れない廊下を歩いているところだつた。

アーシアが去った時、外はすっかり暗くなっていた。そこでメリアは慌ててミフィーシーリアの夕食を厨房まで取りに行くために第六の間を飛び出したのだ。

メリアは慣れない後宮の廊下を、途中何度も道に迷うしながら歩く。

後宮初日の中のメリアが無事にここまで来れたのは、ひとえに親切な侍女や使用人たちのおかげであった。

中には自分が今日後宮入りしたミフィーシーリアの侍女であると知ると、あからさまに顔を顰める侍女たちもいたが、殆どの者がメリアに親切に接してくれた。

新参者はもつと冷たく扱われると思っていたメリアは、アーシアやリーナといった人当たりの良い側妃たちといい、親切な使用人たちといい、ちょっと拍子抜けした思いだった

「 それでも、まだ第一仮想敵の側妃様に出会っていないものね。油断大敵、気を抜いたらダメよ！」

メリアが目下第一の仮想敵として秘かに認定しているのは、第一

側妃であるサリナ・ク萊ークス。

かつてこの後宮にいた多くの側妃を追い出したというサリナ。 実際にはどんな人物かは不明だが、その逸話から考るにミフィーシーリアに親しく接してくるとはちょっとと考えづらい。

だからメリアは自分に言い聞かせる。 弱みを見せて相手につけ込む隙を与えないように、と。

そうやって内心で気合いを入れている間に、メリアは厨房に辿り着く。

扉をノックして来訪の目的を告げると、中から若い女性の声で入室の許可が与えられた。

（今の声……ずいぶん若い女の人の声みたいだつたけど……厨房で働く料理人かしら？）

そう考へながら改めてドアを開けると、目の前に若い女性が待っていた。

長く艶やかな明るい茶色の紙を、背中で大きべ二三つ編みにしたその女性。 身につけているものは厨房で働く他の者と一緒に仕事着だ。そして涼しげな暗青ダークブルーの瞳がにこやかな笑みに揺れていた。

「え、えっと、ミフィーシーリア様付きの侍女でメリアといいます。ミフィーシーリア様のお夕食を取り伺いました」

「ええ、お話を聞いていますよ。準備してありますから、どうぞお持ちください」

その女性が背後に目配せすると、厨房で働く料理人の一人が料理を載せたワゴンを押してきた。

ワゴンに積まれているものを確認した女性は、改めてメリアに向き直り、ぺこりと頭を下げる。

「申し後れました。私はここに管理をしておりますアミリシアと申します。これからもよろしくお願ひしますね」

「あ、管理つてことは料理長さんつて事ですか？　ずいぶんお若いのに料理長を勤めるなんて、アミリシアさんは優秀な料理人なんですね」

「いえ、優秀だなんてとんでもない。私はただ好きでやっているだけですよ」

「こいつと微笑む女性。その女性の年齢は二十代後半程に見える。どう多めに見ても、三十の半ばを越える」とはないとメリアには思えた。

あの若さで後宮の料理長なんて、きっとものすごい料理人なんだろつなか、と思いつつメリアは食事を載せたワゴンを押して厨房を後にする。

そして、第六の間へと帰る途中、ふと彼女はある事に思い至った。

「……わざわざの料理長さん……どこかで会つたような気がするなあ……。どじだつけ？」

メリアが厨房から持つてきた夕食を食べたミフイシーリアは、やの料理のあまりの美味さにとても驚いた。

それはメリアも同様で、アミリシアがあの若さで料理長を勤めているのが納得できる美味さだった。

「こんな美味しい料理、食べたことないわ……」

「本当……美味しいですねえ。これだけでも、はるばる王都まで来たかいがあつたつてものですね」

「もハ、メリアったら」

実家では自らも時々料理をしていたミフィーシーリアは、とてもではないが自分ではこれだけ美味しい料理を作る自信がない。

メリ亞もあまりの美味しさにひたすら料理を食べている。

本来、側妃と侍女が同じテーブルで食事をする事はない。だが、これまで姉妹同様に育ってきたミフィーシーリアは、メリ亞と一緒にテーブルで食事することに何の抵抗もなかつた。

そして、まるでそれを見越したかのように、食事の積まれたワゴンにはミフィーシーリアの分だけではなく、メリ亞の分まで用意されていたのだ。

そして食事が済むと、メリ亞は使った食器などをワゴンに載せ、再び厨房へ向かう。

残念な事にアミリシアは不在だつたが、厨房のいた料理人にとっても美味しい夕食だつたと彼女への伝言を頼み、先程食事を載せたワゴンに今度は湯の入つた桶を幾つも載せて、メリ亞は来た道を再び戻る。

もちろん、湯は入浴の際に使用するものだ。

第六の間には浴室があつたが、それは石張りの部屋にバスタブが置かれただけのもので、昨夜客室で見たようなきちんとした湯船のあるものではなかつた。

昼にリーナが側妃専用の大浴場があると言つてていたので、きちんとした浴室はそちらなのだろう。

だが、今日は後宮入り初日といつこともあつて、ミフィーシーリアは自室での入浴を望んだ。

そのために、厨房で沸かしてもらつた湯をこうしてメリ亞が運んでいるといふのだった。

メリ亞が持ち帰つた湯をバスタブに張り、さっそくミフィーシーリアは入浴する。

本来、貴族の令嬢なら入浴中も侍女に様々な世話をやいてもらひうのだろうが、実家では一人で入浴していいたミフィーシーリアである。メリ亞の手を借りることなく入浴を慣れた様子で済ませる。

ミフィーシーリアが入浴している間に、メリアも使用人用の浴場へ出向いて入浴を済ませた。

そして、長かった後宮初日が終わる。いや、ミフィーシーリアは終わったと思い込んでいた。

だが、彼女の後宮初日はまだ終わらなかつたのである。

ベッドに入った途端、ミフィーシーリアは眠りに誘われた。やはり後宮初日とあって、色々と疲れがあったのだろう。そして、後宮初日という事で油断もしていた。

夜中、何やらすしりと身体に重みがかかつた事で、ミフィーシーリアはぼんやりと目覚めた。

しかし、ぼんやりとした意識はすぐにはつきりと覚醒する。

なぜなら、寝ている自分の上に黒ずくめの人物がのしかかり、首筋に氷の様に冷たい短剣の刃を突きつけていたのだから。

07・バッタと料理長（後書き）

『辺境令嬢』 更新。

最近、なんとなく不調だけど、なんとかがんばってみた。ジャンルが「恋愛」としてあるのに、恋愛の「れ」の字も出でない気がしなくもないけど、気長にお付き合いねがえれば、いざれは恋愛的な要素も出てくると思います。ええ、きっと。

そんなわけで、これからもよろしくお願いします。

「これは……」

「余計は事は喋るな。無駄に苦しみたくないだろ？」「

震える瞳で首筋に当たられた刃を見詰めるミフィイシーリアに、覆面の男 声で男だと判明した は、冷たい声で告げた。
ミフィイシーリアの視線が、首筋の刃から男の瞳へと移動する。
そしてミフィイシーリアは、男の瞳に愉快そうな笑みが浮かんでい
るのを見る。

だが、その事にミフィイシーリアは違和感を感じざるを得なかつた。

「何が目的ですか？」

「喋るなと言つたはずだが？」

男はミフィイシーリアの眼を見詰めたまま、いきなり彼女の胸の片
方を掴みあげた。

「きや つ……」

「ふむ……思ったより大きいな。もっと小さいかと思つていたんだ
が」

男が零した咳きに、ミフィイシーリアは頬を赤く染める。

ひょっとして、この男の目的は自分の純潔では
ミフィイシーリアの脳裏をそんな考えが過る。

確かにここで純潔を失えば、彼女は側妃の資格を失うだろ？
ミフィイシーリアが後宮入りするのを面白く思わない人物が、それが目

的で目の前の男を送り込んで来たと考えれば納得がいく。

だが、それにしては男の目に浮かぶ光がミフィーシーリアには気になつた。

男の目に浮かぶのは確かに笑み。だが、その笑みは男が女を狙う好色な光ではなく、子供が悪戯をする時のような

そう考えた時、ミフィーシーリアの頭の中を一條の光が走り抜けた。

「 そろそろ悪戯はお終いに致しませんか？ 隆下」

途端、それまでミフィーシーリアの胸をやわやわと揉みあげていた男の手がぴたりと止まつた。

それまで男の瞳に浮かんでいた笑みに代わり、新たに浮かび上がるのは明かに狼狽のそれ。

「 やはり陛下でいらしたのですね？」

「ち、違う！ 違うぞ！ 僕はこの国の王のような究極のナイスガイではない！ 僕は単なる通りすがりの暗殺者だ！」

「それで？ こんな時間に何用でしちゃうか？ へいか？」

男の戯言を彼にスルーし、強調した口調で問い合わせるミフィーシーリアに、男は観念したかのようににはあと息を吐いた。

「おまえ、思ったより図太いな。もっと取り乱すと思つたんだが…」

…

男 ユイシークは、観念したのか顔を覆う覆面を外した。

露になつた彼の素顔には、再び悪戯小僧のような笑みが浮かんでいた。

「もちろん驚きました。目が覚めればいきなり首筋に刃物があるの

ですから

「その割には随分冷静のようだつたが？」

「あのような場合、下手に取り乱すのは愚作ですから」と、言いたいところですが、実は怖くて動けなかつただけです

「そうか。だつたら俺の勝ちだな」

「勝ちとか負けとか何に対してですか？」

どこまでも掴み所のないユイシークに、ミフィィシーリアは苦笑するしかない。

ユイシークは手にしていた短剣と覆面を纏めてベッド脇のテーブルに置くと、ベッドで身体を起こしてミフィィシーリアの隣に無遠慮に腰を下ろした。

「それで、どうして俺だと判つた？」

「眼……ですね」

「眼？」

「はい。陛下の眼に浮かんでいた光が、まるで私に悪戯を仕掛ける時の弟の眼にそっくりでしたから。それにリーナ様が仰つていましたし」

「リイが？」

「はい。陛下は永遠の悪戯小僧だと。そして何かしら仕掛けてくるだろうから相手にせずに適当に流せ、と」

「くそ、リイの奴。今度ベッドの中で思いつ切りいじめてやる」

そっぽを向いて呟くユイシークに、ミフィィシーリアは堪えきれず

に小さな笑い声を上げた。

「お、よつやく笑つたな」

「あ……し、失礼しました」

「構わんさ。やつぱり女は澄ましているより笑っていた方が可愛い

しな

何気ないコイシーケーの一言に、ミフィーシーリアの心臓はなぜかどきりと一度だけ激しく鼓動した。

「それよりも、本当に暗殺者が来たとは思わなかつたのか？ 暗殺者とまではいかなくとも、誰かがおまえを汚そうとしたとは考えなかつたのか？」

それまでの悪戯小僧のような眼ではなく、コイシーケーは真摯な眼でミフィーシーリアを見る。

「もちろん、考えました。ですが、それにしても違和感がありましたので」「ほ

ほつ、と呟き、無言で続きを促すコイシーケー。

「仮に部屋に侵入したのが本当に暗殺者だとしたら。わざわざ私が目覚めるまで待たず、そのまま私を殺した方が楽な筈。それに私を汚すのが目的ならば、私の身体を縛るなりなんなり、抵抗しないよう自由を奪うのではないですか？ ですが、そのような事は一切されませんでした」

「だから違和感を感じた、と。ふむ、おまえ中々頭の回転が早いな」「い、いえ、それ程の事では……先程も申し上げた通り、怖くて動けなかつただけですから……」

俯いて照れた笑みを浮かべるミフィーシーリアを、コイシーケーは面白そうに見詰める。

しばらぐ無言で見詰めていたコイシーケーが、ミフィーシーリアの顎の下に指を伸ばし、彼女の顔をくいっと自分の方へ向けさせる。

「おまえは中々面白い奴だな。どうだ？ 正妃に 王妃にならな
いか？」

「は……い……？」

始めは何を言われていたのか判らなかつたミフイシーリア。だが、
その言葉の意味するところが理解できてくると、赤かつた顔が一瞬
で青に染まつた。

「む、無理ですっ！ わ、私」ときが正妃など勤まる筈がありま
せんっ！！」

「いや、おまえは聰い。下手をするといつりと同じぐらいに頭が切れ
る。俺の私見だが、十分に正妃の器だと思うがな。もう一度言おう。
正妃になれ！」

「お、お断りしますっ！－！」

間髪入れずには否定するミフイシーリア。そんな彼女を見るユイシ
ークの眼が、ますます面白そうに歪められる。

「本当におまえは面白いな。普通、側妃として後宮に入った女が正
妃になるのを否定するか？ それも即断で。それじゃあ、おまえは
何が目的で後宮に入つたんだ？」

「そ、それは……」

ミフイシーリアが後宮に入つたのは、実家であるアマロー男爵家
に援助金が入ると聞いたからだ。

今年不作だつたアマロー男爵領の領民は、このままでは冬を越せ
ない者たちが大勢出るだろう。そんな彼らを救うために、ミフイシ
ーリアはアルマン子爵との婚姻に同意した。

だがアルマン子爵の悪事が露呈し、アルマン子爵に輿入れする話

がなくなり、代わりに降つて湧いたのが後宮入りの話だ。

そしてミフィーシーリアが後宮入りすれば、王国からアマロー一家に援助金が入るという約束になっている。

だが、果たして正直にその事を国王であるコイシークに告げてもいいものだろうか。

そうやって逡巡しているミフィーシーリアを見て、コイシーケは言い辛い理由でもかるのかと一瞬首を傾げるが、ケイルやコトリから聞いたアルマン子爵にまつわる一件とアマロー家の現状を思い出した。

「……どうか。おまえは領民のために後宮に入つたんだな？」

「は、はい……も、申し訳ありません」

「なぜ、謝る？」

「あ、あの……陛下の寵を賜りたくて後宮入りしたのではなく、領民のためにとお知りになられて不快に思われたのでは……？」

「ふん、口先だけで寵を求める馬鹿な女よりも、いつそ清々しくて気持ちいいくらいだ」

と、ユイシーケは自分の膝を叩いて笑つた。そしてかつて後宮にいた彼の言つ馬鹿な女たちを思い出したのか、眉を寄せて不快そうな表情になる。

「はつきり言って、俺は貴族の礼儀とか教養とかとは無関係に育つた。生まれこそ伯爵家だつたが貧乏でな。贅沢とかとは無縁だつたよ」

「そうなのですか？」

「おまえ、俺の経歴も知らずに後宮に来たのか？」「も、申し訳ありません！ ふ、不勉強な身で……」

本当に面白い奴だな、とユイシーケはその大きな掌をぽんとミフ

イシーリアの頭に載せた。

そしてそのまましばらく、彼女の柔らかな髪の感触を楽しむ。

「まあ、貧乏だからこそ、領民たちとは上手く行っていたよ。おそれくおまえの家のようにな。俺も子供のころは平民の子供たちと混じって遊び回っていたものや」

自分の髪をゆっくりと撫でぐるコイシーキの手。その手の感触がミフィシーリアには恥ずかしくもどこか心地よく感じられる。

「ま、その後は馬鹿な貴族連中の権力争いに俺の家も巻き込まれて、結局我が家はお取り潰し。両親は首を斬られたけど、まだ幼かった俺は特別な計らいとやらで命だけは許された。家も財産も家族も勝手に奪つておいて、何が特別な計らいだつてんだ」

顔を向けることなく吐き捨てるコイシーキの言葉を、ミフィシーリアはただ黙つて聞くしかなかつた。

「で、その後はお袋の妹さんの嫁ぎ先だったミナセル公爵家　当時は男爵だったけどな　に引き取られて、そこで新しい家族に出会つた。ま、それ以外にもジェイクやケイルといったおまけとも出会つたがな」

改めてミフィシーリアへと顔を向けたコイシーキは、おどけたように固めを瞑つてみせた。

「ミナセル家も自由な家風でな。貴族なのに市井に混じつて一緒に生活していた。どちらかっていうと貴族というより、ちょっと金持ちの庶民って感じの家だつたんだ。だから俺には貴族の教養とかは無縁つてわけだ」

「 なんとなくですけど、想像できます」

田の前の一国の王とは思えないような自由奔放な青年。そして今日出会った彼の従兄妹にあたる少女。

彼らの気風は貴族というより庶民のそれに近い。だからだろうか。今日の前にいる青年やその従兄妹の少女に親近感ともいうべきものを感じるのは。

きっと彼らの生活は、自分がアマロー一家での送った生活と似ている部分があるのだろう。

「 だと言つのにだな、部屋を『じて』こと家具や美術品で飾つたり、自分自身を高価な衣服や装飾品で着飾つたり、身綺麗な侍女を何人もこれみよがしに侍らせたり。そんな金と権力にしか目がない連中の口から愛していますだの、寵を受けられて光榮ですか言われてもちつとも嬉しく思えないね。どうせなら本人と侍女全員が素っ裸になつて俺を出迎えてみろつてんだ。その方が余程俺は嬉しく思うね」

「 それは言外に次に陛下がこの部屋におみえになる時は、私と侍女が裸で待つていると仰つてます？」

「 おう。やつてもらえるなら、是非お願ひしたいね。そうすればこの部屋に絶体に来たくなるつてもんだろ？」

「 ふふふ。ですが、お断り致します。リーナ様から陛下の言つことを真面目に聞き受けたなど言われていますので」

「 ちくしょう、リイの奴。ことごとく俺の野望の邪魔をしやがつて。仕返しに今度あいつを全裸にひん剥いて王城中を引き連れて回つてやる」

「 おやめになられた方が賢明かと。リーナ様はあれで陛下のお言葉には絶体に従うでしょう。本当に裸で王城の中を歩いてしまわれますよ?」

「 ちつ、仕方ない、おまえに免じて許してやるか。あいつの裸を見

「ていいのは俺だけだしな」

自然に互いの視線を絡ませる一人。そして同時に声に出して笑い合つ。

ひとしきり笑い合つと、コイシーグは自分の頭をぽてんとミフイシーリアの膝の上に落とした。

「きやつ」

「お、中々気持ちいいな。さっきの胸の感触といい、小柄で瘦せぎすかと思ったら結構着痩せする方が？」

「し、知りません！」

ミフイシーリアは真っ赤になつてふいと顔を背けた。

そんなミフイシーリアの態度が面白かったのか、コイシーグは彼女を見上げながら再び笑う。

「やつぱつおまえは面白い奴だ。いつして話をするのは初めてだと、いつに、何か以前から知り合つっていた気がするな」

コイシーグに言われてミフイシーリアも思い出した。

彼の言つ通り、こうしてまともに会話をするのはこれが初めてなのである。なんせ謁見の時があれだったのだから。

「なあ、改めて聞くぞ。正妃になれ」

「お断りします」

コイシーグの視線がミフイシーリアを見据える。その眼はなぜ正妃になるのを拒むのかと問い合わせていた。

「私が正妃なれば……おそらく実家も口では済ません。我が家は

辺境の小貴族でしかないのですから」「

「確かにおまえが正妃なれば、権力の亡者どもがアマローラ一家にも色々と手を伸ばそうとするだらうな」

そしてそれらの手を撥ね除けきるだけの力は、今のアマローラ一家にはないとミフイシーリアは考へてゐる。

「それにアーシア様やリーナ様といつた、本当に陛下を愛しておられる方々がいらっしゃいます。正妃にするなら、彼女たちの中から選ばれるのが本筋だと思いますが」

だが、コイシークはその言葉に顔を顰めるだけだった。

「こちらにも色々と事情があつてな。アーシイやサリィといった御三家の血筋の側妃を正妃にするわけにはいかないんだ」「でしたらリーナ様では?」

「あいつの元奴隸という部分が引っかかる」「つまり、残されたのは私だけ、という事ですか……」「まあ、そう言えばそなたが……怒つたか?」「いいえ……私にも事情があるように、陛下にも事情がおありなのでしょう? その程度で怒つたり致しません」

「うなうな……」、とコイシーカは呟き、そのまま眼を閉じた。

「陛下? お眠りになるのですか?」

ミフイシーリアの問いかけに、コイシーカは再び眼を開けた。だが、その顔には明かに不機嫌なものが浮かんでいる。

「陛下?」

「それ、やめや」

「は？」

「私的な時間で俺を陛下と呼ぶな。俺の事はシークと呼べ」

「は……はあ……」

「アーシィやリイ、ジョイクやケイルも公式な場以外では皆そう呼んでいるんだ。だからおまえもそう呼べ。そつしたら俺もおまえのことミツフィ……」

「私の愛称はミツフィです」

「お、おひ……そつか」

「おひぱつとおひじりをこめるミツフィーシーリアに、コイシークは僅かにたじろぎながら肯いた。

「今、陛下 し、シーク様が呼ぼうとした名前は、どこか危険な香りがします。どこが危険なのか自分でもよく判りませんが」「そりや奇遇だな。実は自分で言つておいてなんだが、俺もそう思つたんだ」

そして二人は、もう一度見詰め合ひとくすくすと静かに笑い合つた。

08・初めての会話（後書き）

本日はもう一本、『辺境令嬢』も更新します。

よつやく『フィシーリアとコイシークがまともな出会いをしました。』

ここまで本当に長かったです。

お待たせしてしまった方々（いるのか？）、本当に申し訳ありません。

これからは一人の絡みも増えてくると思います。そして『フィシリリア以外の側妃で、未登場の人たちも本格的に出てくるでしょう。』

今後もよろしくお願いします。

メリ亞の一日はミフィーシーリアを起^ひす事から始まる。何かにつけてしつかりして^るように見えるミフィーシーリアだが、朝だけは弱いのだ。

そんなミフィーシーリアを起^ひす事が、幼い頃からのメリ亞の日課になっていた。

だから今日も、彼女は朝一番にミフィーシーリアの寝室の扉を開ける。

ノックしたといひでミフィーシーリアが起きるとは思えない。また、自分より早くミフィーシーリアが起きている事などあり得ない。

長年の習慣から、メリ亞はいつも寝室の扉をノックすることなく開ける。しかし、今日ばかりはこの長年の習慣を恨みたく思つた。なぜなら、彼女の敬愛してやまないミフィーシーリアが、見知らぬ男性と同衾しているのを目の当たりにしてしまつたのだから。

「おはようございます、お嬢さま……ま？」

扉を開けたといひで、いつものように朝の挨拶。普段ならこの挨拶に返事は返つてこない。

だが、今日は違つた。かすかな声であつたが、返答があつたのだ。

「 むう……だ……れ、だ？ おま……え……」

まだまだ眠そうな声。しかし、その声は確かに男性のものだつた。果然とメリ亞が見詰める中、声の主と覺しき男性がベッドで上半身を起こした。

そして身を起こした男性の向^{むか}い、安らかな寝顔のミフィーシー

リア。

幸いというかなんというか、二人は裸ではなく着衣のまま寝ていたようで、メリアが一人のあられもない姿を目にする事はなかつた。

「えつ……と？ そういうあなたこそ……誰？」

男は大きな欠伸をしながらちらりとメリアへ視線を向けると、その顔に何やら面白田やうな玩具を見つけた子供のような笑みを浮かべた。

「俺か？ 俺は……まあ、一言で言つてしまつと……不法侵入者つて奴？」

確かに嘘は言つていない。彼はタベ、この部屋の主であるミフィーシーリアの許可を得ることなく部屋に侵入したのだから、不法侵入者と呼べなくもない。

だが、メリ亞は不法侵入者という言葉を聞くと同時に、寝室の扉のところで素早く身を翻し、自分の部屋として割り当てられた侍女の控え室に駆け込む。

そして次に彼女が寝室に姿を現した時、その手には小さいながらも剣呑そうなメイスが握られていた。

このメイスは王都へと出立する際、メリ亞の母のシリアが彼女にミフィーシーリアを守るために使えと渡したものだ。これなら剣や短剣と違い、特別な技量も必要なく振り回すだけで相手に大きなダメージを「えられるから、と。

そして、このメイスをふるつはまさに今、とばかりにメリ亞は母から託された獲物を振りかざす。

「この不埒者っ！… うちのお嬢様に何をしたつー？」

メリアは叫びながらメイスを両手で持つて振り上げ、いまだにベッドで上半身を起こした状態の男に殴りかかる。

だが、男はベッドに腰を下ろしたまま、片手でメリアのメイスを易々と受け止めた。

「おいおい、こんなもの振り回しちゃ危ないぞ？ 下手するとこいつがミフィイの頭に当たっちゃうだらう」

「黙れっ！！ 不法侵入者の分際でっ！！『気安くお嬢様を愛称で呼ぶなっ！！』

「でも、本人に呼んでいいって言われただぞ？」

「えっ！？」

メリアは間近に迫った男の顔をまじまじと見る。

明るい茶髪に黒い瞳。その面立ちは昨日この部屋を訪れて思わず大騒ぎをしたアーシア姫と似通った部分が多く見受けられる。

「ここに至り、メリアの脳裏に田の前の男の正体が閃いた。

「あ、あのー、もしかしてもしかすると……国王陛下であらせられたり……します？」

「おひ。あらせられたりするや」

してやつたりとばかりににやりと笑う男。いや、国王陛下。

メリアは手にしていたメイスを放り投げ、その場で平伏する。放り出されたメイスがベッド脇のテーブルに当たり嫌な音を立てたが、メリアはそれどころではなかつた。

「も、申し訳ありません！ へ、陛下とは知らず無礼な振る舞いを つ！」

「あー、気にすんな。わざと誤解されるような言い方をしたのは俺だしな。それより」

ユイシークはちらりと後ろを振り返る。

「これだけ騒いでもまだ起きないのか、」
「は、はあ……お嬢様は朝が弱いので……」

呆れた視線を一つ受けながら。
ミフィーシーリアは実に幸せそうに眠つていていた。

「本当に申し訳ござりませんでした！」

田覚めたミフィーシーリアはメリアから事の顛末を聞き、真っ青になつてユイシークに謝罪した。

メリアの仕出かした事は斬首ものの不敬罪にあたる。いくらメリアがユイシークの事を知らなかつたとはいえ、それは理由にならない。

そして使用人の罪は主の罪。だからミフィーシーリアは田覚めてすぐには彼に謝罪したのだ。

「だから気にしなくていいって。口うるさい貴族どもに知られたならともかく、ここには俺たちしかいなかつたわけだしな。そもそも、おまえの侍女をからかつた俺が悪いんだし」

そう言つてからからと笑い飛ばすユイシーク。だが、ミフィーシーリアの顔から申し訳なさそうな表情が消える事はなかつた。

それを見たユイシークは、若干眉を寄せるとテーブルの上の籠に盛られていたパンを一つ手にとり、そのままぱくりと齧り付いた。

「もういこつて言つてるだろ？ そんな顔されたままだと、朝メシ

が不味くなつちまつ。だからやめひ

コイシーグはミフィーシーリアの部屋である第六の間で、彼女たちと一緒に朝食を摂っていた。

ミフィーシーリアが目覚め、着替えなどの身支度を済ませた後、ユイシーグはなぜかここで一緒に朝食を摂ろうと言い出した。

もちろん、ミフィーシーリアにそれを拒む事ができるわけもなく、そのまま彼と一緒に朝食を摂る事になった。

第六の間のテーブルに差し向かいで座り、指でパンを小さく千切つては口に運ぶミフィーシーリア。

彼女の目の前では今、この国の最高権力者がパンやサラダ、スープなどを実に美味しそうに食べている。

その食べ方は作法といったものに捕らわれない自由なもの。それを見たミフィーシーリアは、彼がタベ自身が言つていた通り、貴族の作法や礼儀といったものとは無縁だという事を改めて実感した。

だが、そんな自由な食べ方が目の前の青年には実に似合つていた。そしてそんな青年とこうして差し向かいで食事をしている事に、彼女はくすぐつたいような妙な感覚を自覚していた。

ユイシーグを見詰めるミフィーシーリアの顔に、いつしか微笑みが浮かぶ。それを知つてか知らずか、ユイシーグは空になつた紅茶のカップを無言でメリヤに向かつて差し出す。

そして壁際で控えていたメリヤがそれに応じ、彼のカップを満たすために動き出す。いつもならミフィーシーリアと一緒にテーブルで食事をするメリヤだが、さすがに国王の前でそうする事はできなくて給仕に専念していた。

やがて食事を終えた二人は立ち上がる。ユイシーグは政務のために。そしてミフィーシーリアは政務に赴くユイシーグを見送るために。

「じゃあな。タベは変な訪問の仕方をして悪かつたな」

「本当にです。今度からは忍び込んだりせずに、堂々とこらしてください

わい」

「ああ、やつするよ」

そしてコイシーグが第六の間を後にし、残ったミフィーシーリアが部屋の奥へと振り向いた時、それはそこにいた。

瞳にきらきらとした輝きを浮かべ、口角をキュウと釣り上げて。それを見たミフィーシーリアは思わずどきりとし、次いで覚悟を決めた。

それはある意味、タベのコイシーグよりも手強い存在といえるのだから。

第六の間を後にしたコイシーグは、一旦自室へと戻るべく廊下を歩いていた。

今、彼が身に纏っているのは昨夜第六の間を訪れた時の暗殺者もどきの黒装束。いくらコイシーグでもこのまま政務を執るわけにはいかず、一度自室に戻つて着替えるつもりなのだ。

そして自室に到着し、扉を開けよつとした時。部屋の中にある気配に気づいた。

だが、コイシーグは何事もなかつたかのように扉を開く。なぜな

が。

「こんな時間にどこへ行つていたの？ それにその格好はなに？」

中から漂つた氣配は彼がよく知つているものだつたから。

コイシーグの部屋の中央で、リーナが黒装束の彼を面白がりに見詰めながら腕を組んで立つていた。

「さてはタベ、あの娘のところに行つたのね？」

「『』明察。よく判つたな、リイヒ

「そりゃあね。あなたの考へてゐる事が判らなくちや、『国王の外付良心』なんて呼ばれないでしょ？ それで、早速抱いたの？」
「いいや、タベはそのつもりじやなかつたからな。ちよつとからか
いに行つたのさ」

コイシーケはタベのあらましと、正妃になれと言つたが断られた事をリーナに告げた。

「本当にあの娘、正妃になるのを断つたの？」
「ああ。きれいにすっぱり、即断で断られた」
「信じられないわね」
「だろ？ 面白い奴だと思わないか？」

くくく、どどーか邪悪そうに笑つコイシーケを、リーナは呆れた
よつて見詰める。

きつとユイシークは、今後もしつこく彼女に正妃になれと迫り続けるつもりなのだろう。

は。だめだと言わると、余計にその事に傾注する性なのだ。この男

その事をよく知っているリーナは、ちょっとだけミフィイシーリアに同情した。

「アリニヤ、せこひだぞ」

「何を？」

「おまえ、あいつに色々な事を吹き込んだだろ?」

思わず数歩後ずさるリーナを、コイシーケはいつもの悪戯小僧の

よつな笑顔を浮かべて追い詰める。

「おまえにはお仕置きが必要そつだな」

と、コイシークはリーナを身体を軽く叩き倒す。

軽くとはいえ、人体の倒れやすい箇所を的確に押されたリーナは、そのまま背後に倒れ込む。

この部屋にある大きなベッドの上に。

彼の言つ「お仕置き」が何なのか悟つたリーナは、慌てて身を起しあうとするが、既にコイシークは彼女にのしかかっていた。

「ちよ、ちよっと、こんな朝っぱらからなにするつもり？」政務はどうするの？

「なに、少しぐらい政務が始まるのが遅くなつても困るのはケイルぐらいだ。だから問題なし！」

「も、問題あるわよ！」

必死に抗うリーナだったが、その抵抗は虚しくコイシークは彼女の衣服をはぎ取り始めた。

「では、タベは本当に何もなかつたのですか？」

コイシークとミフィーシーリアの間にタベ何があつたのか。

メリアは期待に胸を膨らませてミフィーシーリアを問い合わせた。

しかし、メリアが期待するよつな事は一切なかつたと知り、彼女の眼から先程のよつなきらきらした輝きは失せ、かわりに明かな失望が浮かんでいた。

「え、ええ。タベは一人で色々とお互いの事を話していく……その

ままいつの間にか眠ってしまったの」

「そうですか……残念だなあ。ようやくお嬢様が大人の階段を登つたと思ったのに……」

「お、大人の階段……」

「そうですよ。もしそうなら昨日の料理長さんにお願いして、今日は御馳走を作つてもらつところだったのになー」

「や、やめてメリア！ も、もしシーク様とそうなつたとしても、そんな事他の人には話さないでっ！！」

「あれー？ もう陛下の事、愛称で呼んでいるんですねえ？」

「だ、だつて……し、シーク様がそう呼べと……」

結局昨夜は一人の間に何もなかつたと知つても、メリアの追求はなかなか緩む事はなかつた。

今、ユイシークの執務室には重い沈黙が降りていた。

「なあ……やつぱりおまえ、馬鹿だろ？」

「ああ。馬鹿だな。間違いない」

ジョイクやケイルからそう言われても、何も言い返せないユイシークは不機嫌な顔で執務机の椅子に腰を下ろしていく。

「リーナの足腰立たなくさせてどうすんだよ？ もう少し後先考えたらどうだ？」

「リーナが使い物にならなくなつて、一番困るのはおまえだろ？ どうしてそれが判らない？」

ユイシークがリーナに施した『お仕置き』が少々激しすぎたらしく、現在リーナはベッドから起き上がりでいた。

「ヨイシークの執務の補佐をするリーナがそんな状態では、彼の執務に滞りが発生しかねない。」

その事をジェイクとケイルはヨイシークを窘めていたのだ。

「あー、それなんだけどな、俺の補佐はケイルが……」

「断わる。私には宰相閣下の補佐がある。おまえの手伝いまで手は

回らん」

「じゃー、ジェイク……」

「馬鹿言つな。俺にも近衛たちや一般兵に稽古つけにやならんのだ。そもそも、俺にデスクワークを求めるなつーの」

「ぐう……」

一人から執務の手伝いをすつぱりと断られ、ずるずると椅子の上で姿勢を崩すヨイシーク。

彼の裁可を必要とする書類が何枚も彼の執務机の上に積み上げられていて、量自体はほぼいつも通り。

だが、いつもならこの書類を事前にリーナが目を通し、急を要するものとそうでないものを振り分けるのだが、そのリーナがいないのでは、ヨイシーク自身が書類の分別から行わなければならなくななる。

これでは仕事量はいつもと一緒にでも、かかる時間は倍以上になる。無くして判るありがたさ。というわけでもないが、リーナの存在の重要性とその能力の高さを改めて認識するヨイシーク。

さて、どうしたものか、とヨイシークは天井を見上げながら考える。

そんな彼の頭の中で一つの記憶が甦り、ヨイシークは勢いよく立ち上がった。

何事かとジェイクとケイルが見詰める中、ヨイシークはにやりと笑う。

「いるぜ。リーナの穴を埋められそうな奴に心当たりがある

それを耳にしたジェイクとケイルは、互いに顔を見合させて首を傾げるばかりだった。

09・一夜明けて（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

今回は一夜明けた朝の、二人のほのぼのとしたものが書きたかったわけですが……果たして上手く書けたでしょうか。

後半は何というか、リーナの受難？

さて、次回の話ではまたちょいっと『魔獣使い』とクロスオーバーしようかと考えています。

では、今後もよろしくお願いします。

10・胸を切り刻む言葉と来訪者

それはいきなり第六の間の扉を開くと、そのままの勢いで室内に飛び込んで来た。

部屋の掃除をしていたメリアは、いきなり飛び込んで来たそれを見て驚きに目を見開く。

「ミフイーっ！ 遊びに来たわよおつーーー！」

「ハ、コトリ様っ！？」

いきなり室内に飛び込んできたもの コトリは、きょろきょろと室内を見回し、求めていた姿がない事によつやく気づいた。

「あれ？ ミフイは？ いないの？」

室内を彷徨つていたコトリの視線が、掃除用のモップを持ったまま硬直しているメリアの所で停止した。

「あ、あの、お嬢様なら陛下からの使いの方がみえて、一緒に行かれましたか？」

「え？ パパの使いが？」

何だろ？と首を傾げるコトリ。そしてメリアは、たつた今コトリの口から飛び出した爆弾発言に再び目を丸くする。

「、陛下をパパって呼ぶって事は、コトリ様つて一体何者っ！？」
コトリとコイシーケの関係を詳しく知らないメリアは、首を傾げたコトリを前にじばらく動く事もできなかつた。

「わ、私がシーク様の政務の補佐をですかっ！？」

コイシークの使いの者に連れられて彼の執務室まで連れてこられたミフィーシーリア。

そこにはコイシークだけではなくジェイクとケイルまで待つて、ケイルよりここに呼ばれた理由を聞かされた。それがコイシークの執務の補佐だったのだ。

「何も難しく考えなくても大丈夫ですミフィーシーリア様。例えば……」

ケイルはコイシークの執務机に載っていた書類の束から、適当なもの一枚抜き出して、その書類を確認してからミフィーシーリアに提示した。

「……奴隸解放の嘆願書……？」
「その通りです」

ミフィーシーリアがざっとその書類に目を通したところ、王都に住むある人物が自分の所有する二人の奴隸を解放したい旨を記した嘆願書だった。

「このような書類は危急性が低いものです。奴隸の解放など少々遅れても誰も困りません。困るとすれば解放される奴隸本人ぐらいですから」

「んー、だけどよ？　解放が遅れた事によって、その奴隸が虐待されたりしないか？」

途中から口を挟んだジェイクを、ケイルがじろりと睨みつける。

一方ミフィーシーリアはそんな彼らを無視して、しばらく考えた後

にその考えを口にした。

「その心配はないのではないでしょうか？」

「ほひ。なぜそう思う？」

そう尋ねたのは執務机の椅子に座り、面白そうにミフィーシーリアたちを眺めていたコイシーグだ。

「もし、奴隸を虐待するような者であれば、そもそも解放しようと嘆願書を出すとは思えません。わざわざ財産である奴隸を手放すという意思を表している以上、この者は奴隸を酷く扱うような者ではないと考えます」

彼女の考えを聞いたコイシーグは面白そうに口角を釣り上げ、ジエイクとケイルは感心したような光を眼に浮かべた。

「ミフィーシーリア様の『慧眼通りです。そのため、このよつな書類は後回しにしてもさほど問題にはなりません。逆に』」

ケイルは今度は書類を一枚選び取りミフィーシーリアに手渡す。

「こちらの書類は王都の東の街道に出没する盗賊の討伐依頼。もう一つはゼンガーの町の南に出没する魔獣の討伐依頼です」

手渡された書類に目を通し、ケイルの言つている事に間違いがない事をミフィーシーリアは確認した。

「これらの書類は危急性の高いものと判断されます。ただちに王であるシークの裁可を得て、騎士なり兵なりを派遣しなければなりません」

「つまり、個人の視点ではなく国としての視点で判断しろ、ということですか？」

「左様です」

冷静に返事をしながら、ケイルはミフィーシーリアの頭の回転の良さに内心で驚いていた。

コイシーキーから彼女は使い物になるとは聞かされたが、正直ケイルは半信半疑だった。リーナほどに様々な局面で有能な人物は貴族の間を探してもそうはないのだから。

だが、彼女なら少なくともコイシーキーの政務の補佐なら問題ないだろうとケイルは判断した。彼女ならリーナの代役を十分に務められるだろう。

「つまり、この書類の中からケイル様の仰る危急性の高いものを選び出し、順次シーク様に回せばよろしいのですね？」

「その通りです。お願ひできますか？」

「判りました。やつてみます」

肯いたミニフィーシーリアは普段リーナが使っている机の椅子に腰を下ろすと、山と積まれた書類を崩しにかかりだ。

「無理だな。両方は手が回らねえ」

「やっぱ、そうだよなあ」

「街道沿いの盗賊は虎の子の精銳を派遣すれば何とかなるが、魔獸岩魚竜いわきょりゅうは軍じや討伐は難しいぜ？ 数頼みで攻めても無駄に消耗するだけだ」

「となると、城下の魔獸狩りに依頼を回すか……あ、それより俺が直接出向くってのはどうだ？」

「アホ抜かせ。おまえがわざわざ出向かなくて、『轟く雷鳴』亭

のリンクーの親父に頼んだりどうよ？あの親父なら悪くは扱わねえだろ？特におまえが指名すればよ？」

「ちえ、仕様がねえな。まあ、あの親父には昔世話になつたし、報酬もちょっと色付けてやるか」

先程ケイルが提示した一枚の書類を眺めながら、コイシーケとジエイクが意見を交わすのをミフィーシーリアは手元の書類に目を通しながら何気なく聞いていた。

ケイルは自身の仕事のため、ミフィーシーリアに仕事の手順を説明した後、早々にこの執務室を後にしていく。

ジエイクが残っているのは、派遣できそうな軍についてコイシークから意見を求められたからだ。

ぼんやりと二人のやり取りを聞きながらも、ミフィーシーリアは必死に書類に目を通す。

言われた通りに書類を急を要するものとそうでないものに振り分ける。そして振り分けられた書類の内、急を要するものがある程度溜めると、それを今度はコイシーケの執務机へと運ぶ。

そして自分が使用している机に戻り、その上の書類の山を見たミフィーシーリアは少しうんざりした。

いくら書類を仕分けても、全然量が減ったようには見えないのだ。聞けばこの仕事をリーナは毎日行つているという。それだけで彼女の凄さが実感できるミフィーシーリアだった。

そしてこの時になつて、彼女はようやく一つの疑問を感じた。

「そういえばリーナ様はどうされたのですか？　本日は急に政務のお手伝いができなくなつたと聞かされましたが……」

ミフィーシーリアが聞かされたのは、いつもコイシーケの補佐をしているリーナがとある理由でそれができなくなり、その代役をお願いできないかというだけであった。当のリーナがどうしたのかまで

は聞いていなかつたのだ。

「ああ、リイなら」「

「げ！」この馬鹿！」「

ヨイシークの言葉を遮ろうとジェイクが慌てて割り込むがその努力も虚しく。ヨイシークは平然と今朝の事をミフィーシーリアに語つて聞かせた。語つてしまつた。

「あの後、着替えのために自室に戻つたんだが、そこにリイがいてな」

「リーナ様がシーク様の自室に？ リーナ様は無断でシーク様の部屋に立ち入つたのですか？」

「ん？ ああ、あいつは毎朝政務の前に俺を自室まで呼びに来るからな。いつもの事だし、部屋には自由に立ち入つていいとも言つてある」

「……そ、そうなのですか……」

どこか暗そうなミフィーシーリアの声を不審に思いつつも、ヨイシークは続ける。

「あいつに限らず、側妃は全員俺の部屋に自由に入る許可を貰つてある。あ、もちろんおまえも構わないからな？」「

「あ、ありがとうございます……」

「で、タベもちらつと言つただろ？ あいつにはおまえに色々と吹き込んだ罰を貰ふると。で、ちょっとお仕置きをしたんだが、……やはりすきちまつてな。起き上がれなくなつちまつたんだよ」

「え？」

ミフィーシーリアの顔が驚愕に引き攣る。それをちらりと見たジェ

イクがあちゃーと手で顔を覆いながら天井を仰ぐ。

だが、当のコイシーケは一人の様子に気づく事もなかつた。

「これもタベ言つたが、やつぱりおまえは頭が切れる。だからリイの代役に呼んだんだ。実際、今日のおまえを見てケイルの奴も認めたようだしな……つて、どうした、ミフイ？」

コイシーケは黙つて俯いてしまつているミフイシーリアに、この時になつてようやく気づいた。

ミフイシーリアの様子がおかしいと感じたコイシーケが彼女へと歩み寄る。だが、ミフイシーリアはそれを拒絶するかのように数歩後ずさると無言のまま執務室を飛び出した。

後に残されたのは果然としたコイシーケと、忌々しそうに顔を歪めるジェイク。そしてジェイクは歪めた顔のままコイシーケの背後からぽんと肩に手を置く。

振り返つたコイシーケの頬を、ジェイクの拳が打ち貫いた。

「ぐう　っ！」

倒れたコイシーケは殴られた頬を押さえながら、冷たく自分を見下ろす親友ともいふべき男を見上げる。

「何しやがるっ！？」

「前からおまえは馬鹿だ、馬鹿だと思つていたが……今日ほどおまえを馬鹿だと思つた事はねえぜ？」

ジヒイクはコイシーケの胸ぐらを掴むと、そのまま強引に彼を立ち上がらせる。

「あの嬢ちゃんに言わねえでもいい事を平氣でべらべらと喋くつちや

がつて。本当、馬鹿だよおまえは…」

「言わなくてもいい事だと？ 一体何の事だよつー？」

「まだ気づかねえのか？だからおまえは馬鹿だつづうんだ！ タベ、おまえはあの嬢ちゃんの部屋に泊まつただろう？」

「あ、ああ……。どうして判つた？」

「判らいでか。伊達にガキの頃からの付き合いじゃねえよ。もつとも、わしきのおまえたちの会話を聞いてりゃ誰だつた判るだらうがな」

間近で真っ直ぐに自分を射抜くジェイクの瞳。その瞳に浮かぶ怒りと苛立ちが、コイシーカに反論を躊躇わせた。

「で？ おまえは今朝、嬢ちゃんの部屋から自室に戻り、そこまでリーナに何をした？」

「あ……」

「…………」
至つ、ようやくコイシーカはジョイクの言いたいことを理解した。

「おまえがおまえの女たちに向しようが勝手だ。それに俺同様付き合いの長いアーシアやサリナたちはいいさ。子供の頃からの付き合いだ、おまえの事は色々と理解しているし、互いに割り切つてもいい。だが、あの嬢ちゃんはまだそこに至つてねえ。それなのにおまえは！ 嬢ちゃんと別れた後、すぐに他の女を抱いただと？ わつきも言つたがリーナはおまえの女だ。どう扱おうが好きにしゃがれ。だが、それをわざわざ自慢げにあの嬢ちゃんに言う必要があるのか？」

自分と別れた直後に他の女性を抱く。それを知つたその女性がどんな感情にとらわれるか。

少し考えれば容易に理解できる。もちろんそれはコイシーケにも。コイシーケはいまだに自分の胸ぐらを捕まえているジェイクの手を強引に振り払うと、服の乱れを直す事さえせずにそのまま執務室を飛び出した。

遠ざかつて行く足音を聞きながら、ジェイクは主人のいなくなつた執務机の椅子に無遠慮に腰を下ろして一人ごちる。

「つたく世話のやける親友だぜ。こんな事ならあの嬢ちゃんはやっぱり俺の嫁にしておけば良かつたかねえ……」

溜め息と共に誰に聞かせる事もなく吐き出された咳きは、高い天井に吸い込まれるように消えていく。

そしてジェイクは今自分が口にした内容に、今度は別の意味で深々と溜め息を吐く。

「…………やべえ…………ひょっとしてまじに惚れたか？　あの嬢ちゃんに？」

今度の咳きも、誰に聞かれる事もなく消え失せていった。

自室である第六の間に一人戻ったミフィィシーリア。彼女は突然戻つて驚いているメリヤをも無視して、寝室に駆け込むと扉を閉じて鍵をかけた。

一人ベッドに倒れ込むミフィィシーリア。自分でも気づかぬうちに、彼女を頬を涙が濡らしていた。

どれくらいそうしていたのか。気づけば寝室の扉を誰か　おそらくメリヤだろうが、遠慮がちにノックしていた。

「　どうしたの？」

涙を拭い、何とか震えない声で問いただす。
その問いに応えたのはやはりメリ亞だった。

「あ、あのお嬢様……お密様がおみえなのですが……」
「お密様……？」

もしかしてユイシークだらうか。だとしたら今は、今だけは会いたくない。

だが、扉の向こうから聞こえてきた名前は、ミフィーシーリアが予想もしていない人物のものだった。

「そ、それが……第一側妃のサリナ・クラークス様がおみえなのです……」
「サリナ様が……？」

第一側妃にしてこの国の宰相であるガーラード・クラークスの一人娘。

いくら今、自分の気持ちが落ち込んでいよつとも、無下に帰つて貰つていい相手ではないとミフィーシーリアは判断した。

「会います。ですが、しばらく準備の時間をいただいて貰えるかしら？」

寝室を出たミフィーシーリアは何度も顔を洗い、メリ亞に手伝つてもらつて軽く化粧を施す。
そして準備が整つたところで、改めてサリナを迎えるれる。

「お初にお目通り致します、ミフィーシーリア・アマロー様。わたくし、サリナ・カーライトと申します。以後、よしなに」

扉を開けた向こうで、彼女は数人の侍女を引き攣れて優雅に頭を垂れた。

「……」
「……」
「お嬢になさりやすに。わたくしの方こそいきなりのご訪問、申し訳ありませんわ」

悠然と微笑むサリナ。それに会わせて彼女の豪奢な金髪が揺れたりと揺れた。

ミフィイ・シーリアはサリナを部屋に招き入れ、互いに椅子へと腰を下ろす。

サリナの身長はミフィイ・シーリアよりも僅かに高い。
長く豊かな黄金の髪。サファイア蒼玉の如き双眸は優しげに流れ。ほつそりとした頬のラインはシャープな顎に繋がり、薔薇色の唇は花弁の如き。

身につけているものも黄色を基調にした手の込んだ豪華なドレス。その大きく開いたドレスの胸元からは豊かな谷間が覗いている。細い腰に豊かな腰廻り。その白魚のような手には一振りの高価そうな扇が握られている。

そして背後に無言で控える数名の侍女たち。
まるで絵に描いたような貴族の令嬢。それがサリナ・カークライドだった。

メリ亞はサリナの姿を見た時、彼女がいつか想像した通りに金髪の縦ロールだった事に内心でやつぱりと唸った程だった。

「それで本日はどのよつない用件で？」

「ここに」と微笑みを絶やさないサリナ、「ミハイシーリアは来訪の理由を問う。

「失礼ですが、单刀直入に伺いますわね？」

「ここに」。 「ここに」。 微笑んだままサリナは手にした扇を一度だけぱちりと打ち鳴らした。

「ミハイシーリア・アマロー様。 あなたは陛下を愛していますか？」

10・胸を切り刻む言葉と来訪者（後書き）

『辺境令嬢』更新。

前回に引き続き、最低野郎のコイシーケ。それに対しても何か無駄に格好良いジェイク。

このままジェイクにミフイシーリアをかいつたるわれなほどの勢い。もつとコイシーケの見せ場もつくれないといけないと思つ今日この頃。

近づいたようで実は全然近づいていないミフイシーリアとコイシーケですが、これからなんとか……うん、なんとか……なるかなあ……。

なんとかなるようにがんばります。今後ともよろしくお願いします。

「あなたは陛下を愛していますか？」

サリナのその問いに、ミフィイシーリアは「愛していない」とはっきりと答えようとした。

昨夜の突然の訪問から今朝の朝食までの時間。その時間はミフィイシーリアにとって決して不快なものではなかった。それどころか、今思えばとても楽しい時間だった。

そんな時間を交わした直後に、他の女性を抱くような不節操な男性など、愛していないとはっきりと答えようとしたのだ。

だが、実際は口がまるで凍りついたかのようにその言葉が出る事はなかつた。

ミフィイシーリアはサリナから視線を逸らし、俯いて何かを堪えるように震える。

そんなミフィイシーリアを、サリナは微笑ましそうに見詰めている。まるで今のミフィイシーリアの心の中の葛藤を見抜いているかのようだ。

「……そうですか。もうあの方に惹かれ始めているのですね」

サリナのその咳きが、ミフィイシーリアの心のどこかにすどんと填まり込む。

そして脳裏を横切るのは、ほんの数回しか会つた事のない人物。初めて会つた謁見の間。

唐突に現れた昨夜。

そのどちらもが悪戯だった。アーシアを焚き付けた件も会わせれば都合三回。それだけの数の悪戯をされたというのに、なぜか彼に

対して腹立たしい気持ちにはならなかつた。

もしも、同じ悪戯を弟あたりがやるつものなら、腹立たしさのあまり一、一時間はお説教を喰らわせるだろう。

だが、なぜか彼にはそんな気持ちは沸いてこない。

昨夜の彼との会話を思い出してもそうだ。

どちらかといふと見知らぬ他人と接するのが苦手のミフィーシーリ

アだが、彼とはまるで昔からの知人のように自然に振る舞えた。

そして今のサリナの言葉を聞いて、ミフィーシーリアは自分の気持ちに気がついた。

出会つてまだ一日。だけど間違いなく自分は彼 ユイシークに惹かれ始めている、と。

「どうやら自分の気持ちに気がつかれたようですね？」

その言葉に我に返つたミフィーシーリアは、弾かれたようにサリナへと視線を移す。

相変わらず彼女は微笑んでいる。まるで悩む妹を優しく見守る姉のよう。

「いいじょう。わたくしはあなたを側妃として認めます
「は……はあ……あ、ありがとうござります……？」

相変わらずにここにこと微笑むサリナ。

他の側妃を追い出したという以前に聞いた話から想像していた彼女と、今日の前で穏やかに微笑む彼女との差にミフィーシーリアは戸惑いを隠せない。

「あなたは虚栄心や見栄などでシークさんに近づいたわけではなさうですもの。もし、そのような理由で後宮に来たのでしたら、さ

つせと追に出して差し上げるといひですかば……」

サリナの浮かべる微笑みに、若干だけ今までとは違つ色が浮かぶ。浮かぶその色は好奇心。

「わたくしもあなたの事が氣に入りましたわ」

と、サリナは手にした扇を弄びながら、爽やかな笑顔でそつ告げた。

一体自分のどこがどう氣に入られたのか。

あまりにも掴み所のないサリナに、ミフィーシーリアは首を傾げるしかない。

とはいへ、それを面と向かつて問いかけるのもなんだかで。何と言つたものか、とミフィーシーリアが困つていた時。

第六の間の扉がどんどんと乱暴に叩かれた。

ミフィーシーリアは戸惑いつつも、背後に控えていたメリアに視線を送る。

それに応えたメリアが一つ頷いて扉へと向かつ。

この時、ミフィーシーリアの対面に座っていたサリナが「来ましたわね」と小さく呟いたが、それは誰の耳にも入る事はなかつた。扉のところで誰何の声をかけるメリア。その声に応えたのは、ミフィーシーリアが先程考えていた男性のもの。

びくん、と身体を震わせるミフィーシーリアを優しげに見詰めたサリナが、ふと席を立つてそのまま扉へと向かつ。

微笑みを浮かべたまま自分の方へとやつてくるサリナに戸惑つメリア。

「わたくしに任せなさいな」

と耳元で囁かれ、戸惑いながらもメリアはサリナに場所を譲る。そしてサリナは自ら扉を開いた。

開かれた扉の向こうで、思いもしなかつた人物が佇んでいる事に、コイシークは驚きに目を見開いた。

「サ、サリイ……？　ど、どうしておまえがこい？」

コイシークの言葉をそこで遮ったのは乾いた破裂音。

部屋の中にいたミフィーシーリアとメリアを始め、サリナの侍女たちまでもが驚きで固まつたままそこを見詰めていた。サリナに突如平手打ちにされたコイシークの頬を。

「だめですよ、シークさん。こんな可愛らしい娘を悲しませては。それで、田は醒めましたか？　まだのようでしたらもう一発行きますよ？」

「ここにこと微笑みながら物騒な事を口にするサリナ。対するコイシークは、突然の不意打ちに最初こそ呆然としていたが、すぐに我に返るとにやりとした笑みを浮かべた。

「ああ。目が醒めたよ。サリイと……ジェイクのお陰でな」

「そうですか。では、わたくしはこれで退散いたしますわ。ミフィーシーリアさん、突然の来訪ご免なさいね。それから悪いシークさんは懲らしめておきましたから。では、じきげんよ」

スカートの裾を持ち上げて、優雅に頭をさげると、サリナはそのまま一人ですたすたと第六の間を出て行ってしまった。

後に残された侍女たちも慌ててミフィーシーリアに一礼し、先に行ってしまった主人の後を追う。

部屋に残されたのはミフィーシーリアとメリア、そしてヨイシーケ。三人は誰からも口を開くことはせず、部屋の中は重苦しい沈黙に包まれた。

第六の間を後にしたサリナは、一人つかつかと後宮の廊下を歩く。やがて彼女の前方に、一人の人物が姿を見せた。その人物は騎士の制服を着込み、腰に剣を佩いている。

「どうでしたか、サリィ？ ミフィーシーリア嬢の様子は？」

「ええ。どうやらリイさんの心配通り、シークさんが余計な事を口走つていましたわ」

「それじゃあ、やつぱり……」

「ええ、悲しんでいました」

サリナの顔から微笑みが消え、代わりに浮かんだのは心を痛めていた少女に対する心配。

「では、彼女もまた……」

「ええ。相変わらず同性異性を問わず、誰彼構わず惹きつけて止まないのですね、あの人は。ですが、今はまだ惹かれているだけ。それがどう変化するかは……」

「君の異能を以てしても判りませんか？」

「ええ。わたくしの異能はそれ程強力なものではありませんもの。あなたとは違いましたよ、マリイ」

再び微笑みを浮かべたサリナに、マリイ　マイリー・カーカライトはぽんと彼女の肩に手を置いた。

「さつき、凄い勢いで走つて行くシークを見ました。あの様子なら

リイが心配するまでもなかつたのではないですか？」

「どうでしょ、あれでなかなか鈍いところがありますからね、シーケさんは」

サリナがミフィーシーリアの部屋を訪れたのは、彼女の事を気にかけたリーナからの要請だった。

本来なら自分で様子を見に行くのだが、生憎と今彼女は疲労が激しくて動きたくない。

最初はリーナの事を聞きつけて見舞いに来てくれたアーシア。彼女の『治癒』の異能では、疲労を回復する事ができない。が、自分が様子を見に行くと言つていたのだが彼女に「さりげなく」という腹芸ができる筈もなく。

自然、この役目は他者の気持ちを正確に感じ取る事のできるサリナに回ってきた。

結果は案の定、リーナの心配した通りユイシーケは言わなくともいいことを言つてしまい、ミフィーシーリアを傷つけてしまった。

「……悲しみを感じるのは惹かれているからこそ。何とも思つていない相手なら、何も感じはしませんからね」

「ええ。しかも彼女が感じたのは嫉妬ではなく悲しみ。あのようなに合いながらも、リイさんを憎むこともなく、純粹に悲しみのみを感じていました。心根の優しいいい娘ですわね、彼女。わたくし、あの娘の事が気に入りましたわ」

「うん。私も彼女は優しいいい娘だと思いますよ。でなければコトリがあそこまで懷いたりしないでしょ」

「一人が微笑み合っていると、背後から人の気配がした。どうやらサリナの侍女たちが追つてきたようだ。

「わたくしの侍女たちも来たよですし、わたくしも一度部屋に…」

…第三の間に戻りますわ。あなたは？」

「私はまだ勤務中です。後宮騎士隊の詰所に戻ります」

「マリイにも心配かけたみたいですね」

「何を言つているんですか？ 私たちは昔からの親友でしょ？ 気にしないでください」

背中越しに手を振り、その場を立ち去るマイリー。サリナはそこに留まり、背後から侍女たちが追いつくのを待っていた。その顔に浮かぶのはいつもの微笑み。その微笑みは、今きっと悩み戸惑つてゐるであろう一人の少女と一人の青年に向けられたものだった。

重く立ち籠める沈黙と緊張感。

ミフイシーリアとユイシークは立つたまま、気不味そうに何度も互いの顔を見やるもの、張り詰めた緊張感に気圧されて何も言えずには再び視線を逸らす。

そんな事を何度も繰り返しているうち、ミフイシーリアはユイシークの片頬の変化に気づいた。

「し、シーク様っ！？ どうなされたのですか、その顔は……っ！」

？」

「あ、これか？ これならセツキ、サリィに引っ叩かれ……」

「そちらではありません！ 反対側です！」

はつとして腫れた頬を手で隠すユイシーク。確かに彼の左頬には先程サリナに平手打ちされた桜模様が張り付いているが、その反対側の右頬は赤く腫れている。先程ジェイクに殴られた箇所が、今頃になつて腫れてきたようだつた。

「メリ亞！ 何か冷やすものを…」

「は、はい！ 承知しました！」

ばたばたと侍女の控え室へと駆け込むメリ亞をよそに、ミフィン
ーリアは小走りでコイシーケに近寄ると、間近でその頬を見定める。

「これは……もしかして、殴られたのですか？」

「ああ……まあ、な」

氣不味そうに視線をそらすコイシーケの手を引き、椅子に座らせる。

そこへメリ亞が桶に水を汲んできたので、持っていたハンカチを
その水に浸し、軽く絞つて彼の腫れた頬へと当てる。

「一体誰に……」

そこまで考えてミフィン・シーリアはふと閃く。あの時、執務室にい
たのは自分とコイシーケ、そしてジェイクだ。

自分が執務室を飛び出した以上、彼を殴ったのはジェイク以外に
あり得ないだろう。

「ジェイク様……ですか……？」

「ああ。……でも、悪いのは俺だ。あいつは俺の目を醒まさせてく
れただ」

昔からお節介な奴なんだよ、と呟くコイシーケを見て、ミフィン
ーリアの顔に微笑が浮かんだ。

「済まなかつた」

照れているのか、コイシーケはそっぽを向いたままぽつりと零し

た。

「ジョイクに言われた……おまえは他の……アーシィやサリイたちとは違うのだと」

彼の頬に濡れたハンカチを押し当てながら、ミフィィシーリアはその言葉に耳を傾けた。

「正直、俺は慣れてしまっていたんだな。アーシィやサリイ、リイたちが傍にいる事が当たり前の事になっていたんだ。自惚れに聞こえるだろうが、あいつらが俺に想いを寄せてくれている事に慣れてしまっていたんだ」「

決して視線を合わせる事はなく。だけど途切れる事もなく。面白に近い彼の言葉を、彼女はただただ黙つて聞くばかり。

「だけど、あいつらが俺にとって大切な存在であるのも確かなんだ。幸い というか何というか、俺は王になつた。あいつらを全員傍に置いても誰も文句は言わない。あいつら自身も、互いに互いを認め合つた上で納得して俺の傍にしてくれる。だけど、おまえは違うんだよな」

この時、初めてコイシーグはミフィィシーリアへと振り向いた。

「つい、おまえをあいつらと同じように扱つてしまつた。済まなかつた」

コイシーグは居住まいを正すと、ミフィィシーリアに向かつて深々と頭を下げた。

一国の頂点に君臨する存在にて、面と向かつて頭を下げられたミフィ

イシーリアは、逆に混乱してしまつてあたふたと狼狽える。

「あ、い、いえ、お構いなく　じゃなくて！　え、えっと、その……と、取りあえず頭をお上げください！」

頭を下げるまま、ちらつと上田使いでミフィイシーリアの様子を伺うコイシーク。あたふたと慌てふためく彼女の姿に、思わず吹き出してしまつた。

「し、シーク様っ！？　もしかして、また私をからかわれたのですかっ！？」

「違う、違う。本気でおまえに謝罪したんだよ。今は慌てるおまえが可愛かったからつい　な？」

ぱちりと戸田を開じて見せるコイシーク。

そして面と向かつて可愛いと言われたミフィイシーリアは、先程のコイシークの片頬以上に真っ赤になつた自分の頬を、思わず両手で押さえたまま黙り込んでしまつた。

『辺境令嬢』更新しました。

少々時間が空いてしまって、申しわけありません。
実はここのこと、この『辺境令嬢』を書くテンションが少々下
がり気味だったので……

別に何か身辺であつたというわけではなく
皆さんに読んでいただいているこの『辺境令嬢』。お陰様を持ち
まして、お気に入り登録が200を超えて間もなく250に至りう
かとしています。

反面、お気に入り登録から外される方もみえるわけで。
しかも、更新した時にだだ一と登録数が減つたりすると、自信
がなくなるというか、凹むというか……

そのため、少々書く意欲が下がっていました。

お気に入り登録などが減るのは仕方ないと思います。期待されて
いたような話の展開と違つたりもするでしょう。純粹にこの『辺境
令嬢』に飽きたという方もみえるでしょう。

その事は理解しているつもりなのですが、それでも更新した途端
に減るというのは少々……

もちろん、偶然の一一致という可能性もあるわけですが。

それでも、「次の更新はいつですか」とか「楽しみにしています」
と言つてくださる方もみえます。

そんな方たちの声を糧に、何とか今回の話を書きました。

愚痴じみた事を零してしまつて申し訳ありません。

ただ、途中で投げ出すような事だけはしたくないので、完結だけ
はさせるつもりです。

こつ頃の完結になるのかなどは全くの未定ですが、
会いいただければ幸いです。

今後ともよろしくお願い致します。

12・四人の側妃とユイシーグ

我慢ならなかつた。

どうして自分があのよつな下賤の者にいよいよあしらわられねばならないのか。

思い出しただけで腸が煮えくり返りそうになる。あの屈辱は絶対に忘れない。

いや、倍以上にして返してやらなければ気が済まない。

だが、相手が悪い事も事実である。

このまま激情に任せて仕返ししても、結局はこちらが悪くなる。では。

では、どうすればいいのか。

要はこちらの正体がばれなければいいのだ。

ならば人を雇おう。間に仲介人を何人も挿ませて。

もしくは誰かを焚き付けよう。自分と似たような思いでいる者は他にもいる筈なのだから。

大切なのは、絶対に黒幕が自分だと思われないよつにする事だ。そしてあいつを辱める。自分が味わつた屈辱の数倍のものを与えてやる。

そうだ。

あの時一緒にいたもう一人も。

自分でさえ届かなかつた場所に、辺境の田舎者のくせにぼつと出てきて居座ることになつたあいつ。

あいつも同罪だ。

できれば全員に屈辱を与えたいたところだが、他の三人は立場的にも自分では手を出せない。

だが、あの二人は別だ。

家格がさほど高くないあの二人なら何とでもなる筈。他の三人の分も併せて、あの二人に味あわせてやる。

「己の心を焼く黒い炎の熱量に、その人物は唇をにいと歪ませた。

「俺が幼い頃、ミナセルの家に引き取られた事は話したよな？」

第六の間。改めてテーブルに着いたミフィーシーリアとユイシーク。メリ亞に入れてもらつたお茶を飲みながら、ユイシークの『謝罪』は続いていた。

とはいえ、当初のような重苦しい雰囲気は既に払拭されていたが。

「そこでアーシィと出会い……ミナセル家と親しかったクライクス家とカークライト家……サリイたちとも必然的に出会う事になった」

当時ユイシークとアーシアが五歳。サリナたちは一つ年上の六歳であった。

「それから俺たちはずっと一緒にいた。途中、不本意ながらジェイクとケイルも加わったがな」

ジェイクとケイルは当時、ミナセル領内の街の裏通りに暮らしていた孤児だった。

彼らは同じような孤児たちを纏め、様々な手段を用いて何とかその日を暮らしていたのだ。

時には掏摸や置き引き、搔つ払いのような犯罪行為にまで手を出し、何とか彼らは暮らしていた。

そんな彼らがある日、偶然街に出ていたユイシークとアーシアに目をつけた。

アーシアが財布代わりに使っていた小袋を、ジェイクたちの仲間の一人が引つたくつたのだ。

突然の事に驚いて呆然としているアーシアを顔見知りの町民に任

せ、コイシーケは引つたくなりを追つた。

引つたくなりの少年が逃げ込んだその先で、コイシーケはジェイクとケイルに出会い、最終的には肉体言語を交えて コイシーケとジェイクの肉体言語による意志疎通は『引き分け』だった 彼はアーシアの小袋を取り返す事に成功する。

だが、それだけでは終わらなかつた。翌日からジェイクとケイルたちが溜まり場にしている裏通りに、コイシーケは毎日のように顔を出し始めたのだ。

最初は警戒したジェイクたちだが、この当時既に今のカリスマの片鱗を見せ始めたコイシーケは、あつという間に彼らの中に溶け込んだ。

これにはボス格であつたジェイクと、互角にやり合つたという事実が大きく影響した。

ジェイクたちから見たコイシーケは、貴族のくせに街の浮浪児と氣安く付き合う変な奴、という位置づけであつた。

もちろん、コイシーケがジェイクたちの所に通い出したのは、面白そうだつたからに他ならない。

やがて彼らの間に奇妙な連帯感が生まれ、連帯感はあつという間に信頼に変化し。

そして将来、彼らはこの国を覆す『カノルドス解放軍』の中核となる。

「それから何年かして……漠然とだが俺はアーシィやサリイたち……三人の誰かと結婚し、その家を継ぐのだと思つていた。ガーラードのおっさんたち……三家の親たちがそう話しているのを聞いた事もあつたしな」

だが、『解放戦争』が起きた。

切欠は小さな事だつた。だが、その小さな切欠が最後には腐りきつっていた大樹を打ち倒す。

「そして俺は王になつた。本当の事を言えば、王になんかなりたくないつたんだが……俺は『カノルドス解放軍』の旗印だつたし正確には、俺に流れる王家の血と異能が旗印だつたわけだがな。まあ、戦争には大義名分が必要なのは判つてゐるし、今更後には引けないのも理解していた」

そして彼は王位に着く。

実際、彼は王としてとても優れていた。

口ではぐだぐだ言いつつも成すべきことはきちんと成し、下の者の諫言にも素直に耳を貸し、それが正しいと思われれば遠慮なく取り入れる。

治安の強化に力を注ぎ、犯罪は厳格に法に照らし合わせて裁いた。身分による罪の軽減は一切行わずに。

旧体制よりも徐々にだが税を軽減した。いや、正確には旧体制時代の課税が高すぎたのを正常に戻したというのが正しい。

これは旧貴族たちから没収した莫大な財があつたからこそだ。でなければ、王国の立て直しという出費の嵩む時期に税の軽減は無理だつただろう。

当然、民衆の支持は高く、配下には有能な者が揃つてゐる。

有能な者は身分に拘らずに取り立て、功績に応じて恩賞を与える。彼自身、贅沢な暮らしに興味ないので褒美の出し惜しみをする事もない。

そして彼に備わつたどこか人を引きつける魅力。

かつては敵対していた者さえ、今では彼に絶対の忠誠を誓う者が数多くいる。

当然、そうなると彼の周りには美しい女性が数多く集まる事になる。

「だけど俺は、アーシイたち三人以外は誰も抱かなかつた。より正

確に言えば抱くどころか、傍に置いておく氣にもなれなかつた。あいつら以外に大切だと思えるような女は当時の後宮にはいなかつたからな

そんな彼の気持ちを察したサリナは、自ら進んで憎まれ役を買って出た。

彼女は様々な難癖を突きつけ、当時後宮にいた数多くの令嬢たちを追い出したのだ。中には余りにも些細な失敗を理由に追い出された令嬢もいた。

もちろん、サリナには様々なところから苦情が舞い込んだ。彼女に面と向かつて非情な言葉を投げつけた者もいる。

だが彼女はそれを覚悟の上で令嬢たちを後宮から追い出したのだ。全てはユイシークのために。彼の王としての立場を守るために。

「その後、リイが後宮に加わった。だが、あいつを後宮に入れたのは、あいつの能力が欲しかつたからだ。もちろん、今ではあいつもアーシイたち同様の存在になつてゐるのは間違いない」

当時、リーナは彼の奴隸だつた。だが、奴隸としてユイシークに尽くしていた彼女に、彼はその能力の片鱗を見出していた。

やがて彼女の能力は開花し、誰もが彼女を認めるようになる。そしてミナセル公爵婦人の尽力により、ミナセル家の遠縁に当たるカーリオン伯爵家の養女となり後宮に入る事になった。

「アーシイたち三人の俺に対する気持ちは昔から氣づいていた。だから俺も『解放戦争』以前は三人の誰かと結婚するのだと思つていたわけだし、事実、当時あいつらは俺の心が決まるまでいつまでも待つと言つてくれた」

彼女たち三人の気持ちは今も変わっていない。互いに互いを認め

合い、助け合いながらずっと待っているのだ。ユイシークが誰かを選ぶまで。

「リイは奴隸だつたという過去から、他の三人よりは一步控えたところがある。だからあいつも何も言わずに待ってくれているんだろうな。俺が誰かを選ぶのを」

今では他の側妃たちとすっかり打ち解けているリーナだが、後宮入りした当時は奴隸だつたという氣後れから、与えられた第五の間から全く出てこなかつた程だ。

奴隸という過去を気にしてか、今でも彼女が使用人として使っているのは奴隸当時の同僚とも言える犬人族ばかりで、彼女の傍には人間の侍女は一人もいない。

そんなりーナが打ち解けたきつかけはアーシアだつた。

誰とでも気軽に接し、その笑顔はいつの間にか頑なな心を解き解してしまつ。この辺りもまた彼女が『癒し姫』と呼ばれる由縁の一つなのだろう。

アーシアと接するうちに徐々に親しくなつていつたリーナ。そしてそれをきっかけに他の二人とも次第に打ち解けていつたのだ。今ではアーシアとリーナは親友と呼べるほど親しくなつてゐる。

「アーシイたち三人は自然と傍にいた。リイを傍に置く理由は彼女の能力が欲しかつたから」

ユイシークは立ち上ると、テーブルを回り込んでミフィーシーリアの方へと近寄る。

そしてミフィーシーリアの傍らまで来ると、その場に片膝を着いた。

「だから……おまえが初めてなんだ。純粹に傍にいて欲しいと思つたのは」

コイシーケはそつとミフィーシーリアの手を取る。

「側妃たち四人は俺にとつて間違いなく大切な存在だ。どうあっても切り捨てる事はできない。王としても、俺個人としても」

ミフィーシーリアは、真っ直ぐ自分へと向けられるコイシーケの視線に囚われる。

「確かに俺はおまえを傷つけてしまった。俺を理解してくれた上で、互いに理解し合っているアーシィたちとは違うという簡単な事にも気づかずに」

それはいつもの悪戯小僧のような瞳ではなく、とても真摯な光を湛えていた。

「身勝手なのは重々承知している。それでも尚、俺はおまえに傍にいて欲しいと思っている。アーシィたちの事を踏まえた上で答えてくれ。おまえは……ミフィーシーリア・アマローはこの俺、コイシーケ・アーザミルド・カノルドス1世の傍にいてくれるか？」

ユイシーケの真摯な視線を受け止め、ミフィーシーリアはゆっくりとその瞳を閉じた。

その際、彼女の頬を一筋の銀の靄が伝い落ちた。
ミフィーシーリアは瞳を開くと、コイシーケの手からすると自分の手を抜き取つて立ち上がり、一歩下がる。

一方のユイシーケは、自分の手の中から彼女の手が逃げ出した事に、一瞬だけ驚愕を浮かべると悔しそうに俯ってしまった。

そしてミフィーシーリアは、そんなユイシーケにスカートの裾をつと持ち上げ丁寧に頭を下めた。

「 私、ミフィーシーリア・アマローは、ユイシーク・アーザミル
ド・カノルドス1世の……傍にいる事を」

そして頭を上げたミフィイシーリアは、にっこりと花のよみに微笑む。

「望みます」

先程流れ落ちた雪は、サリナの訪問前に流していたような冷たいものではなく、もつと暖かいそれ。

弾かれるな、頭を上げるトマシークの顔に、笑いぐらと喜びか
広がっていく。

「……………ありがとうございます。ミツイ」

ユイシークは改めて彼女の手を取ると、その甲にそっと唇を落とした。

丁度その時。第六の間の扉がいきなり開かれた。
その光景を目にしたメリアは、そういえば今朝もこんな事があつたなーと、まるで人事のようにそれを見ていた。

そして、朝同様形ひ込んできたものの、二ヒリは、部屋の中の二イシーグとミフィイシーリアを見て目を丸くする。

同時に、彼女はミフィーシーリアの目元に輝く雲をちやつかりと見て取った。

絶叫と同時に踏み込まれるコトリの左足。そのブーツの底と毛足の長い絨毯が熱い抱擁を交わし、きゅきゅっと歓喜の声を上げる。それと同時に彼女のその細い腰が目一杯捩じり込まれ、その捻転を利用した実に切れのいい回し蹴りが、いまだにミフィーシーリアの手を取つたままの鳩尾へと叩き込まれた。

「ぐばあああああああああああああああつ！…！」

叫び声と同時に吹き飛ばされるコイシーグ。

ミフィーシーリアはといえ、いきなりの状況について行くことができずにつただ呆然とするばかり。

そんな彼女を、コトリはやうやく抱き締める。

「サリイから聞いたんだからねつ！！ いくらパパとはいえ、ミフィイを泣かせたらコトリが許さないんだからあつ！！」

床の上でぴくぴくと悶えるコイシーグを睨み付けて、コトリはまるでミフィーシーリアを守る騎士のように高らかに宣言した。

12・四人の側妃とコイシーカ（後書き）

『辺境令嬢』更新です。

えー、申し訳ありません。

前回の後書きでつまらない愚痴を零してしまいました。
その際、何人かの方から励ましていただきました。

本当に嬉しかったです。ありがとうございます。感謝してもしき
れません。

先生、僕、もっと強くなるよー、いつか絶対に先生より強くなっ
てみせるから！

いやあ、ほんと世の中まだまだ捨てた物じゃないと実感しました。

今回、色々あってよひやく再びスタートラインに立つたミフィィシ
ーリアとコイシーカ。

ええ、まだ二人はスタートラインに立つた所です。まだまだこれ
から。

そんなこんなで今後は改めてがんばる所存です。これからもよろ
しくお願いします。

..... ところで、先生ってだれ？

13・彼が彼女を求めたわけ

控え目だが、屈託のない笑顔。
なぜかその笑顔から彼は目を離す事ができなかつたのだ。

後日、彼は彼女に尋ねられた事がある。

「どうして私を傍らに置いていらっしゃったのですか？」

と。
その時、彼はこう答えた。

「おまえが色々と面白そつた奴だと思つたからや」

だが、真相は違う。

しかし、本当の理由を素直に口にするような彼ではない。
彼は生まれつきの悪戯小僧。本心を軽々しく口にするよりでは悪戯は成功しないのだから。

初めて彼女を見たのは、彼の「使^{つかい}」の目を通してだつた。

彼と彼の「使」は感覚を共有する事ができる。

とはいへ、共有できる感覚は視覚のみであり、他の感覚は共有できない。

初めて彼が見た彼女は、彼の「使」にハンカチを差し出しているところだった。

感覚が共有でいるとはいえ、いつもいつも共有しているわけでは

ない。

この時彼が「使」に感覚を繋いだのは、今「使」がどうしているのかちよつとばかり心配だつたからだ。

彼の「使」の傍には、彼が信頼する悪友二人がついている。彼らがついている以上、誰かが「使」に危害を加えるようなことはあり得ないし、「使」自身も彼の異能の一部を使えるから、「使」に危害を加えるのはそう簡単な事ではない。

だけど、彼の「使」は人間でいえばまだまだ子供なのだ。
確かに見かけは15、16歳ほどに見える。カノルドス王国では、15歳で成人と認められるので、それだけで判断するのなら「使」は立派な大人だろう。

しかし。

「使」の心はまだ子供なのだ。

しかも、「使」はいわゆる世間知らずも甚だしい。「使」を騙すのは決して難しくない。

だからだろうか。彼がいつも「使」を心配するのは。

そのせいかどうかは判らないが、「使」は極めて人見知りが激しい。普段は、昔から彼の周囲にいる人たちにしか口さえ利かないぐらいだ。

しかし、彼が「使」と感覚を繋げた時、「使」は見知らぬ少女と相対していたのだ。

これには彼の方が驚いた。

それと同時に興味が沸いた。人見知りの激しい彼の「使」が、気後れする事なく接する彼女に。

それからは、暇を見ては「使」と感覚を繋げてみた。

その度に彼の脳裏に浮かび上がる一人の少女。彼女は裏表のない、純粹な笑顔を彼の「使」に向けていた。

身なりからすると町娘だろうか。質素な服を着ており、化粧氣も見られない。一見すると地味な印象の娘だったが、その笑顔は彼の目を引いてやまなかつた。

彼女に関する興味が抑えきれなくなつた彼は、今度は意思を「使」と繋げてみた。

彼と「使」は意思の疎通が行える。今回、彼が「使」を悪友たちに同行させたのは、彼らといつでも連絡を取れるようにするためだつた。他にも、「使」の社会勉強という側面もあつたが。

意思の疎通は距離が離れていたりすると繋がらない事も多々あるが、今回は何とか繋がつたようだつた。

そして「使」の話によれば、彼女はこの土地を治める領主の娘だという。そして先日、「使」とは友達になつたのだそうだ。
彼は再び驚いた。彼女が領主の娘だつた事に。正直、彼には彼女が貴族の令嬢には見えなかつた。

そして驚いた事はもう一つあつた。それは「使」と彼女が友達になる際、「使」の方からそれを申し出たというのだ。

あの引っ越し案で人見知りの激しい「使」が、だ。

この事が、彼の彼女に対する興味を更に増大させたのだった。

彼が悪友たちに命じて内偵させていた、とある貴族の悪事が明るみに出た。

その貴族が行つていた奴隸の密売の確たる証拠が出たのだ。

彼は「使」を通じて悪友たちにその貴族の身柄を押さえるよう指示した。いや、しようとした、が正しい。

なぜなら貴族の悪事を知るや否や、「使」の方から一方的に意思の接続を断つてしまつたのだ。

どうやら、彼女の事が心配で何も考えずに飛び出してしまつたらしい。

彼も「使」を通じて知つていた。彼女が近日、その貴族の元に嫁ぐ事になっているのを。

この縁談を知つた時、彼は思わず「使」に相手の貴族の悪事を彼女に伝えさせて、縁談をなかつた事にさせようかと考えた。

だが、結局は彼はそれをしなかつた。

今、彼の信頼する悪友たちがその貴族の悪行の証拠を抑えにかかっているのだ。遠からずその目的は達成されるだろう。

そうなれば当然、縁談だつて立ち消える。

だから彼は「使」を通じ、悪友たちに別の事を伝えた。

それは。

もしも彼女が「使」の本当の事実を知り、それでも「使」を友として受け入れるほどの度量を持つているなら。

彼女を彼の元に来させるように。

そう悪友たちに伝えさせたのだ。

そして彼女は彼の元へと來ることを了承した。

もちろん、そこには身分の差による拒否できない力関係や、他の打算が含まれている事を彼は承知している。

それでもいいと彼は思ったのだ。

彼女が自分の傍で、あの屈託のない笑顔を自分に向けてくれるのなら。

「使」の目を通して彼女を見ていて、彼にはどうしても気に入らない事が一つだけあつた。

それはあの笑顔が決して自分に向けられたものではない事だ。あの笑顔は彼女の友である「使」に向けられたものであり、決して彼に向けられたものではない。

その事が彼を面白くない気分にさせていた。

それもまた、彼が彼女を傍に置こうとした理由の一つであつた事に、この時の彼はまだ気づいていなかつた。

どうして彼女を傍に置こうとしたのか。

彼の周囲の者たちは何度もそう彼に尋ねて来た。

そして彼はその度にこう答えるのだ。

「あいつは面白そうな奴だからな。興味が沸いたんだ」

だけど彼の本心は違う。

しかし、その事を素直に告げるような彼ではない。
なぜなら彼は「永遠の悪戯小僧」なのだから。

全てを素直に言つてしまつたら悪戯は成功しない。
だから彼は本心を語らない。

いつか、彼の親しい者たちには気づかれるかも知れない。いや、
きっと気づかれるだろう。

それでも。

それでも、彼はその時が来るまで絶対に本心を口にしないと決め
た。

それに。

恥ずかしくて絶対に口になどできる筈がないではないか。
あの笑顔を自分に向けて欲しかった、などと。

ぎり、と軋んだ音が薄暗い中に響き渡った。

その音に、暗闇の中でわだかまっていたものがもそりと動いた。
もぞもぞと異臭のする毛布のようなものから顔を出したのは、く
たびれた衣服を身に纏つた太った短身の男。

そのくたびれた衣服も元はといえば上物なのだろうが、男がここ
に入れられてからずっと着続けているために、今まで彼が潜り込ん
でいた毛布同様、すっかり薄汚れ嫌な匂いを放つようになつていた。
そして男は起き上がり、先程軋んだ音が響いた方へと首を回した。

男はそこに長身の人影を認めた。

「あんたがアグール・アルマンか？」

人影が口を開く。低く感情の籠もらない無機質な声。
全身を黒装束で包み込み、顔にも黒い布を巻き付け目だけが薄ぼ
んやりとした灯りの中に見て取れる。

「あんたがアグール・アルマンなんだろ？」

再び響いた無機質な声に、太った男はかくかくと首肯した。

「そ……そうだ……儂がアグール・アルマン子爵だ……」

「ふん……元子爵だろ？」

先程まで無機質だった人影の声に、侮蔑の色が宿る。

「あんたが貴族だろうが、元貴族だろうが俺には関係ない。俺は依
頼された事をするだけだからな」

人影 体格と声から男に間違いない は、一歩下がるとその
場所を空けた。

今、アルマンが入れられている、牢獄のただ一つの出入り口を。
先程聞こえた軋んだ音は、この牢獄の扉が開けられた音だったの
だ。

「出る。俺の依頼主が待ってる」

「儂をここから出して……どうするつもりだ……？」

「さあな。さつきも言つただろう？ 俺は依頼された事をするだけ
だと。だが

「

唯一露になつてゐる目が、冷たくに細められる。

「あなたは恨んでいる……違うか？　あなたは例の小姑娘を恨んでいるだろ？」「

男のその言葉に、アルマンの脳裏に一人の少女の姿が浮かび上がる。

同時に、それまで死んだ魚のように濁ったアルマンの瞳に、狂気に歪められた炎が燃え上がった。

「やう……やうだ！　儂をこんなために呑ませたあの小娘！　あ奴だけは許さん！　絶対に許さんっ！！　あ奴には儂の味わった屈辱の数倍のものを『呑めてやるっ！！』犯して、犯して、犯して抜いてやろりではないか。儂だけではない。町の路地裏にたむろする薄汚い浮浪者たちを片っ端からかき集め、そいつらにも犯させてやるっ。犬と交わらせるのも面白いかもしれん。あの小姑娘が泣き叫びながら凌辱され、許しを乞う姿はきっと最高に儂を樂しませること違いないっ……！」

狂氣の炎に焼かれるアルマンを、男は正反対の氷のような眼でじつと見詰めていた。

「あなたのその目的のためにも、俺の依頼主に会っててくれないか？　あなたにとつて損な事にはならないと思つがな？」

「……おまえの依頼主とは誰だ？」

アルマンの眼が、胡散臭そうに細められて男を捉える。

「そいつはいいでござるんな。だが、会えば判ると依頼主は呑み付いたな」

「会えば判るだと……？　なるほど、おまえの依頼主とやらほどの

若造に爵位を取り上げられた元貴族の一人といったところか？

アルマンの質問に、男はさてな、と呟きながら肩を竦めた。

「それよりも、早くここからあらからんか。どうこもりこは臭くてかなわん」

「そ、そうだな。ここは儂のよつた本来高貴な者のいるよつた場所ではないからな。いいだろう。おまえの依頼人とやらの所に案内せい」

アルマンの尊大な態度に腹を立てる事もなく、男はぐるりと背中を向けると足早にその場を離れる。

すたすたと歩く男の後に続いて、アルマンもよたよたと薄暗い通路を歩いて行く。

途中、不意に男が立ち止まると、振り返つてアルマンに告げた。

「そういうや忘れてた。俺の名前はリガル。ちょっと前までは魔獣狩ハンタりなんぞしていたが、そっちじゃ食つていけなくなつて廃業した。おかげで最近じや何でも屋に鞍替えつてわけだ。あんたも俺にやって欲しい事があれば遠慮なく言つてくれ。ただし、それ相応の代金はいただくぞ？」

「魔獣狩りを廃業したこと……？ 何をやらかした？」

「何、ちょっととした小遣い稼ぎだ。だが、その事であつといつ聞に悪評が広がつてな。それ以上魔獣狩りは続けられなくなつた」

「ほう……どうやら貴様は、なかなかの悪党のようだな」

「なに、あんた程じやない。あんたも奴隸の密売をしていたと聞いたぞ」

男 リガルはぐぐもつた笑いを零すと、再び薄暗い通路をものも言わずに歩き出した。

13・彼が彼女を求めたわけ（後書き）

『辺境令嬢』 更新。

いつもより若干短いですが、今回はきりがいいのでここまで。
そしてなんとリガルがこっちに登場。『魔獣使い』から爪弾きに
されたようです（笑）。

リガルが何をしたのかは『魔獣使い』の方を参照していただけれ
ば、と（わりげなく（？）宣伝）。

それでは、今後もよろしくお願ひします。

「アルマンが消えただと？」

国王の執務室。

そこに集つた者たちから、ユイシークはそれを聞かされた。

今この場にいるのは国王であるユイシークの他に、宰相のガーリルド・クラークス、その補佐官のケイル・クーゼルガンと、同じく宰相補佐兼国王の侍従長にして第四側妃のリーナ・カーリオン、近衛隊隊長のジェイク・キルガス。後宮騎士隊の隊長マイリー・カーライト。そしてもう一人、壯年の男性の姿があつた。

彼の名はラバルド・カーカライト。マイリーの実父であり、カノルドス王国の軍部を統括する将軍である。

御三家の一角であり、ガーリルド同様、『解放戦争』の初期からユイシークと共に戦つた生え抜きの軍人にして侯爵。

大柄な身長にがつしりとした身体付き。髪も豊かな髭も本来は黒なのだが、50歳という年齢から白い物が混じり始めている。

また、極めて無口な事でも有名であり、誰の前であろうと首を縋るか横に振るかだけしか対応しない。

さすがに公式の場では発言するが、それも最小限のみ。

また、その槍の腕は国内最強とも言われており、ジェイクといえどもいまだにラバルドからは三本に一本しか取れないという。

今、この場に集まっているのは実質上、この国のトップと言える面々であった。

「どうやら、昨夜の内に誰かがあやつを外に連れ出したらしい」

渋い顔で告げるガーランドに、コイシーカの顔もまた歪められる。

「地下牢の見張りはどうした？」

「差し入れられた食事に薬が盛られていたみたい。朝までぐつすりだつたようよ。……一人を除いて」

リーナが付け足した最後の一言に、コイシーカの眉がぴくりと揺れた。

「内通者の犯行って事か。で？　その一人はどうした？」

「城壁から少し離れた林の中……あまり目立たない場所で近衛の一人が発見したぜ。冷たくなつてな。死因は後ろから心臓を一突き。獲物はおそらく小剣ショートソードつてトコだな。いい腕してンぜ？　ただ者じやねえな」

「おそらく、そいつが誰かを外部から地下牢に招き入れてアルマンを脱獄させた。その後は侵入者とアルマン共々一緒に逃亡するはずだったが口を封じられた、といったところだらうな」

コイシーカの質問にジェイクとケイルが順に答えた。

「発見された牢番の身元は確かだ。もつとも、身元のはつきりしない者など雇うわけがないがな」

ガーランドの言葉を、コイシーカは腕を組んでぎしりと椅子の背もたれに体重をかけながら聞く。

「で？　その身元は？」

「今は平民だけど、『解放戦争』前は伯爵の爵位を持つていた人物の息子よ。『解放戦争』では旧貴族派に与したため、戦後は平民に落とされているわ。もつとも、旧貴族派とはいっても、その元伯爵

は人柄も立派で領地の統括は善政を敷いていたようよ。そのため、戦後に爵位は取り上げられても財産までは没収されず、それを元手に今では商売を営んでいるわね。領民からも慕われていたから上手くやつていいみたい

「そんな人物がどうして旧貴族派に？」

「本人の意思とは別に、親戚筋から旧貴族派に『』するよう強制されていたみたいだな」

「とは言え、息子の方は典型的な貴族主義者だったみたい。普段から「どうして貴族の俺が兵士なんて下賤な事を」と零してばかりいたという証言が、同僚の兵士たちから得られているわ。きっとその辺りの自尊心を擦られて利用されたのでしょうね」

「何でも、その選民主義を叩き直すために、父親に強引に軍に入れられたみたいだな。いくら自尊心の乞え太った我が儘坊やも父親には逆らえず、しぶしぶ軍に入ったとの事だ」

コイシーケはケイルとリーナの両宰相補佐から説明を聞き、なるほどとばかりに頷いている。

「だが、判らんな。何が目的でアルマンを脱獄させた？　あいつにはもう何もないぞ？　地位も権力も金もな」

奴隸の密売が公になり、アグール・アルマンは貴族の地位を奪われた。当然領地も失い、それまで貯め込んだ財産も全て国が没収している。

現在、かつてのアルマン子爵領は、隣の領地の領主であるアマロー男爵が代理統治している。

もつとも、遠くない将来、正式にアルマン元子爵領はアマロー男爵領となる事が決定しているのだが。

今のアグール・アルマンには何の利用価値もない見ていい。それなのに、敢えて危険な橋を渡つてまで彼を脱獄させた。

裏でこの件を手引きした者には、それを行うだけの何かしらの理由がある筈なのだ。

それがコイシーグには判らない。

「マリー」

「はい。何ですか、シーグ？」

コイシーグの言葉に、マイリーは相変わらず爽やかな笑顔と共に応える。

「あいつの周囲の警護を固める。ただし、できる限りあいつには気取られないようにしてな」

「あいつ？ ああ、ミフィーシーリア嬢ですね？」

「アルマンが捕まつた一件にはあいつも加わつてゐる。アルマンが逆恨みで、あいつに良からぬ事を企てないとは限らないからな」

「了解しました。それでこの事は彼女には伝えますか？」

「いや、伝えない方がいいだろう。徒に不安がらせる事もあるまい。それから……ラバルドのおっさん！」

コイシーグの呼びかけに、ラバルドは器用にも片方の眉だけをくいつと動かせて応える。

「アマロー男爵領に少し兵を……そうだな、三十人ばかり派遣しろ。アルマンがあつちにちょつかいをかける可能性も捨てきれない。ああ、アマロー男爵にだけは兵を派遣した理由を知らせた方がいいな。その方が兵も動きやすくなるだろ？」

ラバルドはそれに応えてゆつくりと頷く。

「アルマンの行方を追え。この件は単に奴の脱獄という表面的な事

だけでは片づかないだろう

王の一言に、居合わせた者は姿勢を正し、御意と一言応える。
そんな一堂を前に、コイシークは普段からは想像できないほど真剣な表情で更に言葉を続けた。

「ヒの一件には必ず裏がある。それもかなり大きな裏がな」

王宮の中庭。

ヒの中庭には、王宮を訪れた者が誰でも立ち入る事を許されている。

王に謁見を求める貴族たちとその連れの者。珍しいものを入手してそれを王へと献上する商人。隣国からの使者など。

時に様々な者たちがここに足を踏み入れる。

もちろん、ヒの王宮に住まう者にとっても、ヒは気持ちよ良い憩いの場である。

そのような場所なので、所々に警備の兵士の姿も見受けられるが、それでも開放感を求めてここにやって来る者は多い。

本日、ミフィイシーリアもまた、侍女であるメリ亞を連れてヒを訪れていた。

ミフィイシーリアが後宮に入つて一週間以上。ようやくヒの暮らしひにも馴染んで来た。

最近では彼女の暮らす第六の間に、様々な人が訪れるようになつた。

コイシーカやコトリを始め、後宮騎士隊の隊長のマイリー、アーシアやリーナ、それにサリナといった先輩の側妃たち。時々ではあるがジェイクも顔を見せる。

もつともジエイクは一言二言言葉を交わすと、すぐに立ち去ってしまう。これは流石に近衛隊の隊長であり王の旧友で信頼厚くとも、国王以外の男性が側妃の部屋に気安く出入りするわけにはいかないからだらう。

最近ではミフィーシーリアも、彼ら彼女らともかなり打ち解けて来ていた。

だが、一つだけ気にかかる事もあつた。

第三側妃であり、御三家の一角、カーライト家の令嬢だけは未だに顔を合わせていないので。

まさかアーシアやサリナたちにどうして第三側妃だけは姿を見せないのか、などと聞けるわけもなく。

気になるのならば自分から尋ねればいいのだが、なんとなく躊躇われて今日に至ってしまっている。

とはいって、まだ後宮入りしてから一月も経っていない。今後顔を会わせる機会もあるだらうとミフィーシーリアは思つていた。

（まさか、顔も見たくない程嫌われているなんて事は……ないと思ふけど……）

そう思いたいミフィーシーリアであった。

今日の中庭も様々な人が訪れていた。

そのせいだろうか。何となくいつもより配置されている警備の兵の数が多いような気がするのは。

「ねえ、メリア？ 何となくだけ、今日は警備している兵の数が多いような気がしない？」

「お嬢様もそう思います？ 私も何となくですけどそう思つていました」

さりげなく周囲を見回すミフィーシーリアとメリア。

そのミフィーシーリアの視界に東屋が入った。

その東屋には現在、数人の美しく着飾つた貴族の令嬢らしき者たちが、噂話とお茶に興じているようだ。

だが、ミフィーシーリアの脳裏を掠めたのは、かつてここで遭遇した一人の女性。

彼女がこの王宮に来た初日、偶然この中庭の東屋にいたその女性は、ミフィーシーリアが側妃としてこの城に来た事を知ると、それで穏やかだった表情を突如怒りに染めてミフィーシーリアに組み付かん勢いで迫つて來た。

その時は幸いにも、一緒にいたリーナの機転と駆けつけたマイリーによつて事なきを得たが、ミフィーシーリアにとつては短い間であつたとはいえ、とても恐ろしい体験だつた。

おかげでミフィーシーリアは、この中庭に来る度に、あの時の令嬢はいなかと注意深く周囲を見渡すようになった程だ。

幸い、今日も例の令嬢の姿はなく、ほつと胸をなで下ろしたミフィーシーリア。

そんな彼女を、東屋で噂話とお茶に興じていた令嬢の一人が目ざとく見つけた。

「あら？ あまりお見かけ致しません方ですが、どちらの家の方かしら？」

彼女の那一言に、周囲にいた令嬢たちも一斉にミフィーシーリアへと視線を向けた。

いつなつてはミフィーシーリアも、このまま無視するわけにもいかない。彼女は静かに東屋に歩み寄ると、礼儀正しく挨拶をする。

「アマロー男爵家の長女でミフィーシーリアと申します。皆様方にお

目にかかるとても嬉しく思います

名乗ったミフィーシーリアに対し、令嬢たちは顔を付き合わせてこそそと囁き合つ。

囁き合ひ、と言つてもその声は決して小さいことは言へず、ミフィーシーリアの耳にも十分届く程だったが。

「まあ、アマロー男爵ですつて。どなたかお聞きになつた事がありまして？」

「いいえ。わたくしは聞いた事がありません」

「確かに辺境の小貴族と聞いたような……ですが、詳しい事までは存じませんわ」

「辺境の小貴族……つまりは田舎者……といつこと、ふふ、確かに、いかにもですわね」

令嬢たちの嘲りを帶びた視線がミフィーシーリアに注がれる。

今日、ミフィーシーリアが着ている物は相変わらず派手さに欠ける地味なものだつた。

だが、これは見た目こそ地味だが、上等な布地を惜しみなく使用し、目立たない刺繡や細工を各所に施した高級品である。物の本質を見る事ができる者なら、その真価を見抜いて驚愕するだろう程の。もちろんこれは、派手な装いを嫌う彼女のため、コイシーグが特別に譲えさせたものである。

実はミフィーシーリアのドレッサーには、最近数多くの上質の服やらドレスが蓄えられている。

中にはコイシーグから贈られたものもあるが、その殆どが第一側妃のサリナから贈られたものだつた。

サリナはまるで姉妹のようにミフィーシーリアに接していく。そして何かにつけて世話を焼きたがるのだ。

彼女から贈られた服たちもその一つ。

ひょっとして、あの方は私を着せ替え人形か何かと勘違いしているのでは、とミフィーシーリアはありがたく思いつつも若干辟易している程だった。

だが、派手さを厭うミフィーシーリアは、コイシーカやサリナから贈られた豪華なドレスにどうしても気後れしてしまい、貰った中でもできるだけ地味な物を選んで着ていた。

最近ではコイシーカやサリナもミフィーシーリアの好みを理解し、上質だが華美ではない物を贈るようにしている。

今ミフィーシーリアが着ているものもそんな最上質な服の一つだが、集つた令嬢たちには上辺だけを目にしてその本質は理解していない。単純にミフィーシーリアが身に纏っているものを質素なものと判断し、彼女の事も辺境出身の田舎娘と解釈したようだった。

「それで、ミフィーシーリア様は本日はどうして遠くからわざわざお城に？」

「あり、そのような事、聞いては失礼でしてよ？」

「きっとあの噂に引かれていらしたに違いありませんわ。ね？ そうでしょうね、ミフィーシーリア様？」

意地の悪い笑みを浮かべた令嬢たちに、ミフィーシーリアの細い眉が僅かに寄せられる。

ミフィーシーリアはこれ以上ここにいたくなかったが、だからといつてあからさまにこの場を去るわけにもいかない。

正式な発表はまだでも、彼女はすでに第五側妃なのだ。

ここで下手な対応をして変な噂でも立てられれば、それは自分だけではなくコイシーカにまで迷惑をかける事になる。
だからミフィーシーリアも立ち去りたいのを我慢して、ここに留まつているのだ。

「あの……失礼ですが、噂とはどのような噂の事でしょうか？」

「あら、とぼけなくとも結構ですわ。あなたの目的もわたくしたちと同じなのでしょう？」

「国王陛下が近々正式にもう一人側妃をお迎えになるという話は当然聞き及んでいらっしゃるのでしょうか？　だから、わたくしたちも……」

「まあ、あまりはつきりと仰っては少々はしたないのではなくて？」

じらじらと笑う令嬢たち。その立ち居振る舞いはあくまで上品であった。

見た目だけだが。

彼女たちの姿を見て、コイシーケがこのよつたな令嬢たちに嫌気がさして遠ざけたのが判らなくもない、と、ミフイシーリアは心の中で溜め息を吐いた。

ここに集つてゐる令嬢たちの目的。それは何とかしてコイシーケの目に留まり、ミフイシーリアに続いて側妃となる事だらう。だからこうして着飾つて城の中庭に集まつてゐるのだ。

この中庭は城で働く者たちにとって、格好の憩いの場である。それはユイシークにとつても例外ではない。

先日も彼は執務の休み時間を領して、コトリとミフイシーリアを伴つてこの庭を散策している。

無論その事は城に勤める者なら誰でも知つてゐるので、こうして令嬢たちが国王陛下との「偶然」の邂逅を求めてゐるのも不思議な事ではないのだ。

そしてその意味では、彼女たちが今日この場を訪れたのは幸運と言えるだろう。なぜなら。

今日これが「ら」の場に、国王であるコイシーケが現れるのだから。

14・ある日の午後（後書き）

『辺境令嬢』 更新。

本当なら国王陛下が登場するところまで書きたかった。
だけど前半が思いの外長くなつて、仕方なくここで切る事に。
この続きをできる限り今週中に書きたいと思います。『辺境令嬢』
と『魔獣使い』は書きやすいので、おそらく今週中の更新は可能で
はないかと。
それに反して『怪獣咆哮』の書きついでいたら……

今後ともよろしくお願いします。

それはその日の朝の事。

「お昼の休憩に……ですか？」

対面に座るコイシーケの言葉に、パンを小さくぱさりながら食べていたミフィーシーリアの手が止まつた。

「ああ。政務の息抜きに、この前みたいに中庭を散歩でもどうかと思つてな。そうだな、コトリも一緒に誘おう」

「いいですね。私もあの中庭とても気に入っています」

ほがらかに笑うミフィーシーリア。その笑顔につけてコイシーケの頬が緩みそうになる。

意識してそれが表に出ないようにしながら、コイシーケも食事を続ける。

最近、なぜかコイシーケはミフィーシーリアの部屋、すなわち第六の間で朝食を食べる事が多い。

今日も朝食の時間に第六の間を訪れたコイシーケは、そのままミフィーシーリアと一緒に朝食を食べていた。
リーナなどは、この状況を歓迎しているようだ。

「私が起こしに行かなくても、自分で起きてくれるからとつても助かるわ」

と、しみじみと零していた程である。

どうやらコイシーケも朝が強い方ではないようだ。その彼が早起

きしてまで自分のところに来てくれるのは、ミフィーシーリアとしても嬉しかった。

例えその前日の夜に、他の側妃の部屋を訪れていたとしても。

現時点ではまだ正式な側妃ではないミフィーシーリアの元に、ユイシークが夜に訪れる事はない。

そもそもユイシークは王だ。王が次代の王を成すため、側妃の元へ訪れるのは義務と言つてもいい。

それぐらいの事はミフィーシーリアにも理解できる。
もちろん、ユイシークが他の女性と一緒にするという事に対して、何とも思わないわけではない。

だが、それでも朝には自分の元へ訪れてくれる事が単純に嬉しい。ユイシークとしてもその辺りは気を使つていて、必ず朝湯に浸かり、服も着替えて夜の名残を残さないようにしているようだった。
それに、なぜかミフィーシーリアは他の側妃たちに、どうしても嫉妬めいた感情が沸いてこないのである。

まだ見ぬ第三側妃を除いて、他の側妃たちには色々と世話になつてゐるし、ミフィーシーリアは彼女たちに対しても悪い感情を抱く事ができない。

最近では、あの方たちの元へ訪れるのなら仕方ないか、と考え思えてしまつぐらいたつた。

とはいっても、まったく問題がないわけでもない。

ミフィーシーリアはユイシークよりもずっと朝が弱い。だからといって、ユイシークが尋ねてくる時間に寝ているわけにもいかず。

毎朝早くに起床するのは、ミフィーシーリアにとつては結構大変な事なのであつた。

やがて食事を終えたユイシークが立ち上がり、ミフィーシーリアも彼に合わせて立ち上がる。

「よし。じゃあ、行つて来る。皿になつたら中庭でな
「はい。いつてらっしゃいませ」

まるで新婚夫婦のよつなやり取りを交わし、第六の間の入り口の
ところで別れる一人。

そんな二人をメリアは背後から微笑ましそうに見詰めていた。

「やういえば、お聞きになりました？ 新しい側妃様のお話」

「ゴイシークとの今朝のやり取りを思い出していたミフイシーリア。
彼女の耳に令嬢の一人のそんな言葉が届き、びくつと小さく身を震
わせる。

「ええ。なんでも取り立てて見るとこのない、とても地味な方だ
とか」

「わたくしもそのように聞きましたわ」

「わたくしは、とある貧乏貴族が結納金田町に娘を差し出したと

……

まさか本人が田の前にいるとは思つてもいない令嬢たちは、口々
に勝手な事を言い合つてくすくすと笑い合つ。

「そんな方が側妃として選ばれるのなら、わたくしにもその可能性
があるのではなくて？」

「そうですね。ですが、それはわたくしも同様でしてよ？」

「ですが、陛下はなぜ、そのよつな者を側妃として選ばれたのでし
ょう？」

「あり、わつと眞まぐれでは『わざこません』とへ。」

と、更に笑い募る令嬢たち。さすがにミフィーシーリアもこれ以上聞いているのは気分が良くないので、一言告げてこの場を去るうとした時。

「おや、ミフィーシーリア様ではありますか」

「お？ ホントだ。嬢ちゃんじゃねえか」

と、背後より聞き覚えのある声が彼女の名を呼んだ。

ミフィーシーリアが声の方を振り返れば、そこには想像した通り連れの姿。

と同時に、それまでざめいていた令嬢たちの笑い声がぴたりと止んだ。

「ケイル様。ジェイク様」

連れだって中庭にやって来たケイルト・ジェイクに、ミフィーシーリアは頭を下げる挨拶する。

「ミフィーシーリア様。我らに頭を下げる必要はありません。既にあなたの方が我らより」

「そうそう。俺たちとあんたの仲だろ？ もつと気楽にな？」

自分の台詞を遮ったジェイクに、ケイルは露骨に嫌な視線を向けるが当のジェイクは涼しい顔で受け流す。

「そつは仰られますが、そういうわけにも参りません。それにいくら親しくても、最低限の礼儀というものがあります」

「つむ。ミフィーシーリア様の仰られる通りだ。おまえは自由すぎる。少しは反省しろ」

「ちえ」

二人から齧められ、ジョイクは露骨に顔を齧めた。
そしてそのまま歩みを進めてミフィーシーリアに近づくと、顔を近づけて耳元でそつと囁いた。

「あれからあいつに泣かされていいか？　もし、また泣かされるような事があれば俺に言えよ？　またあいつをぶん殴つてヤンかられ」

「い、いえ、そのような事は……」

すぐ近くにあるジョイクの顔。ユイシーク以外にこれほど異性と近づいた経験のないミフィーシーリアは、思わず顔を朱に染めて数歩後ろへ下がった。

そんなミフィーシーリアの様子に、ジョイクは破顔すると再び囁く。ただし、今度は先程よりも少しばかり大きな声で。

「やつぱ、いいな、あんた。どうだ？　あんないい加減な奴はひとつと見限つて、いつそのこと俺の嫁にならないか？」

「は……はあ……つべ、えええつー？」

思いもかけない事を言われて狼狽するミフィーシーリア。背後の令嬢たちが俄にざわざわとざわめき出しが、それに気づく余裕もない。狼狽えたミフィーシーリアとざわめく令嬢たちに、ケイルが顔を齧めながらも助け船を出す。

「戯れるのもそこまでこしら。見ぬ、ミフィーシーリア様もおまえの冗談にどう対応していいか困つておられるではないか

「えー？　俺は別に冗談じゃ……ああ、そうか」

ジョイクはミフィーシーリアの背後の令嬢たちにひりひりと皿をやつ、

ケイルが何を言いたいのかを察した。

「まあ、いいや。とにかく、何か困った事があつたら俺に言ひなよ?
力になんぜ?」

「では、失礼します」

ジョイクは楽しげに手を振つて。ケイルは礼儀正しく頭を下げて。
ここに現れた時同様、一人は連れ立つて中庭を後にした。
立ち去る二人の背中に頭を下げて見送つたミフィーシーリアは、自
分もこのまま立ち去るつと想つ、背後の令嬢たちに一言告げよつと
振り返る。

途端、令嬢たちがあら浴びせられる鋭い視線と、質問の数々に思
わずたじろいだ。

「ミフィーシーリア様と仰いましたわね? あなた、ジョイク様やケ
イル様とはどのようなご関係でして?」

「本当。お二人ととっても親しそうに。しかも……」

「先程のジョイク様のあれ……あれって、もしかしなくても求婚で
すわよ……ね?」

咎めるように。羨むように。探るように。

様々な意思の籠もつた視線と質問に、ミフィーシーリアは戸惑いつ
つも何とか言葉を絞り出す。

「あ、あの、ジョイク様とケイル様には、以前とでもお世話になつ
て……それ以来、親しくさせていただいているのですが……」

「まさか、先程のジョイク様の求婚……お受けになるなんて言いま
せんよね?」

「あれはケイル様も仰つていたように、ジョイク様の冗談です。私
に本気で求婚するわけがありません」

ジョイクはミフィーシーリアが側妃である事を知っている。そのジョイクがミフィーシーリアに求婚するはずがない、という意味でのミフィーシーリアの言葉だったが、令嬢たちはそうは取らなかつたようだ。

「そうですわよね。今まで浮いた噂の一つもないジョイク様が、あなたのような……あら、失礼？」

「本当ですわ。ジョイク様やケイル様と言えば、今この国で最も勢いのあるお方たち。あのお方たちの妻となれば……」

ユイシークの目に止まり、あわよくば側妃に という考えでこの場に集つた令嬢たちだが、その可能性が極めて低い事は彼女たちも承知していた。

だが、ジョイクとケイルは違う。

身分こそ新興の伯爵とそれほど高いものではないが、先程令嬢の一人が言つたように、彼らの将来は既に約束されているようなものであり、今のカノルドス王国で御三家を除けば彼らこそが最も勢力のある貴族なのだ。

当然、当人たちの意思に關わらず、その挙動は様々な意味で注目されている。

特に年頃の令嬢たちからすれば、いまだに独身で浮いた噂のない彼らはこれ以上ない「売り物件」でもある。

国王であるユイシークは事實上の雲の上の存在。だが、彼らは自分の手が届くところにいるのだ。

令嬢たちからしてみれば、そんなジョイクとケイルと親しげに振る舞う見慣れぬ、しかも辺境男爵という貴族の中では底辺に位置する家の小娘が彼らと親しくするのが我慢できる筈がなかつた。

「ねえ、ミフィーシーリア様？ 言わなくてもお判りと思いますが、

いくらお一人に親しくしていただいているからと置いて、思い上がる
つたりはしていませんわよね？」

「そうですね。あのお一人に釣り合ひには、我が家くらいの家格で
なければ」

「辺境の男爵家程度では……あら、思わず本音が。「じめんなさいね
？」

嫉妬心から嫌味と蔑みを満載した言葉をミフィーシーリアに投げつ
ける令嬢たち。

このあまりの仕打ちに、ミフィーシーリアの背後に控えたメリアの
怒りの臨界点を突破しようとした時。

再び聞き慣れた声がミフィーシーリアの名を呼んだ。

「あ、ミフィだつ！－－ミフィがいたよつ！－－ねえ、パパあつ！
！－－じつじつちあつ！－－！」

明るく無邪気な声に再び一堂の視線が一か所に集中する。
ツインテールの銀髪をふわふわと踊らせながら、勢いよく駆け寄
つて来る一人の少女に。

「コトリ？」

「うんっ！－－こんなにちわ、ミフィつ！－－」

コトリは駆け寄った勢いのままミフィーシーリアの胸に飛び込む。
ミフィーシーリアも飛び込んで来たコトリをしつかりと抱き留める。

「あら？　コトリの今日の格好は……」
「えへへー。似合つ？　ねえ、似合つ？」

「トリは普段、以前アマロー男爵領の村で出会った時のように、少年のような活動的な服装を好む。しかし、今日の彼女はしつかりとした淑女の装いだつた。

「トリの銀髪に映える黒を基調とした細身のドレス。所々に彼女の髪と同じ銀糸で刺繡を施したそれは、とても彼女に似合っていた。よく見れば、耳元と首元にも銀細工の落ち着いた感じのアクセサリーも身に着けている。

「ええ。とってもよく似合っていますよ」

「本当? えへへ、実は今日、お昼にミフィーと会うつて聞いたから、ママとサリィにお願いしておめかしして貰つたんだあ」

嬉しそうに笑い合つコトリとミフィーシーリア。

その様子を思わず啞然とした表情で見詰める令嬢たち。

彼女たちもコトリの事は知つていてる。

正確に言えば、コトリの正体までは知らないが、国王であるゴイシーケを普段からパパと呼び、甘えるように彼と接するコトリは、国王の実子ではないにしても、それなりの血縁関係を持つ少女だと認識していた。

そしてそのコトリが、実際に親しげに接するのはまたもやミフィーシーリア。

先程のジョイクやケイルといい、今度のコトリといい。

令嬢たちは、ミフィーシーリアがどのような存在なのか判断しかねるようになつてしまつた。

辺境男爵家の出身。これは間違いないだらつ。他ならぬ本人がそう言つたのだから。

だがジョイクやケイル、そしてコトリといったこの国でも中心部に近い者たちと実際に親しげに会話するのミフィーシーリアを、単なる辺境貴族の田舎令嬢だとは思えなくなつていたのだ。

令嬢たちが唖然としたままミフィーシーリアとコトリを眺めている

と、不意に周囲がざわめき始めた。

何事かと令嬢たちだけでなく、付近で警備にあたっていた兵士たちまでもが慌てて周囲を見回す。

そして彼らは見る。

中庭に居合させた者たちが慌てて跪き頭を垂れる中を、悠然とこちらに歩いてくる一人の男性を。

取り立てて着飾っているわけではない。人目を引くようなものを携えているわけでもない。

それでもなぜか目を向けてしまう、抗い難い何かを振りまきながらその男性はゆっくりと歩く。

厳しく引き締められた顔と悠然と歩く姿に、絶対者の威厳と風格を纏わせながら。

「……へ、陛下……」

令嬢の一人が思わず零した言葉に、居合させた他の令嬢たちも慌ててその場に跪く。

周囲の兵士たちも武器を掲げ、己が主に向けて敬意と忠誠を表す。そう。

この国の国王であるコイシーカ・アーザミルド・カノルドス1世が中庭に姿を現したのだ。

『辺境令嬢』更新しました。

今週一回目の更新です。いやー、やればできるもんだね?
でも、さつと来週はまた執筆速度が落ちると予想されます。気長にお付き合いでいただけないと嬉しいです。

現在『怪獣咆哮』、『魔獣使い』の順に執筆する予定なので、次の『辺境令嬢』の更新は週末くらいかなあ。

話の方も変なところで切れてるので、自分としても早く続きを書きたいです。

ひょっとすると、執筆順番を変更して『辺境令嬢』を先に書くかもです。
だって、コレが一番書きやすいし。

では、今後もよろしくお願ひします。

中庭を通り過ぎ、王宮の中に入ったところで、ケイルは躊躇を歩く男に語りかけた。

「どこまで本気なんだ？」

付き合いの長い相棒とも言つべき男の突然の言葉。しかし、例え言葉は短くとも、ジョイクはケイルの言いたい事を正確に理解する。

「どこまでも何も、俺は最初から本気だぜ？」

「シークが彼女……ミフィーシーリア嬢を正妃にするつもりなのを忘れたわけではあるまい？」

「もちろん。だけど、まだあの嬢ちゃんが正妃に決まったわけじゃない。ひょっとするとアーシアかサリナあたりが正妃に取まるかも知れねえだろ？ そうしたら、あの嬢ちゃんを降嫁してもらつて俺の嫁にする」

自信満々に告げる相棒に、ケイルは深々と溜め息を吐く。

「限りなく低い可能性だな

「判つてらあ。でも可能性はゼロじゃねえぜ？」

「おまえがそれでいいなら、俺は何も言わん。だが……自棄酒が飲みたくなつたら言え。それぐらいは付き合つてやる

「え？ 僕が失恋することはもう確定？ そりや、いくら何でも酷くね？」

喚き散らす相棒を無視して、ケイルは黙つて歩き続ける。と、それまで騒いでいたジェイクがふと静かになると、今度は彼の方から問いかけて来た。

「そうこうおまえはどうよ？　あの壌ちゃんみたいな女は？」

「む」

その言葉に、ケイルの脳裏にあのあまり貴族の令嬢らしくないあくまでも彼の主觀で良く言えば素朴、悪く言えば地味な、かの少女の姿が浮かぶ。

「確かに妻とするなら彼女のような女性は悪くないな」

普段やたらと群がつて来る見かけは上品で美しいが、腹の中では何を考えているか判らない貴族の令嬢たちよりも、控え目なあの少女ののような女性の方が、自分たちのよつた成り上がり者の伴侶としては相応しかろうとケイルは思う。

「所詮俺たちは野童上がりだ。変に格式にばかり拘る女性よりも、彼女のような女性の方が一緒に生活するのも楽だろう」

「やっぱ、そう思うよな？　確かに俺たちもいつまでも独身ってわけにやいかねえだろうし？　その野童上がりも、今じゃ一国の中心に深々と食い込んでしまったんだ」

「ふむ……だからといって、あの小煩い令嬢たちを妻に迎える気にはなれんのだがな」

「それは俺も同意だ。だからあの嬢ちゃんがいいンじやねえか」

『解放戦争』の際、中立を保つた貴族たちや旧貴族派の生き残りたち。彼らの地位は『解放戦争』後に軒並下げられた。

彼らは今、下がつてしまつた地位を少しでも回復しようと、虎視

耽々と様々な機会を狙つてゐる。

将来この国の武と政を担う事になるケイルとジェイクは、そんな彼らから見れば絶好の獲物に違いない。

実際、彼らの元には毎日のように縁談が持ち込まれている。だからといって、彼らの思惑に乗つてやるいわれもなく、寄せられた縁談は片端から断つてゐるのが現状であった。

「新体制派の新興貴族の中で、年の近い娘がいれば話は早いのだが……」

「そりゃ仕方ねえさ。新興貴族は皆、俺たちと似通つた年齢の男ばかりだからな。娘が生まれて来るのはこれからだ」

彼ら同様『解放戦争』後に新たに貴族となつた者は多いが、そんな者たちの殆どは彼らと一緒に『解放戦争』を駆け抜けた者たちばかりだ。もちろん中には女性もいたが圧倒的に数が少ない。

「新興貴族となつたかつての戦友たちの姉や妹を、伴侶に選ぶのが妥当なところだらうな」

「いつその事、平民から嫁選びをするつてのはどうよ?」「む? 平民からだと?」

野童上がりの自分たちには、案外その方が似合いかもしけないとケイルは本気で考えた。

それにもしも、本当に自分が平民から妻を選ぼうものなら。普段から小煩いあの貴族の娘たちは一体どう思うだらうか。面子が潰れたと騒ぐのか。それともさつきと他に有望そうな男性を探し始めるのか。

思惑が外れて慌てふためくかつての中立派や旧貴族派たちを思つと、何だか愉快な気分になつてくる。

と、同時に。

随分自分もある男の影響を受けたものだとも思つ。

ケイルは内心でそんな事を考えながら、午後からの仕事へと向かうのだった。

その場にいる全員が跪くか頭を下げる中を、コイシーカは悠然と歩を進める。

威風堂々。そんな言葉がぴたりと当てはまるようなコイシーカの姿。

しかし、ミフィーシーリアはそんなコイシーカにどこか違和感のようなものを感じていた。

一体何が？ どこがおかしく思えるのか？

彼女が心の中で考えているうちに、コイシーカはすぐ傍まで来ていた。

途端、騒ぎ出すのは彼女たちの周囲にいた令嬢たちである。

「コイシーカ国王陛下。」のような所で陛下にお皿とかかれると、
わたくしはなんて幸運なのでしょう！」

「政務の合間のご休憩でござりますか？ でしたら、一ひらきにいらしてくださいませ。すぐにお茶など用意させますわ」

「最近、東の街道に野盗が出没するとか。わたくし、恐ろしくて…」
…。とても王都から外へは出られません」

「そういえば、東の方には最近、魔獣も出没するらしいことも聞きました。ですが王都にいれば安心ですわね。なんといっても陛下がおられますもの」

口々に騒ぐ令嬢たち。それらを一切無視して、コイシーカの悠然とした歩みは止まる事はない。

国王の素つ氣ない態度に呆然とする令嬢たちの前を通り過ぎ、コイシーカが目指すのはミフィーシーリアとコトリの元。

田の前まで来た国王に、ミフィーシーリアはペニリと一礼。対して「トリは嬉しそうに彼の腕にぶら下がる。

コイシーキは楽しそうにコトリの頭をしきり撫でると、次いで穏やかな笑顔をミフィーシーリアへと向けた。

「待たせたか?」

「いいえ、それ程でもありません」

対してミフィーシーリアもまた、コイシーキに笑顔を向ける。

「……え?」

「……そんな……」

「……」

その時、周囲にいた令嬢たちは見た。

それまで何一つ華やかなところのない、平凡で地味な辺境貴族の娘だとばかり思っていた少女。

家柄、家格、血縁、財産など、特筆すべきものは何も持たない單なる小娘。

自分たちよりも明かに格下な、取るに足らない令嬢とも呼べないような令嬢。

そう思っていたミフィーシーリアが、コイシーキと共に立っているだけで、まるで違う人間のように変化した。

まるで薔だつた花の花弁が一斉に開いたかのように。

まるで天から差し込んだ光が彼女だけを照らしているかのように。まるで地味な蛹から美しい蝶が羽化したように。

コイシーキに向けて嬌^{たお}やかに微笑むミフィーシーリアは、それまでの取るに足らない地味な存在ではなく、見る者の目を引きつけて止まない艶やかな女性へと変貌した。

呆然とする令嬢たちの見詰める中、ミフィーシーリアとコイシーキ、

そしてコトリは実際に楽しそうに会話を交わす。

まるで本当の家族のよう。

国王や貴族の令嬢ではなく、単なる市井の仲の良い親子の親子と呼ぶにはコトリの年齢が少々高すぎだが、よつて。寄り添つて佇む三人は、他者を寄せつけないほのぼのとした雰囲気を醸しながら。

「あ、あの、陛下……」

それでも令嬢の一人が、何とか勇気を振り絞つて声をかけた。途端、コイシーケから冷たい瞳で見詰められ、その冷たい温度に身を竦めながらも何とか言葉を続けた。

「そちらの方は……？ 是非とも、わたくしどもにこ紹介いただけませんでしょうか……？」

コイシーケは彼女とその背後による令嬢たちを一瞥すると、にせりと口角を歪めてミフィーシーリアの肩を抱き寄せた。

「 あやつ……」

突然肩を抱かれて小さく悲鳴を上げるミフィーシーリアを無視して、コイシーケは淡々と告げた。

「そなたも噂には聞いておらひ。この者が余の新たな側妃であるミフィーシーリア・アマローだ」

ミフィーシーリアの耳元に口を寄せ、そつと囁くコイシーケ。彼はミフィーシーリアも挨拶しろと促した。

「た、只今シークさ……、いえ、陛下よりご紹介いただきました、ミフィーシーリア・アマローでござります。あ、あの、側妃と言わればしても、まだ正式な側妃というわけではなく……そ、その、黙つていて申し訳ありません……」

真っ赤になりながら、最後は消え入りそうな声で改めて名乗るミフィーシーリア。

そして、噂の新しい側妃に、周囲から自然と視線が集まる。好奇を含んだ数々の視線。しかし、その殆どはミフィーシーリアにとつて不快なものではなかつた。

側妃という立場を必要以上に表に出す事もなく、高い気位を振りかざす事もなく。

慎ましやかにそつと国王の横に寄り添つて立つミフィーシーリアは、好意的に迎え入れられたと言えた。

中には赤くなりながら、ぼうつとミフィーシーリアを熱く見詰める兵士の姿もあつた程だ。

もちろん、中には嫉妬の含まれた視線もあつたが、これは仕方のない事だろう。側妃という立場はやはり特別なのである。

そんな中で、それどころではない者たちもいた。

それはコイシークたちの周囲にいた令嬢たちである。

彼女たちは、先程の自分たちの仕出かした事を真つ青になつて悔していた。

いくら知らなかつた事とはいえ、なおかつ、正式な側妃ではないとはいえる。

あからさまにミフィーシーリアを侮辱した彼女たちは、どのような罪に問われるのか気が氣でなかつたのだ。

ミフィーシーリアに、彼女たちを罰しようという気持ちは無論ない。だが、そんな事を知らない彼女たちは身を震わせる。もしも、自分が側妃だったら。

そしてそんな自分を面と向かつて侮辱する者がいたとしたなら。

国Hであるゴイシーグヒ、その者を罰するみつば必ず施行するだ
ら。

自分もリハスル筈だから、ミフイシーリアもきっとハナツするに違
いない。

その考えに落ち込んでしまつた令嬢たちが、そこから中々抜け出
せず。

そのため令嬢たちは来る筈もない断罪に、これからじばりく震え
ながら暮らす事になるのだった。

震えながら逃げ出すように中庭から退場した令嬢たちに首を傾げ
つつも、コイシーグヒミフイシーリア、そしてコトロシマサウヘツと
中庭を歩き始める。

「あー、もー、今日はこのまま仕事なんかほっぽり出して寝ねても
してー」

「うんうん、コトロもパパと一緒に寝ねるーー！　ね、ミフイも
一緒にお寝ねしよ？」

「だめですよ、コトリ。シーグ様はこの後も大切な政務があります。
お寝ねなら私が傍にいますから。ね？」

「えー？」

あかうたまに頬を膨らませて不満を表すコトリ。だが、次の瞬間に
にはこわっと表情が変わり、元やかな笑顔をミフイシーリアに向
ける。

「パパと一緒にないのは詰まらないけど、ミフイがこころくれるの
ならない。ね、ミフイのお部屋でお寝ねしていい？」

「ええ。いいですよ」

「じゃあ、俺も俺も。俺もミフイの部屋で寝ねしていいか？」

「シーク様？」

まるで子供のように自分を指さしながら、ヨイシークを、ミフィーシークは敢えて厳しい表情で睨み付ける。

ヨイシークは先程のコトリのように不満を露にするものの、じつとミフィーシークが睨み付けたままでいると、すこしこと前言を撤回する。

「ちえ、仕方ねーなー。我慢して仕事をするかー」

「それが当たり前です」

「くそ。まるでリイみたいな事を言いやがる。それにしても……」

ヨイシークは改めて、自然体で振る舞つ! ミフィーシークへと目を向ける。

「ようやく固さが取れて、自然に笑えるよになつたな」

「え、あ……そ、そうでしょうか?」

「ああ。やっぱりおまえはやっぱり、そりやつて笑つていた方がいい

い
「あ……」

途端、熱を持ち始めた自分の頬を、ミフィーシークは両の手で慌てて押さえる。

そしてこの時に至り、ミフィーシークはようやく先程感じた違和感の正体に気づく。

先程感じた違和感、それはあの時のヨイシークは王だったからだ。ミフィーシークは王としての彼を、あの時初めて見た。

威厳を纏い、堂々と振る舞うヨイシーク。

しかし、ミフィーシークにはそんな彼がどうしても作り物じみて見えたのだ。

子供のように笑い、振る舞い、ふざけ、時に悪戯に手を焼かされる。

それこそが、ユイシークの本当の姿だと知っているから、ミフィーシーリアは先程のユイシークの態度に違和感を感じたのだろう。もちろん、彼が王であるのは事実であり、時にその仮面を被らなければならぬのは理解している。

そして、本当に彼が気を許せる相手の前でのみ、彼はその仮面を外して本来の彼へと立ち戻るのだろう。

そんなユイシークが、自分の前でもその本来の姿を見せてくれるのがミフィーシーリアは嬉しい。

それならば。

それならば、自分は彼がいつでもその仮面を外せるように。彼が先程も言ったように。

彼が望む限り彼の傍で微笑んでいようと、ミフィーシーリアは心中でそつと決心した。

『辺境令嬢』 更新。

やはりと言うか、何と言うか。『怪獣咆哮』がなかなか進まないので、こちらの更新が先になりました。

3話ほど続いた一連の話もこれで一区切り。次からはこれまで顔を出していない第三側妃の話になると思います。

とはいって、既に皆さんお気づきの事だと思いますが、実は第三側妃は既出でして。そうです、あの人人です。やっぱりバレバレですよねえ。

第三側妃の正体に気づいている人は挙手！

17・侍女は見た

いい匂いが立ち籠める、ここは後宮の厨房。最近、メリ亞は手が空く時間を見繕つては、ここに通りよじになつていた。目的はもちろん、厨房にこるアミリシアに各種の料理を齎つただ。

「随分上達しましたね、メリ亞さん」「本当にですか?」

アミリシアに料理の際の手際やその手腕を讃められ、メリ亞は笑顔をアミリシアへと向ける。

「でも、私の料理が上達したのなら、それはアミリシアさんの教え方が上手いからですよ」「あらあら、こんなおばさんを讃めたって何も出ませんよ?」「えー、おばさんって誰の事です? アミリシアさんはお若いじゃないですか」

和やかな会話を交わす二人。

だからメリ亞は気づかなかつた。彼女の周囲にいる料理人たちやその下働きなど、厨房で働く人々が時々メリ亞に何ともしょっぱい視線を向けている事に。

この時のメリ亞はまるで気づいていなかつたのだ。

お茶やそのお茶受けの菓子などを載せた台車を押しながら、メリ

アは上機嫌に後宮の廊下を歩いて行く。

今日、アミリシアさんに教えて貰つた料理、今度お嬢様に作つてあげようかな？

そんな事を考えながらあるいていたメリア。その彼女の視界の隅になにかがちらりと掠めたような気がした。

「あれ？」

思わず歩みを止めたメリアは、思わずそちらへと視線を向ける。窓と中庭 先日ミフィーシーリアとコイシーケ、コトリが散歩した王宮の中庭とは別物 を挟んだ向かいの廊下。その柱の一本の影で何かが揺れていた。

「あれは……」

それがメリアには服の裾のように見えたのだ。

あの廊下は確かに、かつてこの後宮にて追い出された側妃たちが使っていた部屋がある棟へと続く廊下だつたと聞いている。つまり、あの廊下を使用する者は、今ではあまりいない筈なのだ。だとすれば、あそこにいる者は誰で、何の目的があつてあの場所にいるのだろう？

ここは後宮である。

当然警備は厳重で、そこかしこに後宮騎士隊の制服を着た女性騎士の姿も散見される。

そんな後宮で人目を憚るよつに柱の影に隠れるよつにしている何者か。

不審者が後宮に忍び込んだのでは、という考えがメリアの脳裏を駆け抜けた。

誰かを呼ぼうかと思ったが、不幸にもすぐ近くに警備の騎士の姿はなく。

かと言つて騎士を呼ばうと声を出せば、隠れている何者かにもその声は届いてしまうだろう。

どうしたものかと逡巡することしばし。メリアはそれが誰か自分の目で確かめる事にした。

もしもあそこに潜んでいる者が不審者であつたなら。

それはメリアの主人にして愛すべき妹分でもある者と、その親しい者たちにとつて驚異以外の何者でもない。

ならば。

メリアは台車をその場に置き捨て、小走りで廊下を回り込む。途中、有事の際のためにスカートの下に忍ばせた「粉碎くん」メリア命名の母から贈られたメイスに、そつと手をやつてその感触を確かめる。

廊下を回り込み、不審者が潜んでいると思われる柱が見える場所まで来ると、メリアは物陰から慎重に顔を出して問題の場所をそつと伺う。もちろん、両手で「粉碎くん」の柄をぐつと握り締めながら。

そして彼女は見た。

その場にいるのだ誰なのかを。

加えて言うなら、そこにいたのは一人ではなく二人であり、その二人ともがメリアがよく見知った人物たちだったのだ。

突然部屋に飛び込んで来た者に目を白黒させるミフィィシーリア。彼女は彈かれるように呼んでいた書物から顔を上げると、部屋の入り口で荒い息をしている己の侍女をじつと見詰めた。

「ど、どうしたの、メリア？」

「お、お嬢様っ！！ わ、わ、わわ、私、大変なものを見てしまいましてっ！！」

「大変なもの？ それよりも、私はそれの方が気になるわ

ミフィイシーリアの視線は、メリアが両手でしっかりと握り締めているメイスへと向けられていた。

それに気づいたメリアが慌てて「粉碎くん」を背中に隠す。なぜメリアがメイスなんぞを持つていたのか納得しかねるが、ミフィイシーリアは彼女が何を見たのかを問う事にした。

「それで？ メリアは何を見たの？」

「へ、へへ、陛下が……」

「シーク様？ シーク様がどうしたの？」

また彼が何らかの悪戯を仕掛けようともしているのだろうか。国王の奇行に慣れてきたミフィイシーリアは、その程度にしか考えていなかつた。

「ユ、ユイシーク陛下が廊下の影で……そ、その……き、キスをしていたんですっ！！」

真っ赤になりながら告げるメリア。

その言葉に衝撃を受けなくもないミフィイシーリアだが、まあ、そんな事もあるだろうと軽く考えていた。

なんせかの国王陛下の元には、自分以外にも四人の側妃がいる。その四人の内、三人を良く知るミフィイシーリアから見ても、かの方々たちはとても魅力的な女性ばかりなのだから。

年よりも童顔だが、どこか大人の女性を匂わせる可憐な第一側妃のアーシア。

貴族の令嬢の見本と言つても過言ではない、豪奢な美女である第二側妃のサリナ。

落ち着いた物腰と冷静で知的な印象の美女、第四側妃のリーナ。

そんな側妃たちとユイシークが、毎夜毎夜逢瀬を重ねている事を

知っているミフィーシーリアからしてみれば、廊下の影で彼女たちの誰かとキスしていたぐらいで騒ぐ程のことではないのだ。

もちろん、毎夜逢瀬を重ねる他の側妃たちに嫉妬していないのか、と問われれば否ではあるものの、その辺りの事は最近ではすっかり割り切つてしまっているミフィーシーリアであった。

だが、次に彼女の侍女から発せられた言葉は、そのミフィーシー

リアの頭を一瞬で真っ白にする程の衝撃を備えていた。

「そ、その相手が……後宮騎士隊の隊長の……ま、マイリー様だつたんですっ！！」

マイリー・カークライト。

いつも爽やかな笑顔を浮かべ、誰にも穏やかに接する人当たりの良い人物で、女性と見紛うばかりのその美貌に、マイリーに夢中の侍女や女性騎士は数多い。

もちろん、その事はミフィーシーリアだって知っている。知つているが……。

「…………え？」

そのマイリーがなぜ、コイシーケとキスを交わしていたのか？
ミフィーシーリアの頭脳は一瞬で混乱に陥った。

そして、彼女の侍女の更なる言葉が更なる混乱を呼ぶ。

「ひょっとして陛下って……両方イける方なんですかね…………？」

思わずきょとんとした顔で尋ね返すミフィーシーリア。

「ですから両方……女人はもちろん、男人の人でもイケるクチなんかと……」

「…………え？」

「そういうえば陛下、ジェイク様とかケイル様とかとも、とても親しいですよね……？」

「…………え？」

「それにこの前、修練場で近衛の方たちとの鍛錬の後、楽しそうに語らつておられる陛下をお見かけしたんですよ……皆さん、上半身裸で……」

「…………え？」

「前から私、一部の兵士の人たちが陛下を見る目が、異様に熱いなあ、なんて思った事もあるし……」

「…………え？」

「リーナ様の弟君の、宮殿医師見習いのジークント様も、陛下の事を義兄さんと呼ん隨分と親しいそうですし……」

「…………」

くたり。

不意にその身体を脱力させて、その場で真っ赤になりながらへなへなと座り込むミフィーシーリア。

「お、お嬢様つ！？ だ、大丈夫ですかつ！？ だ、ただただ、誰かいませんかつ！？ お、お嬢様が……ミフィーシーリア様がつー！」

響き渡るメリアの声。

その声を遠くに聞きながら、許容量を超えた想定外の情報と熱量に、ミフィーシーリアの頭脳はふすふすと煙を上げながら強制的な休止状態に入り込んだのだった。

ばたばたと雪崩れ込むように第六の間へと殺到する後宮騎士隊。もちろん、その先頭に立つているのは隊長であるマイリー・カークライトの人だ。

「どうしました？ ミフィイシーリア嬢？」

優雅に。爽やかに。

くたりと座り込んだミフィイシーリアの傍らに跪き、そつと彼女へ手を差し伸ばすマイリー。

その流れるような洗練された動作に、今の状況を忘れて思わず見入ってしまうメリ亞と、マイリーの部下である女性騎士たち。

「何があったのですか？」

ミフィイシーリアの背中を両手で支えながら、マイリーの視線はメリアへと向けられた。

「えっと、そ、その……」

まさか本人に正直に言つわけにもいかない。

あなたと陛下のキスシーンを目撃して、そこから陛下の両刀疑惑が持ち上がった、などとは。

言葉を濁し続けるメリ亞に、マイリーは軽く溜め息を零しつつも、部下たちに矢継ぎ早に指示を出す。

「取りあえず、ミフィイシーリア嬢は寝室に運んでください。そして誰か宮殿医師のシバシイ殿に連絡して、至急この部屋まで来ていただいください」

優雅さと爽やかさを決して崩すことなく出したマイリーの指示に、部下の女性騎士たちが素早く行動し始める。

おそらくこの事はユイシークの耳にも入るだろ。そしてミフィー・シーリアが倒れた事を知った彼は、遠からずこの部屋を訪れるに違いない。

その時、どうやって説明したものか。

メリ亞はそれを考へると、胃の辺りが重くなつたよつた気がした。

「単なる知恵熱じゃな。心配する必要はあるまいよ」

第六の間に現れた老域に差しかかった男性は、弟子であるジークントを従えてミフィー・シーリアの寝室に入ると、すぐに寝室から出て来てここに集つて居る面々にそう告げた。

今、この第六の間にいるのは、最初からここにいたメリ亞とマイリー、そして、やはりミフィー・シーリアの事を聞いて慌てて駆けつけたユイシークと、彼と同じようにミフィー・シーリアの事を心配して集まつた三人の側妃たち。

彼らは老域の男性の言葉を聞き、一様に安堵の溜め息を零した。

老域の男性　宮殿医師のシバシイ・ガーラムは、そんな面々を眺めて面白そうに顔を歪めた。

「なんじゃい、なんじゃい。雁首揃えて安心しきつた顔を晒しそうて。お主ら、そんなにあの嬢ちゃんが大切か？」

にやにやとした笑いを隠す事もしないシバシイ。そんな彼にユイシークがぶすつとした顔をしながら言葉を発した。

「『苦労だったな、シバシイのおっさん。もう帰つていいぞ』

「偉そうに言うでないわ、小僧。それが恩師に対する言葉か？」

「恩師つたつて、俺とアーシイが子供の頃の話だろ?」「いつの事だろ?が恩師は恩師よ。そんな事も判らんからいつまでも貴様は小僧なんじゃ」

飄々と笑うシバシイと、苦虫でも噛み潰したかのようなコイシーグ。

しかし、シバシイの言葉は事実である。彼はコイシークとアーシアの幼少時の家庭教師を務めた人物でもあるのだ。

「それで、シバシイ先生? ミフィさんは本当に大丈夫ですか?」「おう、さつきも言つたが单なる知恵熱じやよ。心配する事は何もないわい。それよりサリナよ……」

シバシイの目がきらりと鋭い光を浮かべた。

「相変わらず立派に育つとるのう。どれ、揉んじやろ」

すつとサリナのたわわな胸の膨らみに手を伸ばすシバシイ。その手を何事もないかのようにぱしりと払いのけるサリナ。

「相変わらずお盛んですね、シバシイ先生?」

「当たり前じや。儂が医者になつたのは、女子のおなごのぴちぴちとした肌を見たい、触りたいと思ったからじゃしのう。幾つになつとこの熱い想いだけは消える事はないわい」

「ですがお生憎様。これに触れてもいいのはシーケさんだけでしてよ?」

サリナは両手で胸の膨らみを、挑発するかのように下から抱えて持ち上げる。

衣服の上からでもふるりと揺れるのが判る柔らかなそれに、シバ

シイの目つきが一瞬鋭くなる。そしてその視線はアーシアやリーナへと向けられた。

「ほ、ボクもダメだよっ！　いくらシバシイ先生でも、ボクもシイくんじゃないとダメだからっ！」

「私も遠慮するわ。例えそれが弟の大恩ある師匠であつてもね」

咄嗟に我が身を守るように自分自身を抱き締めるアーシアと、冷たい一瞥をくれるリーナ。

そんな彼女たちを順に見回したシバシイは、不意に穏やかな表情になつてユイシークを見る。

「ふむ。仲良くやつておるよつじやな、小僧。その辺りだけは及第点をくれてやるわ」

「黙れ、おっさん。それから、人の女たちを変な目で見るんじやねえ。で？　ミフィイとは話せるのか？」

ユイシークがそう語りかけたのは、シバシイではなく、彼の背後に控えていたジークントである。

「ええ、義兄さん。ミフィイシーリア様なつもつ氣づかれています。話をされても大丈夫ですよ」

「そつか。なら、メリア」

「は、はいっ！」

「ミフィイと話がしたい。呼んで来てくれ」

「は、はい！　か、かかか畏まりましたっ！」

メリアは更に胃が重くなつたように感じつつも、慌てた足取りでミフィイシーリアの寝室へと入つていった。

17・侍女は見た（後書き）

『辺境令嬢』 更新しました。

今回、随分久しぶりな方たちが登場しています。

アミリシアは10話ぶり、そしてリーナの弟のジークントに至っては13話以来だから何と12話ぶりというこの事実。実はジークントはともかく、アミリシアは結構重要人物なんですがねえ。これからはアミリシアの出番もちょくちょく増えてくるのではないか、と思われます。

そして次回、いよいよ第三側妃の正体が判明します。

え？ もう誰だか判つている？ ままま、そう仰らすにお付き合いいただけると作者がとても喜びます。

次回もよろしくお願いします。

おずおずと寝室から出てきたミフィーシーリアは、一度第六の間に集っていた人々を見回すと深々と頭を下げた。

「申し訳ありません。皆さんは心配をおかけしました」

彼女の様子からどうやら問題なやうだと判断した一同は、一様に笑みを浮かべた。

「それで？ どうして知恵熱なんか出したんだ？」

誰もが思っているであろう事を、代表してコイシーグが問う。

「そ、それは……」

ミフィーシーリアはけらつと横田で背後に控えているメリアを一瞥すると、そのまま言葉に窮して黙り込んでしまう。

その際、彼女の視線はコイシーグとマイリーの間を絶えず往来していた。

「どうした？ 何か言えないような事でもあるのか？」

コイシーグから追求を受けても、俯いて何も言わないミフィーシーリア。

時折少し顔を上げてはコイシーグとマイリーを交互に見詰め、頬を赤く染めてまた俯く。

そんなミフィーシーリアの様子に、コイシーグは怪訝な顔で首を傾

げる。

「まだ体調が良くないのか？ それに何か、さつきから俺とマリイをちらちらと見ちゃ顔を伏せてるが……」

「あ、い、いえ、体調は大丈夫です！ 大丈夫です……が……」

「何か言いたい事があれば言ってみる。ここに居るのは全員身内みたいなもんだ。礼儀や遠慮は必要ない 若干一名、単なる野次馬と言つうか、ただのスケベ爺もいるがな」

「ほう。それは誰の事じやな、カミナリ小僧」

「誰だろうな？ 胸に手を当てたら判るんじゃねえか？」

コイシーケとシバシイの嫌味の応酬。だが一人の顔には楽しそうな笑みが浮かんでるので、もちろん本心から憎み合つているわけではない。

言つてみれば仲の良い祖父と孫のじやれあいのよつなものだ。周囲の者たちも、これはいつもの事とばかりに精々苦笑を浮かべているぐらいで、特に止めようなどと思つ者はいない。

そして当の二人にしてみても、場の雰囲気を少しでも柔らかくして、ミフィィシーリアが発言しやすいようにしようという配慮からの事なので、その後もぽんぽんと悪意のない嫌味の応酬を続ける。

「………… それでは、お言葉に甘えてお尋ねします」

そんな二人の様子を見て肩の力が抜けたのか、ミフィィシーリアが胸の内をコイシーケに打ち明けようと決意する。
頬を朱に染めたまま。

それでも決意を瞳に宿らせて。

ミフィィシーリアはその言葉を放つ。

「シーク様は……だ、男性も……あ、あああ愛せる方なのでしょう

か？」

しん、と水を打つたように静まり返る第六の間。
そんな第六の間の中で、まるでタイミングを計つたかのよつこ一
斉に動いた者がいた。

アーシア、リーナ、サリナの三人である。

三人は悲しく沈んだ顔、軽蔑したような顔、驚いた顔をそれぞれ
浮かべ、一様にヨイシークから距離を取るよつこじずざざざわつと離れ
た。

「シイくん……シイくんは確かに色々とアレだけど……それだけは
ないって思つっていたのに……」

アーシアはその大きな黒瞳に大粒の涙を浮かべ。

「シーク……墮ちるとこまで墮ちたわね……」

リーナは心底嫌そうに眉を寄せ。

「シークさん……あなたにそのような『趣味』があるつとは……わたくし、全く知りませんでした」

サリナは驚きに目を大きく見開き。

その他にもマイリーとシバシィは面白そうにヨイシークとその側
妃たちのやり取りを見詰め、ジークントぽかんとした表情で立ち尽
くしている。

そんな中、渦中の人の硬直がようやく解けた。

「ち、ち、ちが……っ！……お、俺にそつちの趣味はねえっ……」

俺は女が大好きだつ……」

先程の静寂とは打つて変わり、喧騒が渦巻く第六の間の中にユイシークの叫び声が響く。

そんな喧々諤々の第六の間の中で、一国の王様が女が大好きだと堂々と叫ぶのはどうかなー、とメリアは他人事のような感想を抱いていた。

カノルドス王国において、同性愛はそれほどタブーなものではない。ただし貴族や裕福な商人などの富裕層に限って、という注釈が付くが。

その日を生きるのに精一杯の貧困層や、余裕はあってもそれ程大きなものではない一般の平民の間では、同性愛は忌避される風潮がある。

そして貴族ではありながらも、どちらかといえば平民寄りな環境で幼少期を過ごしたこの場の面々は、やはり同性愛に対してもいい感情を抱いていないようだった。

「そもそも、一体どこから俺が同性愛……というか、男でも女でも大丈夫だなんて話が出たんだ？」

ようやく場が静まつた第六の間で。

何とか誤解を解いたユイシークが溜め息交じりに『フィシーリアに尋ねた。

「え、えと……そ、それは……」

果たして正直に言つてもいいものか。

ミフィーシーリアが再びコイシーカとマイリーをちらちらと見ながら迷っていると、彼女の背後に控えていたメリアが、意を決してミフィーシーリアに代わって切り出した。

「畏れながら陛下。お嬢様に代わり、私が発言しても構わないでしょうか？」

「ああ、許す」

一介の侍女が王に発言を求めるなど、普通なら不敬罪に問われかねないが、ここは良くも悪くも「常識外れ」なカノルドス王国の後宮。

そんな常識、誰一人として気にする者など居ない。

コイシーカから許可を得、メリアは一步前へ出ると真っ直ぐに彼を見ながら正直に告げた。

「私が見てしまったのです。そ、その……陛下とマイリー様が廊下の影で口づけを交わしているのを」

再びしんと静まり返る第六の間。

だが、その静寂は再び破られる。意図せぬ来訪者の手によつて、不意に扉が開けられ、そこから飛び込むように乱入して来た人物が一人。

その様子に、メリアは飛び込んで来たのが誰なのか何となく予測がついた。

なぜならその人物は、いつもこうやっていきなり飛び込んで来るからだ。

「ミフィイが倒れたってほんと……あ、あれ？」

自分に集まる視線の数々。その視線に「トリ メリアの予想通

りの人物　　は、飛び込んで来た勢いをすっかりなくしておどおどとするばかり。

そんなコトリに優しく声をかける人物がいた。

「コトリ？　いつも言つてゐるでしょ？　扉を開ける前には必ずノックをしなさいと」

爽やかさと同時に優しさを併せ持つたその声に、不安そうだったコトリの顔がぱっと喜びに輝く。

「あ、ママー　ママも来てたんだね！」

嬉しそうな声を上げ、コトリが顔を向けた人物は　　マイリー
一だつた。

「…………え？」

それを田の当たりにして、再び凍りつくミフィーシーリアとメリアの主従。

そんな一人の様子を見たユイシークとサリナは、盛大な溜め息と一緒に言葉を吐き出した。

「そうか……おまえたち勘違いしてたんだな…………」

「マリイつてば、また誤解されましたわね」

「あ、それって私のミスかも。思い返せば、初対面の時にマリイの事は後宮騎士隊の隊長としか彼女に紹介してないもの」

美しいラインを描く顎に入差し指を当てながら、そう告げたのはリーナだ。

ミフィーシーリアとメリアがぽかんと見詰める先で、マイリーは口

トリを優しく引き剥がすと改めてミフィーシーリアへと一礼。

「では改めまして、ミフィーシーリア嬢。私がカークライト侯爵家の長女であり、後宮騎士隊の隊長であり……そして、第三側妃でもあるマイリー・カークライトです」

と、マイリーはいつも爽やかな笑顔でミフィーシーリアに告げたのだ。

あまりの事に、またもや固まるミフィーシーリアの頭。
だが、それでもやがて徐々に再動し始め、とある事柄が彼女の脳裏に閃いた。

「も、申し訳ありません……！」

突然、ミフィーシーリアがマイリーに頭を下げる。

「どうしました、ミフィーシーリア嬢？」

困惑しているのか、していないのか。相変わらずの笑顔で尋ね返すマイリー。

「あ、あの……知らぬ事とはいえ、マイリー様の事をすっかり……」「ああ、その事ですか。気にしないでください。私はじょっちゅうつ男性に間違えられますから」

男物の騎士服と腰に剣。髪も短く身長も女性にしてはかなり高い。そして中世的ながらも甘い容貌とくれば、誰もが彼女の事を初見で男性と見間違う。

「ですがマイリー様……」

「何でしょ、」

「そ、そのよろじいのですか？ 側妃でありながら後宮騎士隊の隊長などと、いう職に就いて……」

「構いませんよ。リイだつて宰相補佐兼侍従長といつ職に就いてますし」

「そういう意味ではなく……」

本来、正妃や側妃は守られるものだ。なのに、マイリーは側妃でありながら守る側、それも責任者というべき立場にいる。

その事がミフィーシーリアには気がかりだった。

だが、それも次のマイリーの言葉であっさりと氷解する。

「実は私、シーケやアーシィと同じ異能持ちなんです。そして私の異能は、ひと『守る』という事には極めて相性がいいのです」
「異能……そう言えば、先程コトリがマイリー様をママと呼んでいましたが……では、マイリー様の異能とは」

『疑似生命』の異能。

かつてケイルから聞かされたコトリたち使つかいを生み出す異能。ミフィーシーリアの思い当たった事を悟ったのか、マイリーはミフィーシーリアに向かつて一つ頷く。

「ええ、コトリたちは私の『子供』です」

そう言って傍らのコトリを抱き寄せ、その頭を慈しむように撫ぜるマイリーと、安心しきつて身を委ね、嬉しそうに皿を細めるコトリアの姿は、本当の母子のそれに決して劣る事はない。ミフィーシーリアは幸せそうな一人を見ながら思つたのだった。

『辺境令嬢』更新しました。

ようやく明かになった バレバレだったとも言つ 第三側妃の正体。そして両刀疑惑の晴れたユイシーク（笑）。

そういえば、前回の更新の後、またもやお気に入り登録が幾らか減りました。

あれつてもしかして、ユイシークにそっち方面の趣味があると思われたからでしょうかね？

それともシバシイ先生のエロ爺ぶりがいけなかつたのか。
いやね、好きなんですよ、エロ爺つて。老いてなお盛んつて男として最高じゃないですか？

自分も将来老衰で死ぬことがあれば、「あの人はいい人だつたね」と言われるより、「あの人はエロい人だつたね」と言われながら死にたいものです。いや、本当に。

ちなみに。自分、長生き願望ありません。60代後半から70代前半で、ボケて子供に迷惑かける前にぱつくり逝きたいと思っています。

では、次回もよろしくお願ひします。

お気に入り登録が減つた最大の理由は、単純に面白くなかったつてのが一番ありそうだな……

19・側妃たちのお茶会（前書き）

えー、今回、ちょっとばかり生々しい表現があります。國王と側妃たちの「愛の肉体言語」についてです。
ご注意ください。

後宮騎士隊の隊長であるマイリーが、実は第三側妃だと判明した日から数日後。

ミフィーシーリアたちは今、王城の中庭でお茶会を開いていた。中庭の一角にある東屋を占領し、香り高いお茶と香しいお茶請けの焼菓子を楽しむミフィーシーリアたち。

今この場に集っているのはアーシア、サリナ、マイリー、リーナ、そしてミフィーシーリア。

後宮の五人の側妃全員が一同に会して、一見優雅にお茶を楽しむ姿は、中庭に居合わせた者たちの目を嫌でも引いた。

ちなみに、メリアを始めとした数人の侍女もこの場にいるものの、側妃たちを熱心に見詰める者たちからすれば、彼女たちは背景と大差ない。

「おお、側妃様方が一同に会しておられる……」

「うむ。これは思わず目の保養ですね。ですが……」

「ん？ どうされた？」

「いや、五人目の方は……彼女は何者でしょつか？」

現時点では正式に側妃として発表されていないミフィーシーリアを知る者は少ない。

もちろん、国王が新たな側妃を後宮に迎え入れた事は既に知れ渡つており、そのお披露日の招待状も各貴族の元に徐々に届き始めている。

だがそれは、「国王が新たな側妃を迎える」という情報を得ているのであって、それがどこの誰かまで知っている者は極少数のみ。

しかし、新たな側妃が選ばれた事を知り得てさえいれば、そこからミフィーシーリアの事を推測するのは左程難しくはないだろう。

「では、あの方が五人目の側妃様であられると？」

「おそらくは。でなければ、四人の側妃様方と、ああも親しくは振る舞えまい」

「なるほど。ではやはりあの方が五人目……しかし……」

「ああ……」

「他の四方に比べると、あの方は何と言つか」」

「……地味……だな……」

「……ええ、地味、ですな……」

居合わせた者たちの話す声は、東屋のミフィーシーリアたちまでは届かなかつたものの、彼女たちから少し離れた所で控えていたメリアには聞こえてしまった。

身内の欲目を差し引いても、ミフィーシーリアの容姿は十分整っているとメリアは思う。

だがしかし。

今、この場にいる他の四人と比べると、どうしてもミフィーシーリアの容姿は劣つて見えてしまつのも事実。

（といつよつ、この場合は比べる相手が悪すぎよねえ……）

と内心で思いつつ、メリアは無礼にならない程度に四人の側妃たちを見回す。

天真爛漫で可憐なアーシア。

高貴でありながらも高飛車などいのないサリナ。

爽やかな春風のようなマイリー。

知的な大人の魅力を振りまくリーナ。

四人の側妃たちは、まさにこの国最高の美姫たちと言つても過言ではないのだから。

慌てたように王城の中庭に足を踏み入れた、数人の若い貴族の令息たちの眼が中庭の一角へと向けられる。

そしてそこに期待した通りの光景があると知り、彼らは揃つて恍惚な表情を浮かべた。

「……本当だつたんだ……」

「ああ……本当に今日は側妃様方が揃つていらつしゃる」

「お、おい、おまえ、声かけてみろよつ！！」

「ば、馬鹿言えつ！　そんな畏れ多い事できるかよつ……」

「なんだよ、情けないな」

「な、ならおまえが声かければいいだろつ！？」

「い、いや……それは……」

「おまえだつて同じじやないか！」

「しかし、一体何を話しておられるのだうつか……？」

「きつと優雅で清らかな会話がなされていいるのだう」

「ああ……きつとそうに違ひない」

と、彼らはしばらく熱に浮かれたようこ、じつと側妃たちを眺め続けたのだった。

普段、王城の中庭に立ち入る者は多い。

しかし、今日は特に人が多いようにミフィイシーリアは感じた。

そしてその理由が自分たち より正確には自分以外の四人の側妃たち にある事も、ミフィイシーリアは理解していた。

今も尚、自分たちに集まる視線の数々。

熱を持つたようなもの、尊敬と恐怖が込められたもの、好奇心が見え見えのもの、そして嫉妬を含んだ冷たいもの。

そして同時に、視線だけではなく様々な囁きが交わされている事

も。

現に先程からどこの貴族や数人の貴族の令息らしき年若い青年たちが、自分たちに向けて熱い視線を向けながら何かを言い交わしているのにも気づいていた。

距離の関係でその内容までは聞き取る事はできない。しかし、それは幸いだつただろう。

ミフィーシーリアにとつても。そして彼女たちを見詰める貴族や令息たちにとつても。

なぜなら、ミフィーシーリアを除いた四人の側妃たちは、こんな会話をしていたのだから。

「ねえ？ 最近、シイくんつてば夜、ちょっと激しくない？」

やや頬を赤らめながら。アーシアが告げた言葉に、ミフィーシーリアを除いた三人が同意を示して首を縦に振った。

「そうですわね。確かにここ最近、シークさんはとっても激しいですわ。昨夜も……」

アーシアに同意したサリナが、昨夜のユイシークとの情事を思い出したのか、頬を染めながらうつとりとした表情で呟いた。どうやらタベコイシークの相手を務めたのは彼女らしい。

「そう言えばそうね。確かにこここのとこひょと激しいかしら？」

「そうですねえ。私もそう思います」

全然優雅でも清らかでもない会話だった。

それどころか生々し過ぎて、ミフィーシーリアにはとてもついていけないような内容だった。

顔を真っ赤にしてあうあうと咳きながら視線を泳がせるミフィーシーリアをよそに、四人の側妃たちの「愛の肉体言語」についての会話は尚も続く。

「相変わらずあいつってば、後ろからが好きよね。この前なんて、立つたまま後ろからされたわ」

「確かに後ろからは多いですわね。わたしはベッドの上でお尻を高く掲げた状態で迎え入れる事がが多いんですけど」

「私は後ろからよりも、上になる場合が多いですね。なんでもシーケに言わせると、弾むように揺れ動く私の胸を下から眺めるのが格別だとか」

「ボクは前も後ろも同じぐらいだけど、よく口を使つようと言われるよ」

「ぐ、ぐくくくく口いつ！？」

「ああ、確かにそれも好きね、あいつ……つて、ちょっと、ミフィイ？」

286

突然素つ頬狂な声を上げたミフィーシーリアにリーナが視線を向けた。

尤も、それは非難めいたものではなく、優しく柔らかなものだったが。

「あ、も、申し訳ありませんっ！… も、想像もできないようなお話の内容に思わず……」

真っ赤になつてしまふと俯くミフィーシーリアに、リーナ以外の二人もまた気遣わしげな眼を向けた。

「人事ではありませんわよ、ミフィイさん？」

「ええ、そうですよ、ミフィイ」

「遠からりゅあ//ミフイちゃんも経験しなくちゃいけない事だしね

最近、側妃たちが自分を親しげにミフイと呼んでくれる事が嬉しいミフイシーリア。

だが、今だけはそれどころではなかった。

「遠からず経験しなくちゃいけない」といつアーシアの言葉が、ミフイシーリアの耳の中で何度も反芻していたからだ。

「あ、あの、アーシア様？ 先程のお言葉はどうこう」

「の問いかけに答えたのは、アーシアではなくマイリーだった。

「あなたは側妃として後宮に来たのでしょうか？ 今はまだ正式な側妃ではないのでシークも夜にあなたの所を訪れたりしませんが、あなたが正式な側妃となつた暁には、彼はあなたの元を訪れます。子を成すために」

それが王と側妃の務めなのですから、と続けるマイリー。

「でも安心して。あいつもあなたにいきなり激しい事はしないわよ
……たぶん……きっと……おそらく……」

自分の言葉に自信がなくなつたか、リーナの声は段々と小さくなつていた。

「り、リーナ様……」

彼女のその様子に、不安が更に募つてくる。思わず他の側妃たちを見回して見れば、誰もがミフイシーリアと眼を合わせようとせず、視線を逸らしてしまう。

そしてミフィーシーリアの脳裏に、遠くない未来にコイシーケと過ごす一夜が思い描かれる。

灯りの量を調整したランプが照らす、薄暗い寝室の中で。互いに吐く息が感じられる程の距離で、じっと見つめ合つ自分とコイシーケ。

やがて彼の腕が伸び、その指先が自分の纏つている夜着の合わせ目をそつと這い回り。

そして緩められた夜着がすとんと床に落ちれば、残されたのは一糸纏わぬ自分の裸身。

裸身となつた自分をコイシーケがそつと抱き寄せて。

そして次に思い描くのは先程の側妃たちの言葉。

立つたままとか、お尻を高く掲げてとか、下からとか、口を使うとか。

その言葉通りの事をコイシーケにされている自分を想像し

「 はうっ 」

ミフィーシーリアは顔といわず全身を真っ赤にさせた、ぽてんと東屋のテーブルに突つ伏した。

良く見れば、今にも頭の辺りから湯気が立ち上りそうだ。

礼儀も作法もぶつ飛んで、はしたなくもテーブルに突つ伏すミフィーシーリアを、他の側妃たちは微笑ましげに見詰める。

「 大丈夫ですよ、ミフィ。何なら、私たちが乱入してお手伝いしても構いませんよ？」

「 ま、マイリー様……っ……？」

マイリーの言葉に思わず頭を上げるミフィーシーリア。

「 あ、あのあの、乱入とは……」

「言葉通りです。あなたとシークが夜を共にする時、私たちが突然雪崩れ込むのです……もちろん、全員裸で」

「あり、それも面白そうですね」

「そ、サリナ様まで……」

見ればアーシアとリーナも満更ではなさそうだった。

「皆様、この冗談ですよ……ね？」

「冗談だと思いたい。冗談だと言つて欲しい。頼むから。そんな彼女の心境を余所に、少し厳しい声が突然サリナから飛んだ。

「とにかく、ミフィイさん？」

「は、はい、何でしょうか、サリナ様？」

じとじとした冷たい眼で見詰められ、ミフィイシーリアの背中を冷たい何かが流れ落ちた。

「わたくし……いえ、わたくしたちは前々から言つていますわね？」

更に増すサリナの迫力に、思わずたじろぐミフィイシーリア。

「わたくしたちの事をいつまで他人行儀に様付けで呼ぶのです？わたくしたちの事は愛称で呼びなさいと、以前にも言つた筈です」

サリナの言葉に、アーシアたち三人も頷いている。

「で、ですが、私如きが皆様を愛称でお呼びするなど……」

「お黙りなさい！」

ぴしゃっと遮られ、ミフィーシーリアは思わず肩を竦める。

「ですが……」

尚も言ご暮るひとしたミフィーシーリアを遮ったのはリーナだった。

「つまり、あなたは田上の私たちに對して失礼だから愛称では呼べないと言つたのね？」

「は、はい……」

「なら、田上の者として……先任の側妃 第四側妃として第五側妃のミフィーシーリア・アマローに命じます」

凛としたリーナの声に、思わず背筋が伸びるミフィーシーリア。

「以後、第一側妃から第四側妃の呼称に愛称を用いる事。重ねています。これは命令です」

「凄いよ！ さすがリイだよ！」

「確かに命令ならミフィイも逆らわないでじょ！」

「そもそも本人がいこと言つてこいるのです。断わる方が無礼というものでしてよ！」

そして口々に愛称で呼んで欲しいとミフィーシーリアに迫る四人の側妃たち。

そんな側妃たちに対し、ミフィーシーリアの出した結論は。

「……せ、せめて愛称に『わん』付けでお許し下せ……」

という実にへたれた妥協案だった。

恥ずかしそうに告げた彼女の様子に側妃たちは一度顔を見合わせ

ると、くすくすと笑いながら彼女の提示した妥協案を受け入れた。

その時ミフィイシーリは俯いていたので気づいていなかつた。

彼女を見る側妃たちの眼が、とても穏やかで嬉しそうなものであつたことを。

19・側妃たちのお茶会（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

本来なら『怪獣咆哮』か『魔獣使い』の方が先なんですが、何となく書きたかったからこちらを先に。で、今回の主張。

綺麗なお姉さんには綺麗な幻想を抱くのです。男という生き物は。それでは、次回もよろしくお願いします。

「あの……少々よろしいでしょつか?」

お互の呼び方でようやくの合意を得て 一部脅迫じみた事が
あつた事は忘れる事にした から、ミフィーシーリアは今まで気に
なつていた事を、集まつて居る側妃たちに尋ねてみる事にした。

「皆様は、もうずっとシーグ様と、その……夜の関係を続けてこ
られたのですよね?」

相変わらず顔を赤くしたまま尋ねる彼女に、他の側妃たちは笑顔
で頷いた。

「そうですわね。シーグさんが即位して……いえ、リイさん以外は
即位前からシーグさんと関係を持つていますわ」

側妃を代表してサリナがそう答える。

「それでは皆様、随分長い事シーグ様と……つ、続いているらっしゃ
るわけですが……御子が一人も生まれていはないのはなぜでしょう?」

『解放戦争』が終結してもう数年。それ以前から肉体的に結ばれ
てきたシークとアーシアたちの間に、一人も子供が生まれていない
事が、ミフィーシーリアはずつと疑問だったのだ。

普通なら、それだけの時間があれば一人ぐらいは生まれてきそう
なものなのに。

「なぜ、と言われてもねえ。こればっかりは運の良し悪しもあるしね」

「ええ、子供は授かり物です。産もううと思ひて産めるものではありますねんしね」

「でも、ミフイちゃんの言う事も尤もだよね。そもそも誰か一人ぐらい妊娠しても良やそなものなのに」

リーナたちも改めて言われて疑問に思つたようだつた。

その後、あれこれと推測してみるも、当然原因など判る筈もなく。自分たちで考える事に限界を感じたリーナが、妥当な案を提示した。

「私たちでいくら考えても埒が明かないわ」

「リイの言つ通りだね。じゃあ、どうするの？」

「簡単な事よ」

アーシアの問いかけに、リーナは腕を組んで自信満々に答える。

「私たちで判らなければ、判る者に聞けばいいのよ」

「それで僕が呼ばれたんだね……」

実姉に呼ばれ、慌てて駆けつけて来たジークントは、呼ばれた理由を聞くと見るからに脱力しながら咳いた。

「申し訳ありません、ジークント様。私が皆様におかしな事を尋ねたばかりに……お忙しかったのではないのですか？」

「いいえ、大丈夫ですよ、ミフィーシーリア様。お気になさうす」

ぱたぱたと手を振りながら答えた弟に、その姉が面白くなさそうな視線を向けた。

「随分と私とミフィイでは態度が違わない？　あなたまさか、彼女に好意を持っているんじゃないでしょうね？」

「ば、馬鹿な事言わないでよ、姉さん！　よりもよつて義兄さんヒジの奥さんとも呼べるような人に、そんな想いを抱くわけないじゃないか！」

真っ赤になつて必死に弁解するジークントに、リーナはあやしいわねと一言呟くと彼を呼びつけた理由について尋ねる。

「それで？　子供ができる事について、何か心当たりはある？」
「それはやつぱり、義兄さんの異能の力が強すぎるからじゃないかな？」

「異能？」

姉の聞き返しに、弟はそつだよと答える。

「理由は判つていなけれど、異能持ちには子供ができるにくらいという説があるんだ。そして、その異能の力が強ければ強い程、子供ができるにくいらしい」

「ここまで言つと、ジークントはここからは僕の推測であり、確証を得ているわけではないと言つて置いて先を続ける。

「異能は言つてみれば種としての突然変異なんだと思つ。突然変異体は生殖能力が低い場合が多いからね」

「それは父親か母親、片方が異能持ちの場合でもそりなの?」

「うん。両親のうちどちらかが異能を持っていると、子供ができるに
くい場合が多いそうだよ」

「じゃあ

」

姉弟の会話を聞いていたアーシアが、サリナとマイリーに視線を
向けた。

「両親共異能を持つていた場合、子供ができる確立はもつと下がっ
ちゃうの?」

「アーシイ義姉さんの言つ通り。両親共異能を持つていた場合、子
供ができる確立は更に下がるそつだよ。そして、これが義兄さんと
義姉さんたちの間にいまだに子供ができるいない最大の理由だと僕
は思つ」

ジークントは一度側妃たちを順に見回すと、改めて言葉を続ける。

「義兄さんの異能は極めて強力だ。そして只でさえ強力な異能を二
つも抱えている。アーシイ義姉さんとマリイ義姉さんの異能も、義
兄さん程ではないにしろ力の強い異能だしね。正直言わせて貰うと、
僕はアーシイ義姉さんとマリイ義姉さん、そしてサリイ義姉さんに
は子供ができる確立は極めて低いと思つてゐる」

ジークントの言葉に、アーシアとサリナ、そしてマイリーの表情
が目に見えて曇る。

やはり一人の女性として、愛する者との間に子供ができるないとい
う事実は大きな衝撃のようだった。

だが、ここに一人、別の事に衝撃を受けている者がいた。

「あ、あの……今のジークント様の言い方だと、もしかしてサリナ

言葉の途中でサリナから鋭い視線を向けられたミフィーシーリアは、慌てて言い直す。

「 サリイさんも、異能を持っているように聞こえたのですが……？」

「ええ。わたくしも異能持ちですわ。言いつこませんでしたか？」

「は、はい。初耳です……」

アーシアの『癒し』の異能は広く有名だし、マイリーの異能は先日聞いた。だが、サリナまでもが異能を持っているとは思いもしなかつたミフィーシーリアである。

「わたくしの異能は、アーシィやマイリーのよつねに見えて強力なものではありませんから」

「でも、サリイの異能はとても重宝したよね。特に『解放戦争』中は」

「どいか懐かしそうに告げたアーシアの言葉に、サリナとマイリーは揃って頷く。

ここまで話を聞かされると、当然気になるのはサリナの異能の種類である。

その思いが顔に出ていたのか、サリナはミフィーシーリアに向けて「こりと微笑むと、己の異能の種類を明かした。

「わたくしの異能は『感應』……相手の思いを読み取る異能です

「それはつまり、心が読める……と？」

「いいえ、わたくしが読めるのは相手の表層の感情のみ……例えば、ミフィさんがあたくしに対しても少し恐怖したのは判りましてよ」

淡々と告げたサリナの言葉に、ミフィイシーリアは驚いて頭を下げた。

「も、申し訳ありません！ わ、私……」

「気にしなくとも構いませんわ。心を読めると聞いて恐怖しないわけがありませんもの。それに、今ミフィイさんが本当にわたくしに対する申し訳ないと思つていても伝わって来ましてよ？」

手にした扇で口元を隠し、楚々と笑うサリナ。

「安心してください、ミフィイ。サリイの異能は誰彼構わず感情を読み取るのではなく、読もうとした相手の感情のみを読み取ります。それに、彼女のこの異能のおかげで、『カノルドス解放軍』は瓦解する事なく短時間で勝利する事ができたのですから」

マイリーの言葉から、ミフィイシーリアは彼女の言わんとした事を理解した。

サリナの異能は、解放軍に入り込もうとした間者や、解放軍を裏切ろうとする離反者を容易に発見したのだろう。

間者や離反者は軍の瓦解を容易にする。ましてや、初期の『カノルドス解放軍』は単なる反乱軍に過ぎなかつたのだ。間者や離反者は最も恐れる対象であつただろ？

「当時、庶民の参入者はともかく、貴族で我々に協力したいと言い出した連中の中には、少なくない旧貴族派の間者が紛れていきました。そんな連中をいち早く見つけ出し、対応できたのは間違いなくサリイの異能のおかげです」

「判りましたマイリー……いえ、マリィさん。私はサリイさんを信じます」

そう言つてサリナに向かつて微笑むミフィイシーリアに、当のサリナは安堵の溜め息を吐いた。

サリナは実は恐れていたのだ。自分の異能の事を知つた目の前の少女が、自分の事を恐れるようになるのではないかと。

自分が気に入つた相手に恐れられるのは、やはり気分のいいものではない。

この少女なら自分の異能を知つても受け入れてくれるという思いはあつたが、それでもやはり人の心はちょっとした事で変化する。それをよく判つてゐるサリナだけに、この少女に恐れられるのがサリナには怖かつたのだ。

だが、それも杞憂であった。

やはりこの少女は自分を受け入れてくれた。その安堵感がサリナの胸を一杯にする。

「ありがとう、ミフィイさん」

だからサリナは改めてミフィイシーリアに笑顔を向ける。自分を受け入れてくれた感謝と共に。

「あ、大変!」

その後は再び穏やかな雰囲気に戻り、それぞれお茶やお菓子を楽しんだ後。

そろそろこのお茶会もお開きにしようか、という時。
不意にリーナが声を上げた。

「私とした事が大事な用件を一つ忘れていたわ」

腰を上げかけた側妃たちが再び腰を落ち着け直したのを確認すると、リーナは一同を見回してから告げた。

「ミハイの側妃としてのお披露日の日取りが決定したのよ」

それを伝えるのを忘れていたわ、と続けたリーナ。
そして、アーシア、サリナ、マイリーは揃ってミハイシーリアに笑顔を向けた。

「おめでとう、ミハイちゃん。これで正式にミハイちゃんも私たちの仲間だね！」

「今後も何かあれば、遠慮なく頼つてください構いませんわよ？」
「そうですね。もう私たちは家族のよつなものですから」

「そういう事ね。遠慮は無用よ」

それぞれに暖かい言葉を寄越してくれる側妃たちに、ミハイシー
リアは感謝を込めて深々と頭を下げる。

「はい、皆様。これからも……いえ、これから、よろしくお願ひし
ます」

20・側妃たちのお茶会・式（後書き）

『辺境令嬢』更新しました。

えー、更新が遅れて申し訳ありません。俄に仕事が忙しくなつて、取れる時間が少なくなつてしまいまして……

申し訳ありませんが、1ヶ月一杯はこの調子のようなので、更新は週に一回ぐらいになります。

加えて、馬鹿な事にももう一本、新しい連載を始めてしまいました。『王子と付き合つ魔法のコトバ』という現代高校生を主人公とした学園モノです。まだ1話しかありませんが、もし気になつたら覗いてみてください。

では、しばらく少々更新のペースが落ちますが、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516v/>

辺境令嬢輿入物語

2011年11月21日10時22分発行